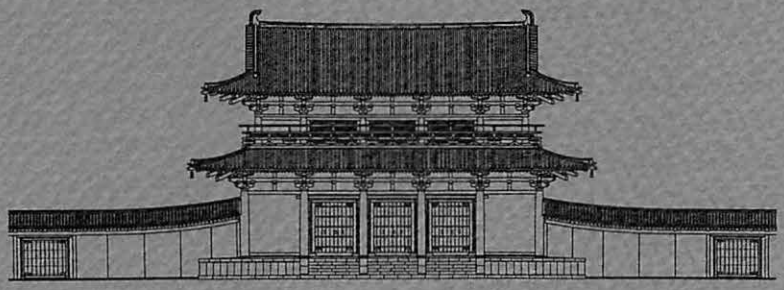
奈良国立文化財研究所年報

1993



奈良国立文化財研究所

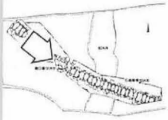
薬師寺中門・回廊
中門と先行条坊
中門と回廊
撮影 ▲井上直夫
▼佃　幹雄

薬師寺講堂・回廊
撮影　佃　幹雄

頭　塔
撮影 ◀牛嶋　茂
▶佃　幹雄

飛鳥寺南方遺跡
撮影　井上直夫

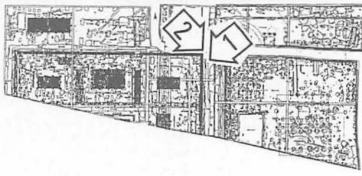
石神遺跡
撮影　井上直夫

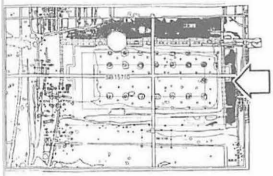


藤原京左京九条四坊
撮影　井上直夫

雷丘北方遺跡
撮影　佃　幹雄

▲平 城 宮 式 部 省　撮影　牛嶋　茂
▼平城宮式部省東官衙　撮影　牛嶋　茂





平城宮第二次朝堂院東第五堂

撮影　牛嶋　茂

平城宮宮内省の整備

▲復原された西北殿と正殿礎石　撮影　佃　幹雄

▼西北殿復原建物の内部　撮影　牛嶋　茂

目　次

口　絵

1　平城宮第二次大極殿復原屋根
2　本薬師寺中門・回廊
3　薬師寺講堂・回廊
　頭　塔
4　飛鳥寺南方遺跡
　石神遺跡
5　藤原京左京九条四坊
　雷丘北方遺跡
6　平城宮式部省
　平城宮式部省東官衙
7　平城宮第二次朝堂院東第五堂
8　平城宮宮内省の整備

飛鳥諸寺の調査……1
南都諸寺の調査……4
飛鳥諸宮の調査……9
藤原宮跡・京跡の調査……13
平城宮跡・京跡の調査……23
藤原宮跡・京跡出土の道具瓦……36
平城宮・京と同笵・異笵の軒瓦……38
平城宮東大溝SD2700出土の黒陶片……39
平城宮跡・京跡出土の木簡……40
石山寺密蔵院経蔵聖教目録……42
石器剝離面検討計測システム……46
年輪年代学(10)……48
動物遺存体の調査(9)……49
飛鳥地域出土石材の保存科学的研究(2)……50
飛鳥～奈良時代のガラス遺物の材質……51
日韓における考古遺物の材質・技法に関する分析の比較研究……52
赤外線カメラを使用した木簡文字画像鮮明化システムの開発……53
平城宮第一次大極殿の建物復原……54
平城宮第一次大極殿院地区復原整備のための基礎研究……55
平城宮第二次大極殿屋根の一部復原……56
滋賀県近代和風建築総合調査……58
楊鴻勛先生の来日と頭塔復原……60
平城宮跡・藤原宮跡の整備……61
南アジア寺院の調査……65
中国との交流……66
アフ・トンガリキ遺跡の調査……68
「古代の日本展」報告……69
飛鳥資料館の研究展示・特別展示……70
公開講演発表要旨……71
調査研究彙報……72
奈良国立文化財研究所要綱……73

奈良国立文化財研究所年報　1993
発行日　1994年3月31日　編集発行　奈良国立文化財研究所　印刷　日本写真印刷㈱

表紙カット　平城宮朱雀門復原図

平城宮第二次大極殿復原屋根▶
撮影　牛嶋　茂

飛鳥諸寺の調査

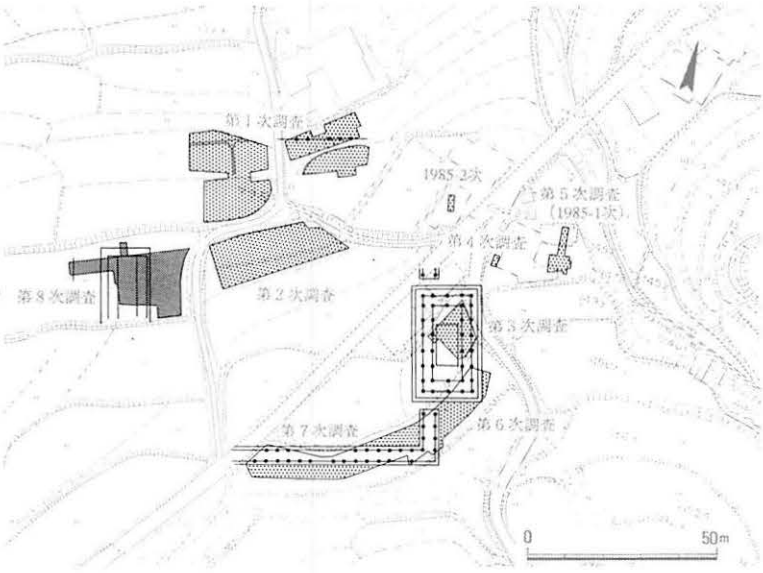
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1　坂田寺跡の調査（坂田寺第８次）

奈良時代の坂田寺の西面回廊が想定される南北里道に西接した水田における家屋新築に伴う事前調査である。検出した遺構は上下２層に分けられる。上層遺構には基壇をもつ掘立柱建物１棟（SB200），それに伴う柱列２条（SA210・211），土坑２基（SK198・SX213），雨落溝などの溝３条（SD205・215・224），基壇の縁石や溝の護岸などの石列８条（SX201～203・212・220～223）がある。下層遺構には土坑１基（SX226），炉址１基（SX225）がある。

掘立柱建物 SB200　調査区中央で検出した南北棟で，梁間２間の身舎の東西に庇がつき，桁行は６間以上である。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.7m（９尺）等間で，庇も同様である。身舎の柱掘形は1.1×1.5m の長方形で，深さ約1.2m，柱痕跡は直径約20cm である。一方庇の柱掘形は身舎より小振り（一辺0.9×1.0m，深さ0.6m）で，柱痕跡の直径も15cm と細い。SB200は縁石を巡らせた基壇をもち，東・北・西辺（SX201・202・203）で確認した。縁石は直径30～40cm の自然石で，原位置を保つ北半の縁石基底部で測った場合の基壇東西幅は約12.8m である。建物から基壇縁石までの距離は，東で0.6m，（２尺），北で2.7m（９尺），西で1.5m（５尺）と異なり，見かけの基壇高も一定しない。東辺では縁石の下底部は南が0.2m 高く，東西は東が西より約0.5m 高い。基壇上面が水平であった場合，基壇高は西北部で1.1m，東南部で0.4m と推定される。これらのことは建物の構造や正面観と関わる重要な点である。つまり西面が伽藍の正面だったのだろう。なお東庇の柱掘形は基壇縁石の下で検出された。

SB200内には南北柱列SA210と東西柱列SA211がある。柱穴は一辺0.8m の方形で，深さ0.4m。底に20～30cm 大の石を置き，礎盤とする柱穴もある。SA210はSB200の身舎梁間の1/3の位置にあり，柱間は2.4m（８尺）等間。SA211の柱穴はSB200の身舎梁間を３等分する位置にある。これらは床束か。



坂田寺調査位置図（１：2000）

SB200の基壇内には北から一間目の身舎梁間間に土坑SX213，石列SX212がある。ともに基壇築成時に形成されたもので，性格は不明である。SX213は東西2.9m，南北1.8m，深さ0.5mで，下層に木炭細粒層が堆積し，その北端は基壇土の間に入る。木炭細粒層の上を覆う黄色粘土層中にSX212がある。石列はSB200の柱筋の方向に並び，30cm大の石を2～3段積み上げる。

基壇縁石の外側には幅1m前後で深さ0.3mの素掘りの雨落溝SD205・215がある。

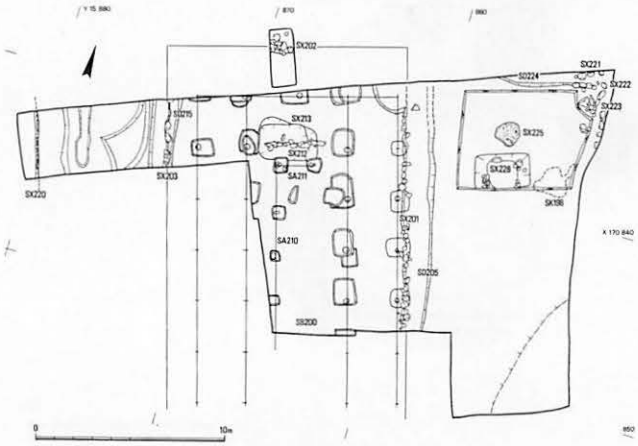
その他の遺構　基壇西縁石から西へ6.9mの位置に基壇に平行する南北小石列SX220がある。その西側は0.35m低くなっているので，幅0.9m以上の南北溝の東護岸の可能性が高い。

基壇の東側には7世紀の瓦片，鴟尾を大量に含む黄灰色粘土の整地層があり，北で厚く，南で薄い。整地層上面から浅い不整円形土坑SK198が掘り込まれ，平城Ⅳの土器が多量に出土した。整地層の東端には東西石組み暗渠の側石SX221・222があり，暗渠は西で素掘り溝SD224につながる。石列SX223は西に面を揃えて南北方向に並ぶ。その背面の積土層が第2次調査で確認した段状の盛土に類似することから，西面回廊の西側基底部の一部と考えられる。

整地層を一部で除去したところ，下面の灰褐色砂質土層上面で，下層遺構の土坑SX226と炉址SX225が検出された。SX226東西3m，南北1.8m，深さ0.6mで，短辺と同一方向に並ぶ石列と埋土から投棄された石がみつかった。これは本来掘形の内側に石を積み上げ，内部に貯水などをする施設だったと推定される。SX225は直径約1.1mの炭化物層で，SX226と同一検出面に広がっていた。ただしその下面に長期使用を示す焼け面はなかった。

遺物　土器は7世紀前半から12世紀後半までの各種がある。土師器には灯明皿や坂田寺の法号「金剛寺」の省略と思われる「金」の墨書を残すもの（平城Ⅳ）がある。瓦は坂田寺式の重弁蓮華文軒丸瓦6型式など7世紀代の軒丸瓦を主体とする。また坂田寺B型式の鴟尾のほぼ全形を復元しうる各部の資料を得た。さらに「西廿六」と箆書きした塼もある。このほか土製小仏像の頭部破片や竹の節の表現がある小金銅仏の光背支柱が注目される。

まとめ　遺物の検討によって，SB200は8世紀前半代以降に造営され，10世紀代には廃絶されたといえる。この基壇の北縁は北面回廊の基礎とみられる石垣SX210と揃うので，SB200は奈良時代の伽藍と併存していたと推定される。伽藍の正面を西と仮定すると，SB200は中門と南門の間に位置することになり，他の平地寺院と同様に考えることができない。その解明も含めて，坂田寺の寺域や伽藍の範囲の早急な確認が望まれる。



坂田寺調査遺構図（1：400）

2　飛　鳥　寺　の　調　査（飛鳥寺1992－1次）

この調査は住宅建設に伴い，飛鳥寺の塔の真東，伽藍中軸線から約140mのところで実施した事前調査である。検出した遺構は，礎石建ち基壇建物（SB840）1棟，石列（SX852）1条，南北溝（SD860），東西溝（SD845・862）2条などである。

基壇建物SB840　基壇は0.5mの高さで，まず旧地表面から0.11mの深さまで掘り込み，15層前後におよぶ版築を行って築成されている。基壇の西面には石積みによる外装が残る。ただし調査の制約から東・北両面を確認できなかったため，基壇の規模は不明である。基壇上でみつかった礎石抜き取り穴から，建物規模は東西3間以上，南北2間以上で，柱間寸法は東西が4.05m等間で，南北は2.85mである。礎石は花崗岩である。東西の礎石抜き取り穴の間には，凝灰岩小片を含む浅い溝SD842がある。凝灰岩製地覆石の抜き取り溝であろう。建物は北で西に8度の振れをもつ。なお礎石据付け掘形からは7世紀後半の土器が出土した。

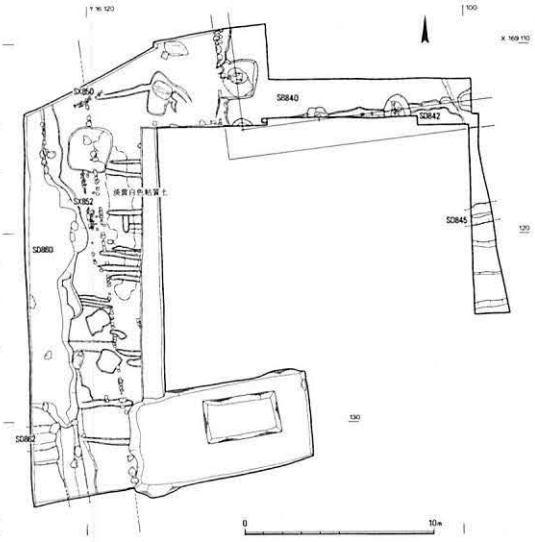
石列SX850　SB840の西の柱位置から西に8.1m（27尺）のところにあり，SB840と同じ振れをもつ石列である。おそらくSB840の基壇周囲にあった犬走りの西側の見切りであろう。

南北溝SX860　SB850から西に2.7m（9尺）のところにあり，東岸に石組の護岸の一部が残るので，本来は石組溝であった。溝幅は1.2m，深さ0.6mである。溝の埋土からは10世紀後半の土器が出土し，溝はこの頃まで機能していたことがわかる。

その他の遺構　SX850の西に瓦列SX852が平行してあるが，部分的にしか残っていないので，性格は不明である。東西溝SD862はSD860と直角に合流か分岐する。幅1.3m，深さ0.25m。調査区東辺で検出した東西溝SD845は幅1m，深さ0.25mの素掘り溝である。

遺物　蓮華文軒丸瓦Ⅰ・Ⅵ・ⅩⅢ・ⅩⅣ・ⅩⅦ～ⅩⅩ型式，重弧文軒平瓦Ⅰ・Ⅲ型式（今回五重弧文をⅢとし，四重弧文の旧Ⅱ・ⅢをⅡA・Bとする）などのほか整理箱240杯分の丸・平瓦が出土した点が注目される。

まとめ　SB840は7世紀後半の築造で，柱配置からみて東門となる可能性は低い。これは寺域の東限を画する塀SA600より内側に位置するが，建物，SX850，SD860の振れはSA600とまったく同じであり，SD860で画された一郭があったことも考慮する必要がある。SB840の候補として，壬戌年（662）三月に道照建立とされる禅院が挙げられるが，断定はできない。SA600の延長線にあるはずの東門の確認など，寺域東限の確定は今後の重要課題である。　（佐川正敏）



飛鳥寺東南部調査遺構図（1：400）

南都諸寺の調査

平城宮跡発掘調査部

1 薬師寺の調査（第233次）

伽藍復興のための事前調査。調査区は，伽藍中軸線をはさんで，1990年度の講堂東端および北面回廊の調査区と東西対称の位置にあたり，講堂西端および北面回廊を検出した。

講堂は当初の基壇土である精良な橙色粘質土が全面に残存し，北面には化粧の凝灰岩切石，南西面には雨落溝の一部を遺存している。礎石跡ないし抜取穴を13箇所検出した。掘形は一辺1.4～1.8m の方形で，抜取穴は不整形であるが，根石を留めるものがある。これらから復原される当初の講堂の柱間寸法は，身舎桁行4.5m（15尺），梁行5.1m（17尺），庇の出３m（10尺）と，1990年度調査の知見と一致する。但し，今回は裳階の痕跡は見出せなかった。北側に残る凝灰岩地覆石の幅は25～35cm，長さも60～140cm と一定しない。地覆石は現状の外端から約６cm ほどのところで一段くり込みを入れて内側を1.5cm 低くし，羽目石との仕口としているが，羽目石は残っていない。雨落溝は側石である二条の玉石列ないしその抜取跡が断続的に残り，内法幅は35～40cm ほどに復原される。

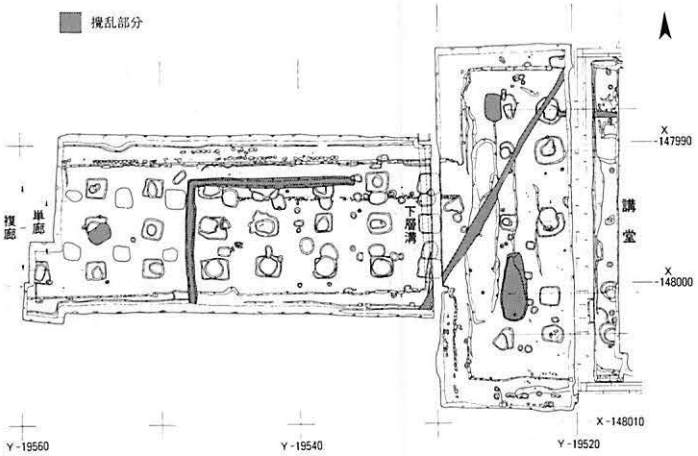
北面回廊は講堂基壇の西端から西へ32m に亘って，従来の知見と同様，単廊・複廊の２時期の礎石据付穴を重複して検出した。基壇は地山の上に一層積むだけで，残存状況は悪い。単廊は桁行・梁間共に3.7m（12.5尺）に復原され，講堂取付部も含めて８間分を確認した。最も残りのよい東端部，特に取付から２間目周辺では上面の化粧ないしその下地と思われる漆喰の層が残っており，また取付を含めて東から５間目までの，北すなわち外側の柱筋上に，瓦片を並べた，連子窓腰壁の壁持地覆を検出したことが特記され，単廊がある程度建ち上っていた可能性を明示する。単廊の南北両側は，複廊への改修時に付加された基壇土が一層覆うが，その北側下層で当初の単廊基壇を整形した端部を確認しており，柱筋からの出は1.3m である。これにさらに化粧の側石が加わると想定すると，単廊の基壇の出は５尺，基壇の総幅は22.5尺の計画であったと推定される。複廊は礎石据付穴およびその抜取穴を８間分検出した。基壇北面の地覆石はほぼ完存しており，最東部は羽目石の残欠も残っていた。地覆石の幅は24～33cm，高さは約24cm で一定である。羽目石は厚さ約33cm，高さは北側に転落した１枚が全高を留めており，38cm という値を得，これは基壇高を復原する際に有効な根拠となる。一方，南面の化粧石は羽目石状の板石であるが，足元で幅を広めており，地覆石と羽目石を一体にした形式で，北面とは様相を異にしており，回廊内外での意匠の違いを示している。柱間寸法は，桁行4.05m（13.7尺），梁行2.95m（10尺）という計測値を得た。また地覆石外側に玉石を並べ，約40cm の間隔を置いてもう１列の玉石列があり，この間が北雨落溝となるが，底石はない。雨落溝の心は地覆石外側より60cm（２尺）であり，複廊の軒の出は８尺に復原される。

その他，調査区東寄りに南北に設定した断面観察用の畦際で基壇下層の南北溝を検出した。

幅40cm，残存の深さ約10cmで，方向は回廊の梁行より北でやや西に振れ，埋土には遺物を含まない。粘土で丁寧に埋め戻されており，回廊基壇造成に先行する仮設の排水溝または地割りの溝であろう。また回廊東端部の基壇上部では中近世の建物跡の柱穴を検出している。なお，回廊基壇断面で，地震の際の液状化跡である噴砂を観察した。

遺物は瓦が多く，境内他地区と同様，奈良時代の軒瓦では6276型式，軒平瓦では6641型式が卓越しており，また軒平瓦では天禄火災以後のものと考えられる6339型式が特に多くを占めるのが注目される。その他，中・近世の瓦も多く出土している。

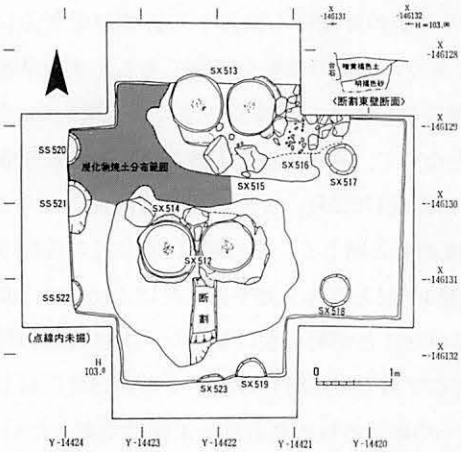
今回の調査では，単廊の造立と移築の可能性が浮かび上がった点が注目される。従前の「単廊の礎石を据えた程度の段階での複廊への計画変更」という推定から，単廊自体がある程度建ち上っていた可能性，さらに本薬師寺からの回廊の移築の可能性も検討する必要が生ずるに至った。しかし，本薬師寺の回廊の調査は未着手であり，今後の重要な課題である。また単廊の東西規模に関しては，今回検出した単廊東端の推定柱位置から講堂側柱までの距離5.6mを18.75尺と考えると，裳階への取付の柱間は12.5尺となって，単廊の柱間と等しく，さらに単廊桁行を隅の間を含めて従来通りの片側11間とすると，総長412.5尺，すなわち東西回廊の心々で400尺という完数を得る。ちなみに講堂は，1990年度調査と同じく，桁行総長137.5尺と復原され，この数値は12.5尺の11倍であり，単廊の東西規模400尺とそれを32等分した12.5尺という基準寸法が，講堂の規模設定とも密接な関係を持っていたことが明らかになった。次に複廊の柱間寸法については，梁行は東半の1990年度調査と同じであるが，桁行は東半での13.5尺に対して13.7尺を妥当と考える。東半では複廊西端の講堂への取付の柱の礎石跡を未検出であったが，今回は取付部分の寸法が講堂側柱まで5.4mであり，単廊よりやや短いことを確認した。これを仮に18尺と考え，複廊の規模を隅の間を含めずに片側8間と仮定すると，東西規模は心々で400.5尺となって，ほぼ単廊と等しい値になるのが注目され，講堂への取付寸法の考え方次第では，複廊の東西規模も単廊を踏襲していると復原し得る。



薬師寺講堂・回廊調査遺構図（1：500）

2　東大寺南大門の調査（第234-2次）

東大寺南大門阿形像解体修理に伴う，再安置の際の基壇上面の整備の事前調査。今回の調査は吽形像側の地下調査の所見に基づく整備が目的であり，掘り下げは吽形像側で確認された鎌倉時代の面を目安として，10cm 程度行った。上から１層・三和土，２層・明褐色砂質土，３層・暗黄褐色土，４層・褐色土という層序が認められる。遺構としては，調査区の北側と南側，つまり阿形像の右足元，左足元で，各々の東西に並ぶ２石の台石 SX512・513およびそれらの周囲の自然石 SX514・515，礫敷 SX516などを検出した。SX512・513は礎石を転用したもので，上面に径70cm ほどの作り出しを持つ。SX512・513の掘形は４層から掘り込まれ，３層を敷き固めて台石を固定し，同時に SX514～516を固定したことが確認できた。また調査区西南部で４層上面に炭化物・焼土が広がっているのを確認したが，堆積は非常に薄く，炭化物・焼土ともに粒子状にまばらに分布しており，火災などによるものとは考えられず，またこの広がりは台石掘形に切られており，台石設置以前の堆積であるから，南大門焼失の可能性はさらに弱まったといえる。なお，足場穴 SX517～522，皿状土坑 SD523はともに明褐色砂の埋土を持ち，昭和５年の解体修理の際の遺構と思われる。遺物は足場穴と２層中から近世の陶器片・瓦片・寛永通宝などの貨幣，石片，鉄片，４層上面でかわらけの小片が出土した。



東大寺南大門調査遺構図（１：100）

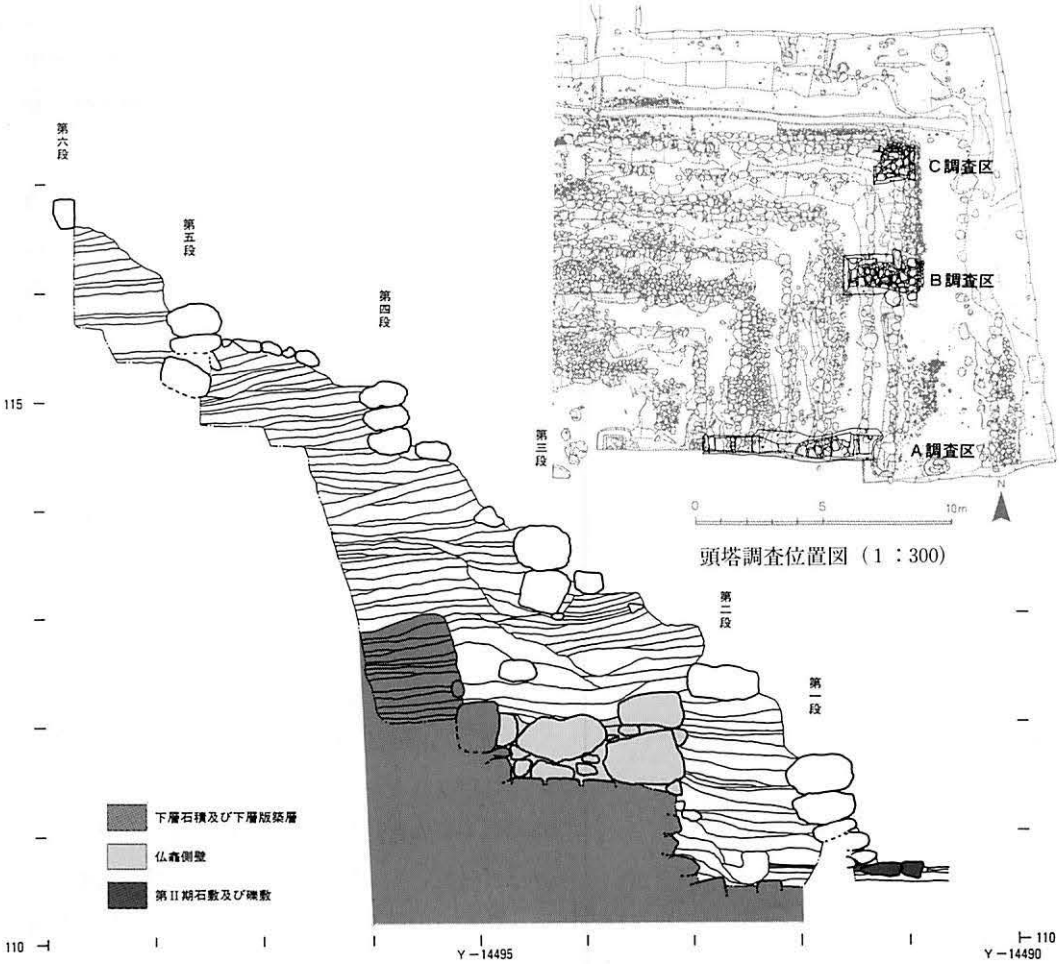
3　頭塔の調査（第237次）

奈良県教育委員会が行う復原整備に伴う事前調査。1992年度調査で設定した東面中央トレンチをさらに掘り下げ，積土内部の築成手法を解明するとともに，土層断面のはぎ取りを行った（A 調査区）。また今年度は東面北半部の基壇および塔本体の石積を修理・復原することになり，石積の解体工事を実施した（B・C 調査区）。最下段（第１段）の石積は基本的に解体しない方針であったが，樹木の根に押されるなどして傾いている部分があり，その石を一旦取り外して据え直すことになったのでその部分にトレンチを設定し，第１段石積の下にもぐり込んでいる礫層および石敷の広がり，現存する石積との関係などを明らかにした。

A 調査区では，塔本体の七段石積（上層石積）造営以前に造られた階段状の石積および仏龕状の石積を検出し，この下層石積を発見したのが大きな成果である。下層石積の平面位置は上層第２段目から第４段目の間で，上層第１段石積前面から約1.7m のところである。下層石積は基底部が２段の階段状を呈しており，その上に径30～50cm の石を５～６段に積む。残存する石積の高さは約1.8m である。この下層石積は，B 調査区では同様の形状を持つ石積を検出したが，C 調査区では検出できず，北端は確認できなかった。また B 調査区では，前回までの調査で３

時期の変遷を確認していた基壇上面石敷のうち，第Ⅰ期基壇上面石敷が下層石積の階段状の基底石に接続することを確認し，下層石積に伴う石敷であったことが判明した。なお，下層石積に伴う土層からは遺物は見つからなかった。以上の下層石積については全体の規模，構造や築造時期などは不明であり，神護景雲元年（767）に東大寺の僧実忠が築造したという「土塔」との関係を明らかにするのが今後の課題となろう。

その他，第Ⅱ期基壇上面礫敷は第Ⅰ期基壇上面石敷を約10cm埋めた上面に敷いたもので，上層第１段石積の内側へ潜り込むが，Ａ・Ｂ調査区では攪乱または削平のため途中で消滅しており，十分な確認ができなかった。Ｃ調査区ではトレンチ全面に礫敷を検出し，その延長が下層階段状基底石２段目上面付近にあたることを確認した。この第Ⅱ期基壇上面礫敷と下層石積の関係を究明することも今後の課題である。なお，遺物としては，上層石積に伴う版築層から，丸瓦73点・平瓦368点が出土しており，Ｂ調査区では土師器（Ⅲ C）１点が出土した。



頭塔調査位置図（１：300）

Ａ調査区北壁土層図（１：70）

4　法華寺旧境内の調査（第234-3・15次）

第234-3次調査は住宅建設予定地の事前調査，第234-15次調査は奈良市下水道工事の事前調査。双方とも推定金堂位置に近く，遺構が関連するので，一括して報告する。法華寺金堂については，第82-6次・98-21次調査で，前身建物の掘立柱の柱抜取穴に凝灰岩の根巻き石を投棄し，その上に礎石を置いたと思われる柱穴１個を含む，４間分の柱列を検出している。今回の調査でも，明白な根石を持つ礎石柱穴２箇所を検出し，これらはすぐ北の第82-6次調査で検出した柱穴と性格が似ており，その南北間距離も約30尺と適当であるため，SB01を金堂身舎と考えた。但し，庇柱は検出しておらず，また第98-21次調査ではその範囲に礎石掘形を検出していないので，可能性としては，SB01は前身建物の位置・規模をそのまま踏襲したものではなく，庇柱位置では礎石を新たに据え，その掘形が浅かったために削平された場合が考えられる。しかし，これまで伽藍中軸線とされていたＹ＝-17,686付近がSB01の西端になること，第174-22次調査で検出した東西方向の雨落溝が回廊のものであるとすれば，SB01の北庇想定位置に接続し，これまで知られる伽藍配置とは異なることなど，不審な点も多く，今後の調査で庇柱や妻柱の検出が期待される。なお，特筆すべき遺物として，SB01の礎石根石中から奈良時代の新種の軒平瓦が出土した（図参照）。

その他の遺構としては，SB02は東西方向・南北方向ともに10尺等間の掘立柱建物，SB03はそれに切られたより古い掘立柱遺構で，ともに法華寺が礎石建で整備される以前の建物であるが，法華寺の前身建物か，それ以前のものかは不明である。SB04は推定金堂SB01のように掘立柱の前身遺構を持っておらず，礎石建で新造されているが，検出範囲が小さく，現時点では性格不明である。掘立柱SS08，SS09は各々５尺間，６尺間で，柱間が小さいので柵列かと思われるが，建物の一部の可能性もある。

新型式軒平瓦
（１：４）

法華寺旧境内調査遺構図（１：500）

遺物には，前述の新種の軒平瓦の他に，軒丸瓦6138A，軒平瓦6667A・C，6713A，6714Aなどがある。また近世の土坑SK05から多量の瓦，凝灰岩，緑釉の塼，土器類が出土している。凝灰岩は近辺のものが投棄されたものであろうから，この辺りに凝灰岩基壇が存したと考えられる。　（森　公章）

飛鳥諸宮の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1992年度に飛鳥地域において実施した石神遺跡・飛鳥寺南方遺跡・山田道の調査概要を報告する（調査一覧参照）。

1　石神遺跡の調査（石神遺跡第11次）

今年度も旧飛鳥小学校の敷地を調査した。今回の調査地は第４次調査区の西，第10次調査区の北にあたる。従来検出した遺構は，大きくＡ期（７世紀中頃：斉明朝），Ｂ期（７世紀後半：天武朝），Ｃ期（７世紀末～８世紀初頭：藤原宮期）に分かれる。今回の調査ではＡ期とＣ期の遺構を検出した。

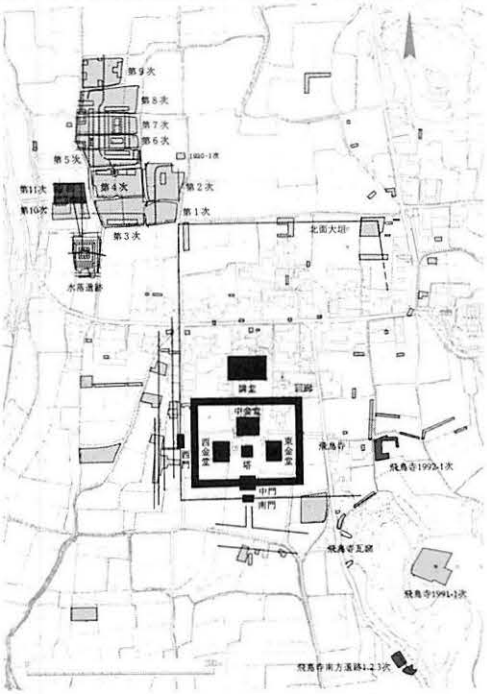
Ａ期　飛鳥寺寺域の西北に東西塀SA600が作られ，その北側に石神遺跡（斉明朝の饗宴施設）が，南側に水落遺跡（斉明六年〈660〉に中大兄皇子が作った漏刻台＝水時計）が形成された時期である。９次調査の段階まではＡ期を３小時期に細分してきたが，今回はおおむねＡ－３期の遺構に限られるようである。今回の調査によって，該期の西区画南端部の様相が明らかになった。

検出した遺構は掘立柱建物４棟（SB1700・1701・1702・1703），掘立柱塀１条（SA1705），溝３条（SD297・1625，SD277・1595・1713・1714，SD1715・1716），石敷７面（SX1706・1707・1708・1709・1710・1711・1712）以上である。

SB1700は東西５間，南北３間の身舎の四面に庇がめぐる東西棟である。ただし南庇の両端の柱を欠くので，入隅の構造となる。柱間寸法は桁行2.3m，梁間2.2mで，庇の出は1.5mである。身舎の柱掘形の一辺は２m，深さは1.7m程で，庇のそれに比べて大きい。なお基壇土が一部残っている。

SB1701・1702はSB1700の北にある桁行３間，梁間３間の総柱東西棟で，ともに側柱筋を揃えている。SB1701の西妻柱筋はSB1700の身舎のそれに揃えている。柱間寸法は桁行2.5～2.6mで，梁行1.9～２mである。SB1701には基壇土が残り，SD1715・1716は基壇外装地覆石の抜き取り痕跡であろう。

SB1703はSB1700の東にある長大な東西棟で，さらに東へ延びる。柱間寸法は梁間３m，桁行2.7mであるが，西から４間目だけが3.3mと広い。この部分SX1704は通路の可能性がある。



飛鳥地域調査位置図（１：8000）

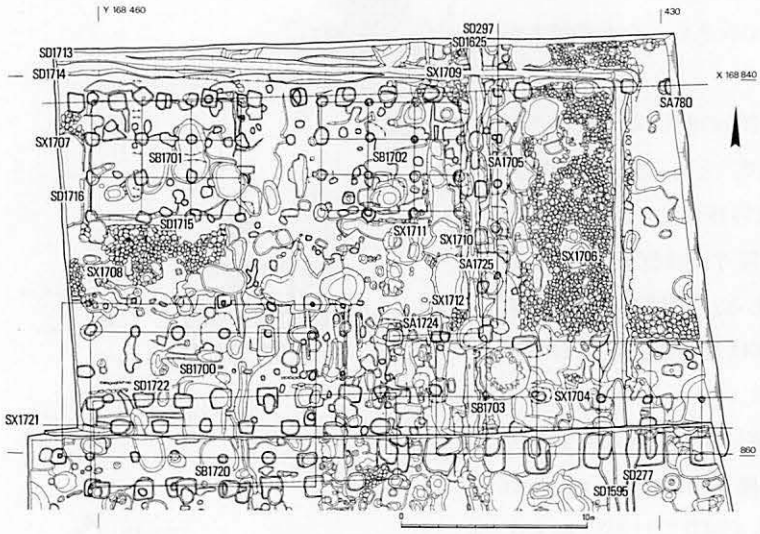
棟通りの柱掘形は1m前後で，西妻，側柱のそれに比べて小さくかつ浅いので，床束と思われる。なおSB1703はSB1700と棟通りを揃えている。

以上の建物の周りには石敷がある。SB1700とSB1701の間にはSX1708・1715が，SB1701の西にSX1707がある。SB1702の北にSX1709が，南にSX1710・1711があり，SB1703の北にSX1706・1712がある。石敷はA期の建物の柱筋に合わせて縁を通しており，建物の外部はすべて石敷であったことになる。石敷は通路や広場としての機能のほかに，雨落ちも兼ねていたであろう。

SA1705は石敷SX1706の西縁の見切りとSX1710の東縁の見切り（間隔2.7m）の中央を通る南北塀で，SB1703北の広場と建物群を画する。柱間寸法は2.5m等間で，5間分を検出し，さらに北へ延びる。SA1705の南端はSB1703の北側柱に直接取りつかない。

SD297・1595・1713は水落遺跡から延びてくる木樋などを抜き取った痕跡で，SD1595・1713が木樋Eに，SD297が木樋Hの抜き取り溝に相当する。ともに水落遺跡から70m以上延びてきたことになる。SD1595は調査区北端で西へ折れてSD1713へ連なり，SD297はさらに北へ続く。これらの抜き取り溝の両側には木樋埋設時の掘形があり，SD277がSD1595に，SD1714がSD1713に，SD1625がSD297に各々対応する。掘形は幅約1.7m，深さは0.8mである。掘形に木樋を据えつけたのち，版築状に埋め戻し，その上に整地土を置き，さらに石を敷いている。SD1713とSD297は調査区北端で交差する。ここは一辺1.2m程の方形の掘形が深いので，枡のような施設があったようだ。なお抜き取り溝に焼土が含まれていることから，木樋を抜き取ったのは周辺の建物が焼けたあとのことである。

C期　掘立柱建物（SB1720）1棟，掘立柱塀（SA780・1725）3条などがある。ほかに検出した土坑の大半は，出土遺物からみて，当期に属すると考えられる。



石神遺跡第11次調査遺構図（1：400）

SB1720は梁間2間桁行7間の東西棟で柱間寸法は桁行・梁間とも2.3m等間である。軸線は北で西へ約2°振れる。北側に部分的に残る石組溝SD1722は北雨落溝である。

SA780は調査区北端を横断する東西塀

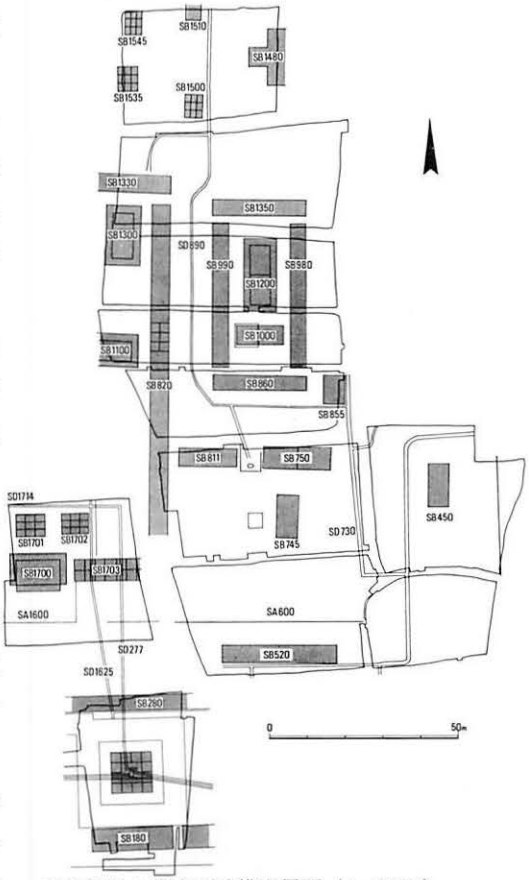
で，13間分を検出した。柱間寸法は平均2.4mである。これは第4次調査で検出したC期の区画南限施設の東西塀SA780の西延長上にあり，一連のものとすると，その総延長は25間（60m）以上となる。南北塀SA1725は北で東西塀SA780におそらく取りつき，南端で鍵の手に折れ，SA1724となる。SA1724の西端はSB1720の東妻柱筋延長上に位置する。柱間寸法はともに2.4m等間である。これらの塀はSB1720とほぼ同様の振れをもつ。

出土遺物　注目すべきものに文字を篦書きした須恵器（別項参照），東国系の黒色土師器杯，外表に白土を塗り壁小舞の痕跡のあるA期柱穴出土の大量の壁土，第4次調査出土例と同一個体の新羅製獣脚円面硯，体部に2条の凹線と3条の小突起列がめぐる施釉陶器などがある。基部が四角錐形で先端の鋭く尖る突起と深い椀形の器形からガラス或いは金銀器の椀か高坏の模倣と思われる。内外の施釉は淡緑～淡黄色で，蛍光X線分析の結果は銅を発色剤とする鉛釉であり本来は緑色単彩とみられる。我が国の鉛釉陶器の出現期である7世紀後半～末の土器と伴出し，鉛同位体比の分析結果が待たれる。

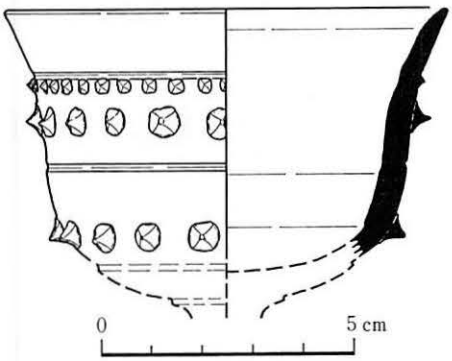
まとめ　今回の調査によって，A期の西区画の様相がより明らかになった。SB1703とSB820の位置関係は，旧小学校の里道下の調査を待って決すべきだが，東区画の建物配置を参考にすれば，SB1703の桁行は9間で，その東妻柱筋と北側のSB820の東柱筋，そしてSB1330の東妻柱筋が一致する可能性がある。SB1700の中軸線を西区画の中軸線と仮定すると，西側にはSB820･1703に対応する建物があり，西区画が東区画に比べて大規模な建物配置になることが予想される。

水落遺跡に発した木樋が石神遺跡の奥深くまで延び、さらに北と西へ続くことも判明した。両遺跡の密接な関連を示している。今後の調査で，木樋の行方も明らかになろう。

C期のSA780が予想通りで検出でき，さらにその南方にC期としては大きい建物のSB1720がみ



石神遺跡A期主要遺構配置図（1：2000）



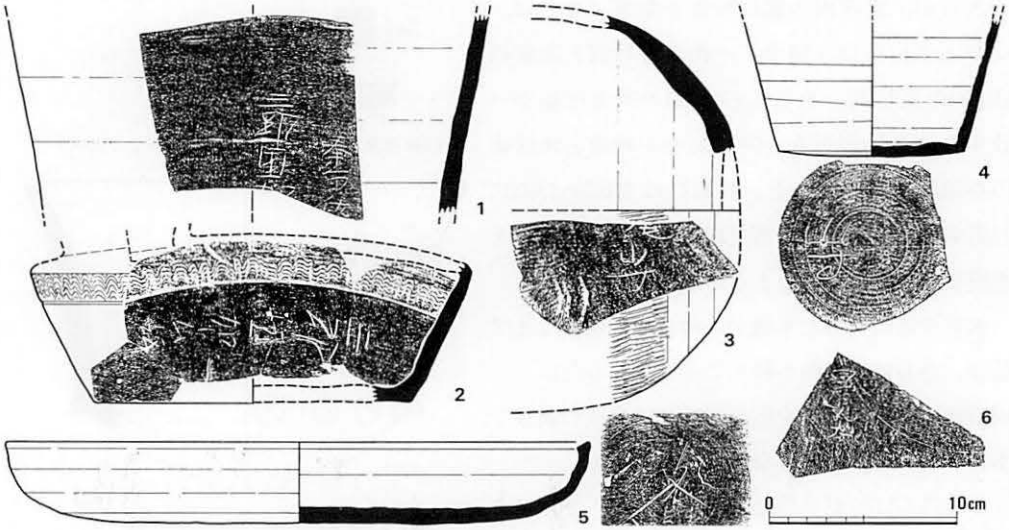
鉛釉陶器（2：3）

つかり，藤原宮期まで当地が総体として使用され続けたことも確実になった。なおSB1700より新しいSX1721は東西塀になる可能性があるが，所属時期は今後の課題である。　（佐川正敏）

石神遺跡出土の箆書き土器　石神遺跡では第５次調査の短頸壺「瓮五十戸」をはじめ文字を箆書きした土器が藤原宮期までの包含層あるいは土坑から10点余出土している。それらには文字の内容や土器の特徴から生産地の推定が可能なものがあり，律令制成立期の土器の生産と供給の様相を考える上でも貴重である。ここでは東海地方産と推定できる須恵器について，今回の第11次調査出土例と過去の調査での出土品を併せて紹介しておきたい。

第11次調査の１は大型直口鉢の体側部に縦位２行に「秦人マ佐□／三野國加□」と書く。２は平瓶の体側部に横位に書かれ，「三野國加々ム（牟）評□」と判読される。体部上半の櫛描波状文と沈線はこの時期としては特異で，類例は岐阜県各務原市尾崎大平窯跡群にあり箆書きの国評名と一致する。ともに大宝令施行以前の国評制下の生産地で書かれたことは明白である。１の秦人部は大宝２年の御野国戸籍にみられ，国評名＋人名の表記は福岡県大野城市牛頸窯の甕口縁部の文字や荷札木簡の表記とも共通し，納税主体を意味するとも考えられよう。３～６は第４・７次調査出土で「尾山寸」「山寸」「久」の文字は愛知県小牧市篠岡78号窯に類例があり，器形や胎土，色調なども篠岡古窯跡群を含めた尾北古窯跡群のそれに類似する。「尾山寸」「山寸」の意味は「尾（張）寺」「寺」あるいは「尾（張国春日部郡）山村（郷）」と推定されている。６は直径40cm代の盤の底部に達筆に書かれた「黒見太」で，愛知県名古屋市東山105号窯の擂鉢，正木町遺跡の長頸壺には「黒見田」の文字がある。黒～緑色に発色する内外面の鉄釉も猿投窯の特徴と一致し、同様の「瓮五十戸」とともに猿投窯の製品と考えられる。

以上の諸例と類似する土器を美濃・篠岡（尾北）・猿投窯の製品とすると，それらは７世紀後半の飛鳥地域に一般的な存在であり，東海地方の窯の性格を示唆するものと考える。（西口寿生）



箆書き土器実測図・拓影（１：４）

2　飛鳥寺南方遺跡の調査

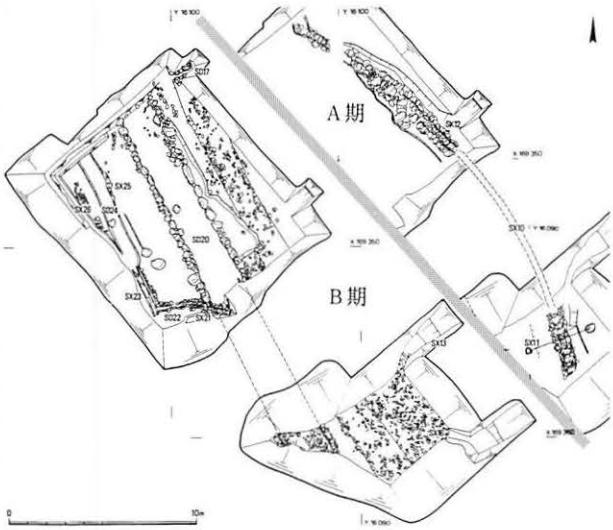
この調査は広域下水道立坑の掘削地の選択に伴い，飛鳥寺瓦窯の南方で３次にわたり実施した事前調査である。今回北を飛鳥寺の寺域南限，南を伝飛鳥板蓋宮などの宮殿遺構の北限（未確定），東を酒船石が所在する丘陵，西を飛鳥川によって囲まれた平坦部の，７世紀代を中心とする遺構群を飛鳥寺南方遺跡と仮称する。みつかった石組溝や暗渠は飛鳥寺南方遺跡の東の基幹排水路といえ，層位と切り合い関係からＡ～Ｃ期の３期に分けられる。

Ａ期（７世紀中～後期）には東側の丘陵岩盤を削って傾斜面SX13とし，それに沿って幅・深さが約0.8mの石組暗渠SX10を設置する。SX10の埋土最下層からベニバナの花粉が大量にみつかったので，上流に染色関連の工房があった可能性がある。

Ｂ期（７世紀末～８世紀代）にはＡ期遺構上に整地をしたのち，幅1.7～２m，深さ約0.8mの石組溝SD20を設置する。そしてSD20から木樋SX21と石組溝SD22を通して木樋SX23に水を取り入れる。のちにSX23の続きの木樋は抜き取られSD24となる。石列SX25の存在から，SD20の西に幅約２m，高さ0.2mの堤があった可能性がある。さらにSX25の西は全面石敷であったれ，SX26はその一部であろう。柱列SX11は1.7m等間で２間分検出したが，性格は不明。

Ｃ期（９世紀～10世紀）にはSD20がまだ存在し，その約１m東に石敷舗道SF15を設置する。そして丘陵からの雨水を舗道を横断してSD20に流すために石組溝SD17を作る。またSF15の東には石敷16がある。この上から９世紀末から10世紀初めにかけての土師器が出土している。

調査区付近は従来から水の利用に関わる多様な形態をもつ遺構が集中する特殊な地域と考えられてきた。今回検出した遺構はそのなかでも最大の規模がある。とくにSD20は北で西に曲がり，飛鳥寺の寺域を避けてその南を通り，飛鳥川に流れると推定される。また飛鳥京跡第28次調査の石組溝などと一連の施設であった可能性がある。



飛鳥寺南方遺跡調査遺構図（１：400）

3　山田道の調査（山田道第５次）

県道橿原神宮東口停車場飛鳥線拡幅工事に伴い，雷丘の東で実施した事前調査である。調査区中央にはかつて南北方向の谷が走り，それとおそらく谷に注ぐ東西溝SD2805が７世紀後半に整地で埋められる。そして，SD2805の上に設けられた藤原宮期の東西溝SD2800は，想定山田道SF2607の北側溝SD2540の西延長線上にあたる可能性がある。さらに時期は不詳だが，粘土採掘坑とも推定される一辺約３m，深さ0.6mの土坑が多数残される。　（佐川正敏）

藤原宮跡・京跡の調査

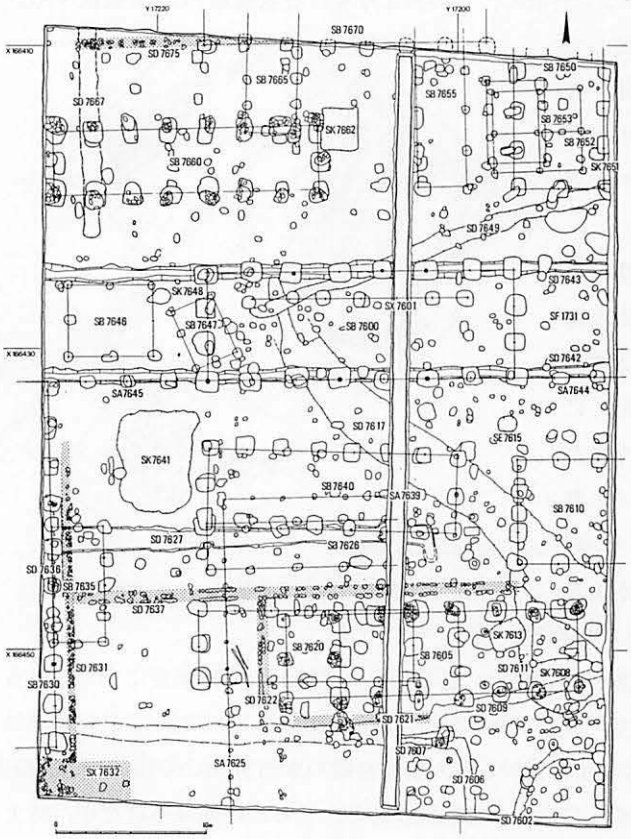
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1992年度には，藤原宮跡内で10件，京跡内では10件の調査を行った（22頁の調査一覧参照）。宮跡内の調査は内裏西外郭地区と東方官衙地区での計画調査および西方官衙地区南部での事前調査のほかは小面積の事前調査である。京跡内では雷丘北方遺跡の調査を継続し，懸案であった本薬師寺跡の計画調査を本格的に開始した。以下，主な調査の概要を報告する。

1　藤原宮跡の調査

東方官衙地区の調査（第67次）　内裏に東接する官衙地区は東西約66m，南北約72m の規模の官衙が，間に幅約13m の東西道路を挟んで南北に４区画，縦列配置されることが明らかになっている。この調査はすでに区画の東北隅（第41次）と西南隅（第61次）が判明している南第二官衙の内部を対象とし，官衙建物の構成と配置の検討を目的とした。検出した遺構は弥生時代から中世に及び，藤原宮官衙の遺構群とその前後の時期に大別される。

藤原宮以前では弥生時代の斜行溝 SD7617，古墳時代の掘立柱建物 SB7647・7653，素掘溝 SD7602・7649，井戸 SE7615があり，井戸からは古墳時代初頭の良好な一括資料を得た。



東方官衙地区調査遺構図（１：500）

藤原宮直前期の遺構には宮内先行条坊の四条々間路 SF1731とその両側溝，掘立柱建物 SB7626・7635，土坑 SK7608がある。四条々間路は路面幅約６m，側溝心々距離は6.9m で従来の所見と同じである。掘立柱建物は北でやや東へ傾き，北の柱筋を揃えている。

藤原宮期の官衙建物は四条々間路を廃してその上に建てた正殿 SB7600とその南側柱に取り付く塀 SA7644・7645で区画される。正殿は桁行７間，梁行３間の東西棟で内部には東西塀状の SX7601があり床張りの可能性がある。官衙区画の中心は正殿の中央ではなく南側柱の西から４番目付近にあり，正殿の周辺

にはその東西の妻柱と柱筋を揃えたSB7610・7650，7620・7670が配され，正殿と諸建物とはそれぞれ等距離（5.4mあるいは15m）にある。土坑SK7641・7651はともに藤原宮の瓦を含み，前者の炭化物層から出土した郡里表記の荷札木簡によって，大宝令制下に埋められたことが判明し，後者は後述の建物SB7650によって壊されている。

藤原宮期以後の遺構は建物方位の違いから3期に細分される。北で西に傾く大規模な建物群SB7605・7630・7655・7660は，柱抜取穴に玉石が詰め込まれる特徴から，玉石敷と石組の雨落溝を伴うとみられる。石敷SX7632は西南部に遺存するだけであるが，各所に石の敷かれた痕跡が確認され，この時期の建物周囲は全面が石敷であったと考えられる。SB7605は広い西庇のつく建物で身舎の中央に間仕切があり，南・西・北に石組溝SD7621・7622・7637が配される。SD7637は西走して南北棟SB7630の東雨落溝SD7631に流入する。SB7660・7655は柱筋が揃い，調査区北端の東西石組溝SD7675は調査区外にある建物の南雨落溝である。これらの廃絶時期はSD7637の側石抜取り跡出土土器から10世紀以前と考えられるが，造営時期については郡表記の木簡が出土した土坑SK7641を覆って石敷が遺存することや建物方位が宮期のそれと異なること，SB7605が広庇をもつこと，周辺に奈良・平安時代の石組溝や暗渠があることから藤原宮期以降と考える。しかし，厳密には相対的に新しいことが確認されたにすぎず藤原宮期の中での建て替えの可能性が残る。官衙区画施設との関係を含めた周辺の成果を待って再考したい。北で東に振れる建物SB7640の年代も確証がないが，左京六条三坊で検出された奈良時代の建物群が同様の方位をとる点から奈良時代に属する可能性が高い。

藤原宮の官衙建物配置は従来，長大な建物の直列・並列配置が特徴とされてきたが，今回，区画中央に東西棟正殿を配し，その両翼から延びる掘立柱塀によって内庭を形成する例を初めて確認した。この違いは官衙の性格を反映したものと理解される。また，石敷を伴う建物群は大規模で整然とした配置にあり，官衙の性格やその変遷の解明にとって重要な意味を持つ。

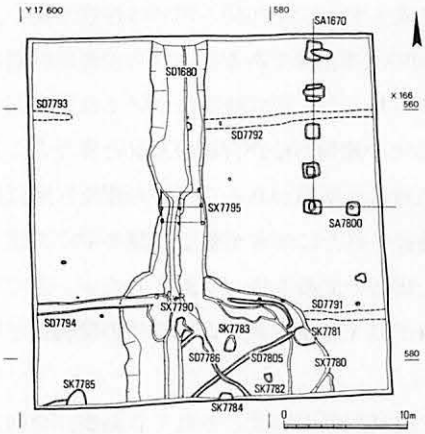
内裏西外郭地区の調査（第70次） この調査は当該地区の西南隅部の様相を明かにし，南面区画施設を確認することで，内裏外郭の南北規模を確定することを目的とした。

遺構は藤原宮期とその直前期に大別される。宮直前期には宮内先行条坊の四条大路があり，道路心が内裏南外郭塀とほぼ一致する位置で検出された。南北両側溝とも痕跡的ではあるが，北側溝SD7792・7793は幅0.5～1m，南側溝SD7791は幅0.7mで，両側溝心々距離は約16m。

藤原宮期の遺構には内裏西・南外郭掘立柱塀，内裏西大溝と堰・橋・池状施設や斜行溝，土坑などがある。内裏西外郭塀SA1670は柱間約3mで4間分を確認し，東折して南外郭塀SA7800となる。南外郭塀は宮の南北2等分の位置にあり東へ約30mの位置で朝堂院回廊の西北隅にとりつく。これによって内裏外郭の規模は東西303m，南北378mと確定した。

西大溝SD1680は幅4m前後，深さ1m以上の素掘り溝で，東岸がSA1670の西約9mにある。内裏東外郭の東大溝SD105に対置される宮内の基幹排水路である。溝は上下2段に掘られ，下段の溝は幅1.5m，深さ0.6～0.9mであるが，上段の溝は溝の中程に設けられた堰SX7790の上

流（南）側と下流（北）側とで大きく異なる。上流側は上段溝の両岸が広がり，東西16m，南北10m 以上，深さ0.2～0.4m の池状遺構 SX7780となり，中に下段溝と斜行溝 SD7786がある。下流側は橋 SX7795までの間は下段溝は幅 1 m，深さ0.6m で直線的であるが，以北は溝幅 3 m の深い溜りとなる。堰 SX7790は西大溝を横断するように 2 本の丸太（径12cm）を0.3m の間隔で立て十数個の石を絡ませて配列した構造で，下流側に散乱した石などからみると，堰は粘土を混じえた石積みであり 2 本の丸太は樋門に関連するものかも知れない。橋 SX7795は東西 2 間，南北 2 間の掘立柱で，東西3.2m，南北2.6m の橋脚に復元され，その位置から先行条坊の四条大路を踏襲した東西の宮内道路が復元される。宮内道路の南側溝 SD7794は先行条坊南側溝に重なり，東流して西大溝へ合流する。



内裏西外郭地区調査遺構図（1：600）

出土遺物には木簡，瓦類，土器類があるが，なかでも西大溝下層の鉄釘に関する文書木簡や荷札が注目される。また，西大溝・池状遺構の埋土から多数出土した瓦類は，その多くが高台・峰寺瓦窯産の軒瓦，粘土紐巻き付け技法の丸・平瓦であるなど大極殿・朝堂院地区や内裏外郭地区に共通する内容を持ち，内裏外郭塀が瓦葺きであることを示す点で重要である。なお，広端側に浅い顎をもうけた特殊な形態の平瓦があるが，内裏外郭塀西南隅の入隅部に用いられた谷樋瓦である可能性が高い。類例は平城宮内裏北外郭（平城宮第20次調査）にある（37頁参照）。

宮南面西門・内濠・外濠の調査（第69－4次） 歩道整備工事に伴う宮南面西門想定位置の調査であるが，南面西門については基壇土などの痕跡は全く認められなかった。南面内濠 SD502は幅1.6m，深さ 1 m で，3 層に分かれる堆積層の上・中層からは瓦類が，下層からは土器や木簡が出土した。木簡には表裏に「封　□」「粟道宰熊鳥□」と書いた検封木簡がある。外濠については外濠に向かう傾斜面を検出しただけで，ほかに宮内先行条坊西一坊大路の西側溝にあたる幅1.2m，深さ0.3m の南北溝 SD7758と，2×2 間以上の掘立柱建物を検出した。

西方官衙地区の調査（第69次東西，他） 宮西南部の市営住宅建替えと個人住宅建設に伴う調査である。検出した遺構は藤原宮期とその直前期のものに大別されるが，これまでこの地区ではいずれの時期も大規模な建物を検出しておらず，この点は今年度の 6 件の調査も同様である。藤原宮期直前の遺構には第69次西区の先行条坊西二坊々間路 SF1082の東側溝があるが，西側溝は削平されたと考えられる。藤原宮期の建物には69次東区の SB7730，7722，7720があるが，いずれも梁間 2 間で，SB7720が北で西へ約 5 度傾く桁行 3 間（16尺）の建物であることが判明する外は一部を確認しただけである。第69次東区の井戸 SE7700は幅約50cm，厚さ 3 cm の板 4 枚からなる縦板組の井戸で，底から小型の土師器甕が出土した。

なお，下層の四分遺跡については，第69次東・西区内で竪穴住居，井戸，柱穴，溝を検出した。検出した住居・柱穴は弥生時代中期中葉～後葉の時期であり，溝は中期後葉であることから，この間に居住地をかえるという土地利用形態の変化が認められる。

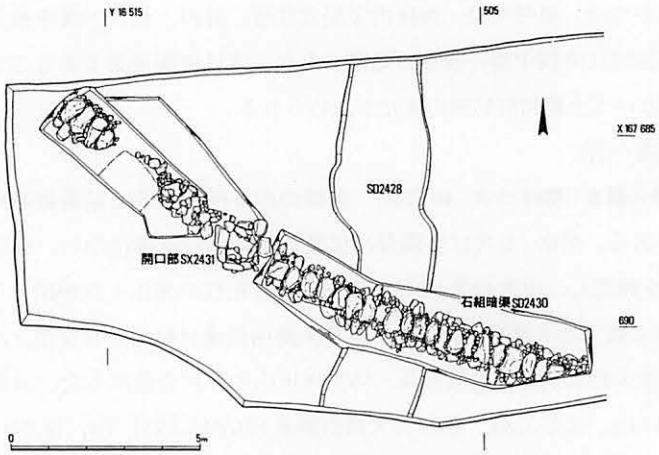
2　藤原京跡の調査

宮外周帯および右京五・六条三坊の調査（第69－9次，69-12次）　宮跡の西を南北に通る県道豊浦南八木線の建設に伴う事前調査である。第69－9次は外周帯に位置し藤原宮の遺構はない。藤原宮期直前の総柱建物や中世の溝を確認し，中世の溝 SD7687からは7世紀代の塼仏1点が出土した。第69-12次では南半に想定された西二坊大路東・西側溝と五条大路南側溝は検出されなかったが，北半で西二坊大路西側溝と五条大路北側溝，右京五条三坊東南坪内の井戸を検出した。五条大路北側溝 SD7846は幅1.2m ～1.4m，深さ0.3m，西二坊大路西側溝 SD7845は幅1.3m，深さ0.2mである。井戸 SE7851は径2.5m，深さ2.6m の円形掘形で，井戸枠抜取り穴から藤原宮期の土師器甕，須恵器壺，曲物などが出土した。土師器甕の体部から頸部には粗く編んだ草蔓が遺存した。下層の四分遺跡については，南半で中期前葉～中葉の土器を主体とする幅2.6m の南北大溝を検出し，中期段階の遺跡西限と推定された。北半で検出した溝6条と土坑・柱穴のうち，斜行溝 SD7855・7854は前期中段階，斜行溝 SD7853・7856・7857・7858は中期前半の方形周溝墓を構成し，遺跡の北から北西にかけては墓域であった可能性が高い。

藤原京条坊関連遺構の諸調査　右京一条一・二坊の調査（第69-10次）では西一坊大路，西二坊坊間路を確認した。西一坊大路 SF7491の東側溝 SD7492は幅2.3m，西側溝 SD7493は幅1.6m で，路面幅6.3m，側溝の心々距離は8.4m である。西二坊坊間路 SF7495は路面幅4.6m，東西両側溝の心々距離は5.9m である。西一坊大路東側溝出土土器に，これまで飛鳥地域の石神遺跡から特徴的に出土した東国系の黒色土師器片が含まれており注目される。

右京二条二坊では西南坪の東北部（第69－1次）で二条条間路南側溝 SD6331から溝心々距離で8m 南に位置する藤原宮期の東西溝 SD7740を検出した。また，東北坪から一条大路の推定位置（第69－5次）で一条大路 SF6250を検出した。北側溝 SD7766は幅1.9m，南側溝 SD7767は幅1.1mで，一条大路は路面幅7.5m，溝心々距離9m となり，これまでの知見を再確認した。

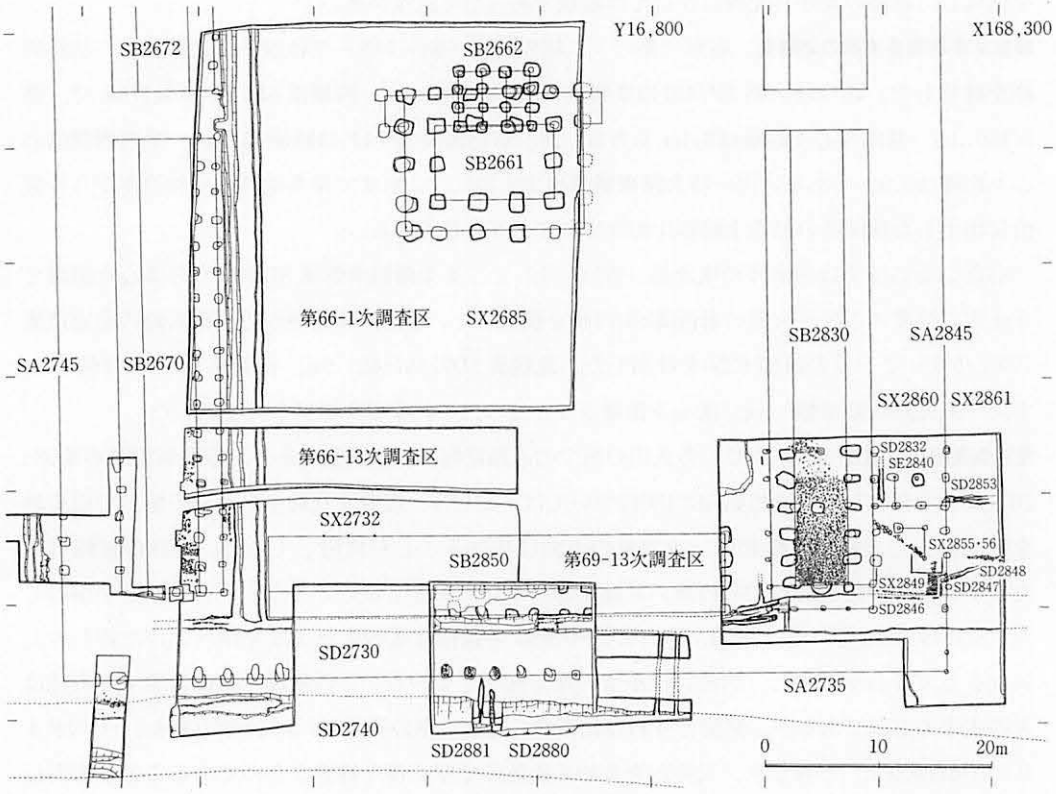
左京九条四坊の調査（第69-11次）　香久山の南での道路拡幅に伴う調査である。道路新設時の第58-20次調査で発見した石組暗渠 SD2430については，その後，埋蔵文化財センターの協力で周辺地を電気探査した結果，西北西－東南東の方向に延びることが判明していた。今回の拡幅にあたっては前回調査を含めてその南，北延長部について調査することとし，都合16m 分を検出した。SD2430は底幅0.4～0.45m，深さ0.6～0.65m の規模に玉石2～3段を積み上げた側石の上に大きな天井石を架構し，内部には小型の礫を充填している。この規模・構造に関する所見は先の成果の追認であるが，側面とりわけ北西側の覆土は先の所見（7世紀中頃の整地と一体で積まれた黄褐色粘質土）と異なり，天井石を含めて灰色砂で厚く覆う特異なものであることが判明した。暗渠内部が全て礫で充填され，その隙間には寄生虫卵やゴミの無い水垢が詰まっている特



左京九条四坊調査遺構図（1：200）

徴からも，これが通常の導水の用を果たすものではなく，香久山南裾の扇状地にあたる暗渠北側周辺部からの水を暗渠を覆う灰色砂で濾すようにして集積し，開口部で汲み上げる施設であることを想定させる。その行方や施工時期，具体的な用途の解明が期待される。

左京十一条三坊の調査（第69-13次＝雷丘北方遺跡第３次） 1991年に発見された雷丘北方遺跡ではこれまでの調査成果から，左京十一条三坊西南坪のほぼ中軸線上にある大規模な四面庇付東西棟建物（正殿）の東方に東脇殿が，南面の区画施設には門が想定された。道路新設予定地内とその南でこの想定の検証を目的として調査を行った。その結果，東脇殿や区画施設をほぼ想定通り

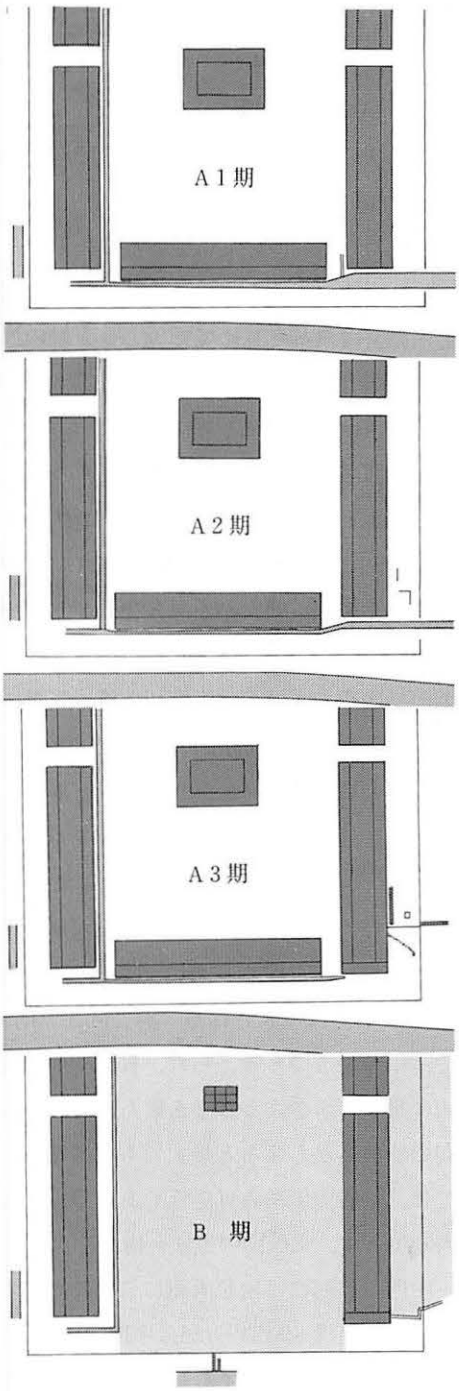


左京十一条三坊調査遺構図

の位置で検出したが，門の遺構は確認されなかった。また，遺跡の南東部での細かな造替の様相から，A１～３・Bの大別２時間，細別４時期の変遷が確認された。

東脇殿 SB2830は東西両庇付の南北棟建物で，規模は西脇殿と同様の身舎が17×２間と推定される。柱間寸法は身舎2.4m 等間，庇の出2.1m で，身舎の３・５間目に間仕切りがある。身舎内部には玉石敷があり吹抜けの建物とみられる。西庇の西には西雨落溝 SD2836があって，南の東西溝 SD2730に流れ込む。東西棟建物 SB2850は東妻柱列と南側柱・庇柱列の一部を確認したに過ぎないが，東・西脇殿の南妻と揃えた南庇付建物であり，第２次調査区の３本の柱 SX2732を北側柱の一部とすると，梁行２間で柱間は2.4m 等間，桁行は17間と推定され，西・東脇殿とはそれぞれ４m 離れて中央部の南を塞ぐ位置を占めることになる。東脇殿の東6.5m にある南北塀 SA2845は中心区画の東限塀で，南端で南限の SA2735と接続する。９間分を検出したが，SD2730が通る南から３間目が4.3m と広く，それ以南は柱間1.7m で円形小型の柱掘形，以北は長方形掘形で SB2830と柱筋が一致する。東塀 SA2845と東脇殿 SB2830との距離（6.3m）は，西塀 SA2745と西脇殿 SB2670との距離（5.2m）より大きいが，東脇殿の南5.6m にある南限塀 SA2735は総長約78m（265尺）となる。南限塀の中軸線付近には門が検出されなかったが，簡単な出入り口が存在した可能性は残されている。南限塀と脇殿との間の東西溝 SD2730は幾度かの改作があるが，A１期の SD2730A は SB2850の南については幅狭く，SB2830の東側柱筋以東では幅３～3.5m と広くなる。南塀の南の東西溝 SD2740は東方で塀から離れる方向にのび，区画中軸線付近に橋の存在した形跡はない。

遺構のその後の変遷は，A２期には SD2730の南岸を埋めて石で護岸することで幅狭くし，



左京十一条三坊遺構変遷図（1：1500）

SA2845とSB2830の間の空間に鍵形の小規模な区画施設を作る。A3期にはSD2730を埋めて東脇殿に南庇を付ける一方，先の空間には溝SD2832・2853，井戸SE2840，石敷施設SX2855・2856を設けて庭園状とする。さらに，正殿が小規模な建物に変えられるB期にはSB2750を撤去した跡地を含めて南半一帯を粗い礫敷SX2685とし，SD2740の北半を埋めてSA2735からの排水の暗渠SD2880・開渠SD2881が造られる。SB2830南端の東にはSD2846・SD2847・礫瓦敷施設SX2849を造り，それ以北は礫敷SX2860とする。SA2845の東側にもSD2848が造られ，以北に礫敷SX2861が施される。

遺跡の性格については建物規模，形態，出土遺物などからは宮殿あるいは官衙である可能性が強いものの不明な点が多く決し難い。建物配置からは正殿の北に後殿の存在を想定すると飛鳥稲淵宮殿遺跡と極めて類似し，正殿の四周を長大な建物で囲む形に推定されるならば，石神遺跡A－3期（斉明朝）の東区画に似た配置となる。いずれにせよ中央部の建物群は左京十一条三坊の西南・西北の2坪を占めており，建物群の南方と北方には相当の空間がある。今回の調査で南面中央部に門や橋が検出されなかったことは，南方に一体性の強い関連施設を想定することを難しくする側面もあるが，これらの解明には周辺部分の継続的な調査が必要である。

本薬師寺中門・南面東回廊の調査（右京八条三坊）　昨年度の金堂跡基壇周辺での予備的調査を承け，中門跡と南面東回廊跡を対象として本格調査を開始し，伽藍中軸線の確定と藤原京条坊との関係の解明を期した。遺構の残存状況は概して良好で，現地表面下約50cmの造営に伴う整地土の上面で中門・南面東回廊と雨落溝，石敷，参道などを検出し，その直下で中門の造営に先行する藤原京西三坊々間路SF2740とその両側溝，土坑などを検出した。

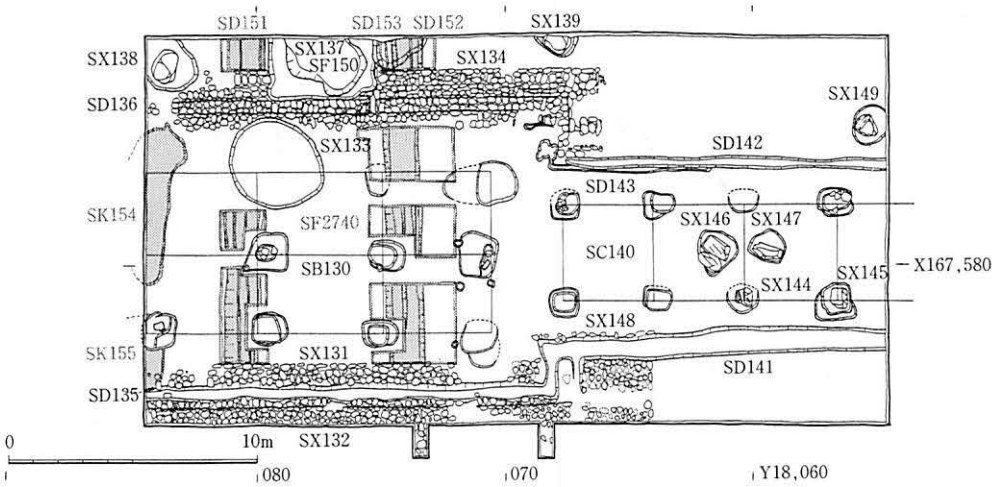
中門SB130は検出した9個の礎石据付・抜取穴から，桁行3間，梁行2間であり，桁行は総長47尺，柱間寸法は中央間17尺（5m），両脇間15尺（4.43m），梁行は総長22尺，柱間寸法11尺（3.25m）等間に復原される。これは間口5間の平城京薬師寺の中央3間分の規模と一致する。基壇は外装が完全に失われているが凝灰岩を使用した形跡があり，規模は後述する雨落溝・犬走りの規模から南北長29尺（8.55m），東西長55尺（16.23m）で，基壇の出は平・妻側ともに3.5尺（1.03m）に復原される。調査区西北隅の土坑の花崗岩製礎石は直径1～1.2m，厚さ約75cmで，中門のものと考えられ，柱座や地覆座などはない。雨落溝が直線をなすことから階段は外側に張り出す形式とは考え難く，内側に切り欠く構造としても礎石の厚さから復原される60cm弱の基壇高からすると最大でも2段を越えない。以上の成果から想定される中門の意匠については，重層門である可能性もあるが，2層目にのみ入母屋の屋根が付く楼門であった可能性も否定できず，南大門の意匠・構造を含めた全般にわたる詳細な検討が必要である。

中門の周囲には南北両面に二重にめぐる石敷と，石敷に挟まれて矩形に折れ曲がる石組溝がある。石組溝SD135・136は中門の雨落溝で，その内側の石敷SX131・133は中門基壇の外周をめぐる石走りに相当する。また外側の石敷SX132・134は，中門周辺の化粧石敷と門の南と北に延びる参道の舗装石敷である。北面の石組溝SD136は幅60cm，深さ約25cmで底石を敷くが，底

石面には小礫が薄く堆積する。南面雨落溝 SD135は北側石が抜き取られているが，側石１石の石組溝で SD136と同規模と思われる。雨落溝は南面東回廊 SC140の取り付く東面部分も幅60cmとみられ，その場合，中門側柱心から雨落溝心までの距離は平側，妻側ともに約8.5尺と等しくなる。南の石敷 SX132は，東端が南面東回廊の西２列目の柱筋にほぼ揃う位置にあり，幅90尺（約26.5m）で南大門まで延びていた可能性がある。北の石敷 SX134は幅4.5尺（1.33m）で北面雨落溝をコの字型に取り囲む。SX134の北縁に直交して遺存する玉石 SX150は中門の柱筋に揃う位置にあり，これを東の縁石として SX134の北から中門の中央間と同じ幅（約5.1m）で金堂に通じる参道が復原できるが，完全に失われている。

南面東回廊 SC140は単廊で，柱間寸法は桁行梁行とも12.5尺（3.7m）等間で３間分を検出した。礎石は２カ所で原位置を保ち，ともに上面の平坦な自然石で柱座や地覆座などはない。他の柱位置では据付痕跡と礎石抜取痕跡を検出し根石が遺存する。回廊基壇は玉石１石での外装で，基壇外装の玉石列が直接雨落溝の内側石を兼ねる形式である。SC140の雨落溝の幅は中門雨落溝と同じく60cm で，回廊の基壇幅は25尺（7.4m），基壇の出は6.25尺に復原できる。また後世の溝に凝灰岩の屑が含まれており，回廊基壇にも凝灰岩が用いられた時期が想定される。

中門造営時に施された整地土の直下で検出した西三坊々間路 SF2740 は側溝心々距離約６m で，道路の中軸線は中門のそれとほぼ一致する。また，SF2740の東側溝 SD152に重複する素掘溝 SD153からは本薬師寺式の軒平瓦（6646F 型式）が出土しており，この溝は寺域の設定に伴う SF2740の廃絶後に開削され，中門の造営工事の直前まで存続した暫定的な排水路と考えられる。以上の成果による限り，藤原京の条坊は中門の造営以前に施工されていることは明白である。ところが，1976年度の寺域西南隅部の調査では西三坊大路東側溝が本薬師寺の瓦を含む南北溝よりも新しい重複関係にあることが確かめられて，本薬師寺の寺域は西三坊大路の施工に先立って設定された可能性が高いとされている。本薬師寺と条坊の施工過程については，寺跡全



本薬師寺中門・南面東回廊調査遺構図（１：300）

体の造営手順を含めた再検討が必要となってきた。なお，土坑SK154は7世紀後半代の土器片と炭化物とを多量に含み，寺域の設定以前の西南坪内の宅地に関わるとも考えられる。

本薬師寺中門と平城薬師寺中門との関係については，①平側の軒の出が平城薬師寺が10尺以上であるのに対し，本薬師寺では8.5尺であること，②奈良時代の瓦が出土し平城遷都後にも中門で瓦の差し替え等の維持管理が行われていたと推定されること，③本薬師寺の回廊は単廊であり，複廊として完成した平城薬師寺は全面的新築であった可能性が高いことなどからすれば，中門を移築した可能性は殆ど無い。ただし，これはあくまでも中門に関する所見であり，金堂・塔などを含めた移築非移築論の決着は今後の調査の進展を待ちたい。　（西口寿生）

調査地区	遺跡・調査次数	調　査　期　間	面積	備　　考	調査要因
6AJF-C・D	藤原宮　第67次	91.4.17～93.4.6	2000	東方官衙地区	国計画調査
6AJG-T・U	藤原宮　第69次東	92.6.8～92.7.29	620	西方官衙地区	市住宅立替
6AJL-E・F	藤原宮　第69次西	92.8.6～92.10.7	820	西方官衙地区	市住宅立替
6AJF-T・U	藤原宮　第70次	92.9.30～92.11.27	750	内裏西外郭地区	国計画調査
6AJQ-F	藤原京　第69-1次	92.4.13～92.4.16	72	右京二条二坊	個人住宅建設
6AJE-Q	藤原京　第69-2次	92.4.24～92.5.1	24	右京二条一坊	個人住宅建設
6AJD-H	藤原京　第69-3次	92.5.19～92.5.20	12	左京六条三坊	個人住宅建設
6AJH-Q	藤原宮　第69-4次	92.8.5～92.8.25	95	宮南面大垣外濠	市歩道建設
6AJP-R	藤原京　第69-5次	92.8.27～92.9.3	60	右京二条二坊	個人土地造成
6AJH-P	藤原宮　第69-6次	92.9.16～92.9.16	4	西方官衙地区	個人住宅建設
6AJH-P	藤原宮　第69-7次	92.9.16～92.9.17	7	西方官衙地区	個人住宅建設
6AJH-P	藤原宮　第69-8次	92.9.16～92.9.16	4	西方官衙地区	個人住宅建設
6AJM-A・B・C	藤原宮　第69-9次	92.10.13～92.12.2	580	宮西外周帯	県道路建設
6AJP-R/6AJQ-C	藤原京　第69-10次	92.11.9～92.11.13	42	右京一条二坊	県歩道建設
6AMF-B	藤原京　第69-11次	92.11.17～92.12.7	230	左京九条四坊	市道路拡幅
6AJL-D・E・F	藤原宮　第69-12次	92.12.3～93.4.21	729	宮西外周帯	県道路建設
6AMH-J・Q	藤原京　第69-13次	92.12.8～93.3.15	850	雷丘北方遺跡3次	県道路建設
6AJD-H	藤原京　第69-14次	93.2.25～93.3.2	35	左京六条三坊	個人住宅建設
6AJG-T	藤原宮　第69-15次	93.3.16～93.4.15	230	西方官衙地区	市住宅立替
6AMH-F	山田道　第5次	92.8.10～92.9.28	440	雷丘東方遺跡	県道路建設
6AMY-D	本薬師寺1992-1次	93.2.25～93.4.15	450	中門・南面東回廊	国計画調査
6AMD-U	石神遺跡第11次	92.7.8～92.12.22	680	西区画	国計画調査
5AOH-I	小墾田宮1992-1次	92.9.25～92.10.1	18		個人納屋建設
5AKB-B	飛鳥寺南方遺跡	92.12.1～93.3.10	245		県下水道建設
5BAS-T	飛鳥寺　1992-1次	92.7.6～92.9.10	270	寺域東南部	個人住宅建設
5BOQ-N	奥山廃寺1992-1次	93.2.8～93.2.12	25	西回廊	個人住宅建設
5BST-M	坂田寺　第8次	92.4.7～92.7.23	330	西回廊西方	個人住宅建設

1992年度　飛鳥藤原宮跡発掘調査部発掘調査一覧

平城宮跡・京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

1992年度に平城宮跡発掘調査部が実施した平城宮跡・平城京跡と京内寺院および頭塔と東紀寺遺跡の調査概要を以下に報告する。調査一覧については35頁の表を参照のこと。

1　平城宮跡の調査

式部省北半部の調査（第229・235次）

南面大垣にもうけられた宮城門のうち壬生門を入った区域に，奈良時代後半には式部省と兵部省が東西左右対象に並立していた。昨年（1991）度までに，兵部省と式部省南半部について調査を進めてきたが，残る式部省北半部について第229・235次調査として発掘調査を実施した。

式部省は一辺約74m（250尺）の築地塀で囲まれた官衙である。築地塀の基底部幅は，添柱の間隔から4尺であることがわかる。内部空間は，北寄りの部分にもうけた東西塀SA15110により南北に二分している。この東西塀の南側で正殿SB15100と東第一堂SB15300を，北側で後殿SB15120・西北殿SB15150・東北殿SB15350を確認した。いずれも礎石建物である。なお，東面・西面の築地の内側には，後に片廂廊をとりつけている。

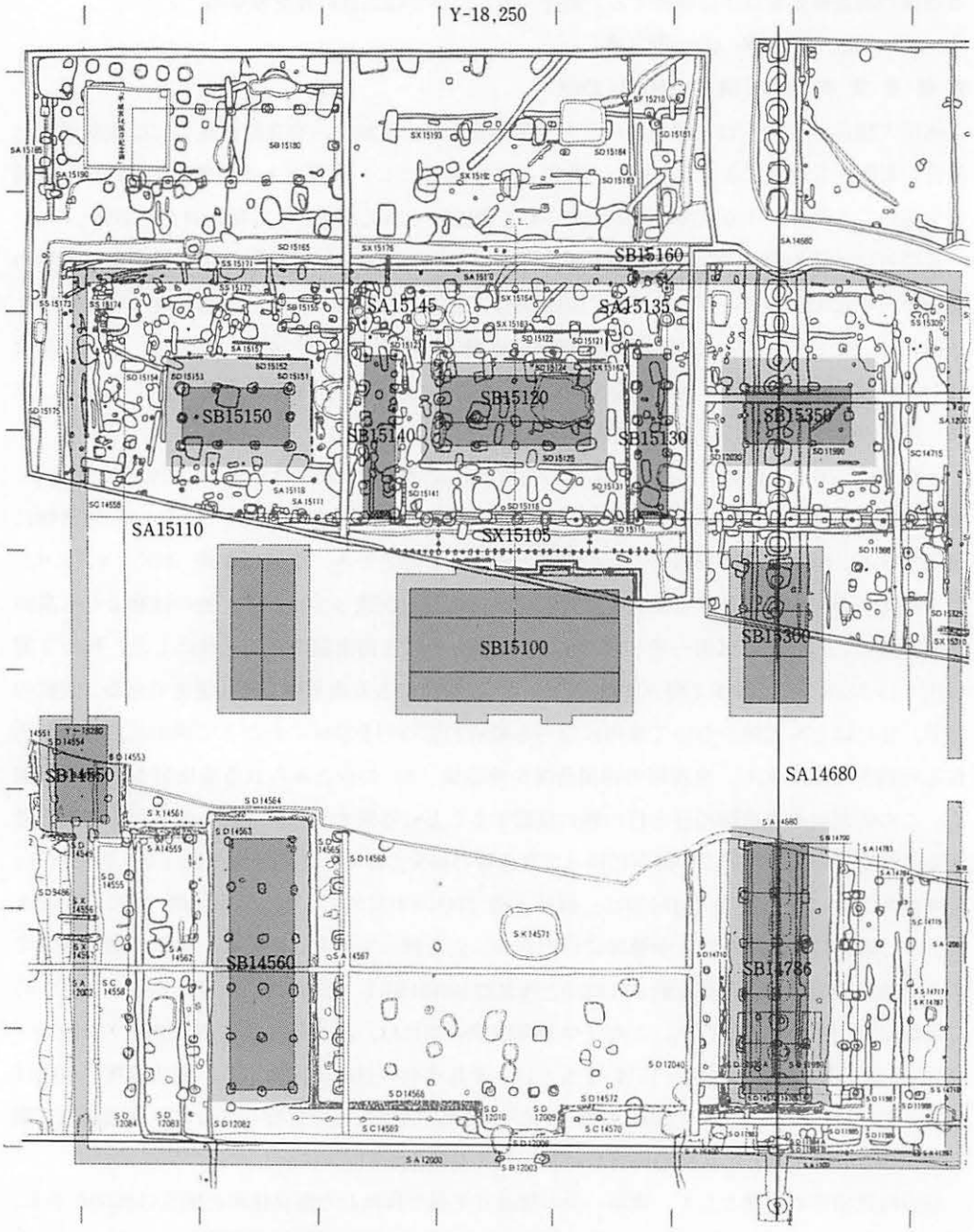
正殿SB15100は東西棟で，東北隅部分の基壇土および塼組の雨落溝を検出したにとどまるが，北側の雨落溝に階段部分にあたる張り出しが2箇所あり，桁行5間（60尺＝12尺×5）の建物に復原できる。南側柱列は東西第一堂の南妻とそろうと想定でき，梁間は4間（32尺＝8尺×4）で，南北二面廂の切妻造りであろう。礎石据え付け掘形が残っておらず，他の建物よりも高い基壇であったらしい。東第一堂SB15300は，北妻とその1間南側の柱列を検出した。桁行3間（40尺＝13.3尺×3）で梁間2間（18尺＝9尺×2）に復原できる南北棟の総柱建物である。正殿の北で，2尺ほどの間隔をおいて東西にならぶ凝灰岩切石列を28mにわたって検出した。北へ折れる石列が4箇所あり，東西塀の南雨落溝を渡る橋（板）の台とみられる凝灰岩ないし塼へ続く。この南北列が東西塀の柱と柱の間に位置することも考慮すれば，これらの石列を踏石と考えるのが妥当であろう。この踏石に沿って東西塀の扉をくぐり，北の区画へ通ったものだろう。

東西塀の北にある後殿SB15120は，桁行4間（44尺＝11尺×4）尺で梁間4間（26尺＝6.5尺×4）の二面廂の切妻造りで，中軸線に柱が立つ。穴を掘って落とし込まれた礎石5個が残っていた。後殿の両脇にある東北殿SB15350と西北殿SB15150は，ともに桁行3間（30尺＝10尺×3）で梁間2間（16尺＝8尺×2）。この三つの東西棟の間には，掘立柱による廊状建物SB15130・15140および南北塀SA15135・15145をもうけ，それぞれの空間を区画する。廊状建物の規模は桁行5間（45尺＝9尺×5）で梁間1間（9尺）。なお，後殿背後の東寄り部分に，北面築地に開く棟門SB15160がある。9尺の間隔で径30cm強の柱根を留めていた。

奈良時代前半の遺構として，東第一堂の棟通り下層で検出した掘立柱南北塀SA14680がある。柱間寸法は平均8.5尺で直径40cm近くの柱が想定できる大型の塀である。ほかには儀式用の旗

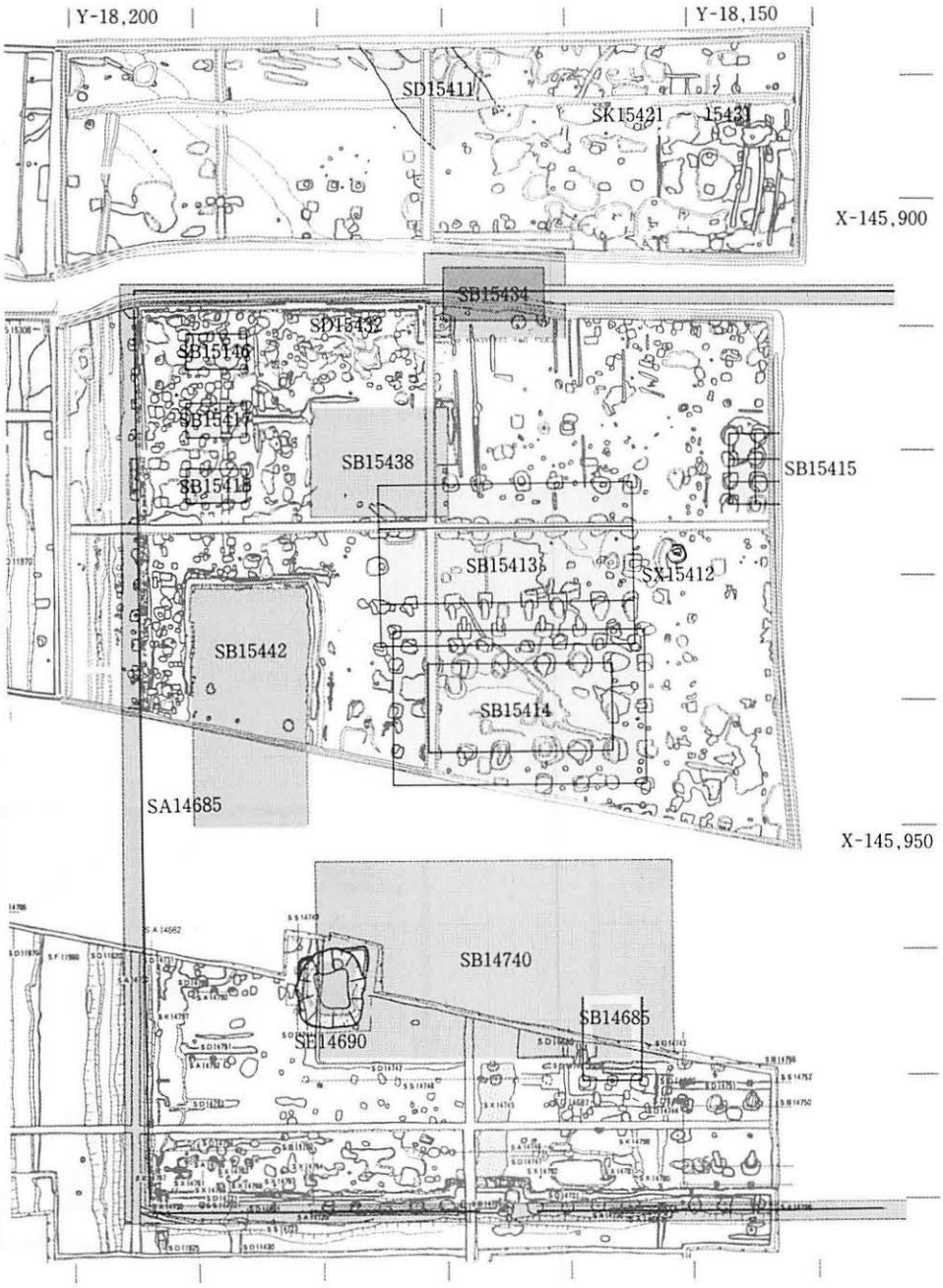
竿と思われる柱穴がある程度で，奈良時代前半は空閑地であった。南北塀は壬生門中軸から東へ275大尺（330尺）に位置し，左右対称位置の西側でも，柱穴は未確認ながら雨落溝とみられる2条の南北溝が検出されており，存在が想定しうる（図D）。

今回の調査によって，奈良時代後半の式部省の全容が明らかとなった。兵部省と式部省は同



式部省調査遺構図（図A　上半第229・235次　下半第220次　1：600）

一規格で造営された250尺四方の官衙である。壬生門の中軸線から130尺隔てた位置にそれぞれ東面と西面の築地心をおき，南面築地心を宮南面大垣の心から45尺北に，北面築地心を朝集院南限から125尺南におく（図D）。ともに線路があるため未掘部分が残すが，相互に比較することによって補うことが可能である。まず兵部省の遺構について，これまでの知見を２点訂正する。

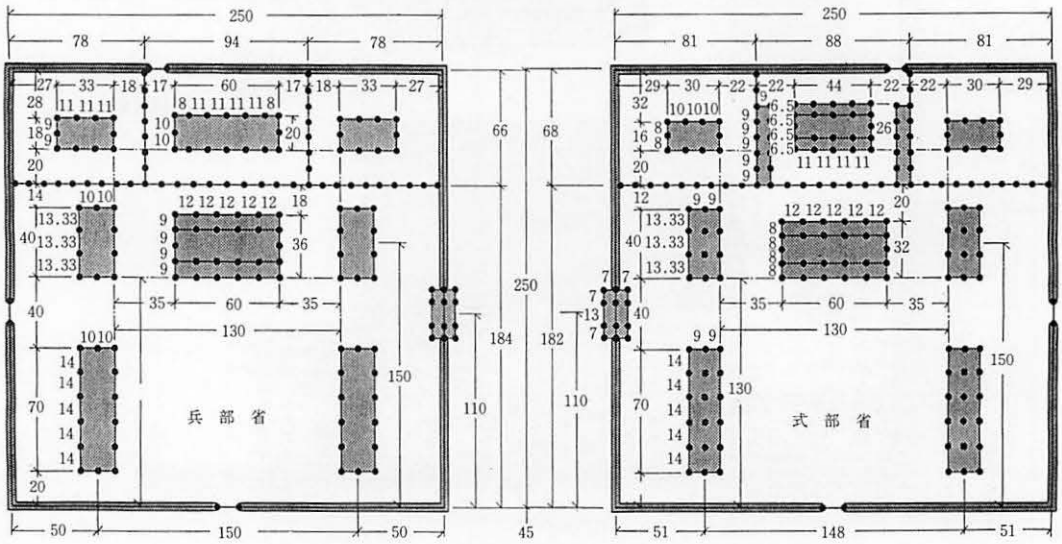


式部省東官衙調査遺構図（図B　上半第236次　下半第222次　1：600）

第一に，式部省正殿の検出により兵部省にも正殿が想定できること。兵部省の正殿はこれまで認めていなかったが，南と北の雨落溝にあてうる東西溝があること，基壇に該当する部分に舗装の礫敷が及ばないことなどから，基壇は完全に削平されているものの存在はまず間違いない。第二に，兵部省の後殿（「北方建物」と呼んだもの）を桁行５間と復原したが，中軸線上に柱がくる桁行６間の建物になることである。

これらの点を踏まえた上で，両官衙の遺構を照し合らせると，同じ規格にもとづきながらも細部では異なる部分が少なくないことがわかる（図C）。①築地塀の基底部幅が，兵部省は５尺で式部省では４尺である。また，東面・西面の築地塀に後に付加される片廂廊の出は，兵部省が11尺で式部省は13尺である。②東西塀の南北位置が，式部省の場合，兵部省と同じ位置で地割溝を検出したが，実際には２尺南に変更している。③正殿の桁行総長は同じものの，梁間は雨落溝の心々距離の違いから異なるとみられる。また，兵部省正殿が凝灰岩切石を用いた壇正積基壇であるのに対し，式部省正殿の基壇化粧には塼を用いている。東西第一堂・第二堂は，梁間がわずかに異なるとともに，式部省のそれが総柱建物である。このように正殿と東西第一堂・第二堂の梁間が異なる一方，コの字形に配したこれらの建物に囲まれる空間を，130尺四方にそろえる配慮がなされている。④東西塀より北の区画の三つの東西棟についても，柱間寸法が微妙に異なり，中央の後殿は建物構造も異なっている。したがって，北側の区画を三つに区切る南北塀の位置も異なり，式部省では廊状建物をともなう。

以上のように，築地の基底幅や個々の建物の規模は兵部省の方が大きく，式部省よりも格式の高い官衙であったことをうかがわせる。奈良時代後半の両官衙は，左右対称の均整な配置をとり高い計画性の下に造営されている。今回の式部省北半部の調査により，正殿の確認をはじめ，両官衙の正確な構造が明らかになった意義は大きい。



奈良時代後半の式部省・兵部省の復原（図C　数字の単位は尺）

式部省東官衙の調査（第236次）

前項の第229次・236次調査区の東隣にあたり，1991年度に実施した第222次調査区とは，線路を隔てた北側に位置する。第222次調査によって，奈良時代後半の式部省の東側に，築地塀で囲まれた別の官衙が存在すること，その下層にも掘立柱塀に囲まれた奈良時代前半の遺構があり，出土した木簡から式部省に関わる官衙であることが予想されていた。この式部省東官衙の北半部について，第236次調査として発掘調査を実施した。

奈良時代前半　掘立柱塀による区画塀SA14685の中に，掘立柱建物6棟を確認した。掘立柱塀は西面で13間分を検出し，北面部分は水路のため未確認ながら，北へ伸びないことから東へ折れて北面を画していたとみて誤りない。内部には正殿とみられる大型の東西棟があり，まわりに小規模の建物が配置されている。正殿には建て替えがあり，当初の正殿SB15413は，桁行7間（68尺＝12尺×3＋8尺×4）で梁間4間（44尺＝身舎10尺×2＋廂12尺×2）の両廂建物である。桁行の柱割りは8尺と12尺が交互にならぶ特異なもので，広い柱間部分に扉が想定できる。やや南に建て替えられた正殿SB15414は，桁行7間（66尺＝12尺＋9尺×6）で梁間4間（42尺＝身舎12尺×2＋廂9尺×2）の四面廂建物になる。桁行中央間のみが12尺と長い。周囲の建物には，東寄りで未掘部分にかかるが3間（21尺＝7尺×3）×2間以上（柱間8尺）の総柱建物SB15415があり，北西部分には桁行3間（15尺＝5尺×3）で梁間2間（10尺＝5尺×2）の小規模な東西棟が3棟ならぶ（SB15416・15417・15418）。

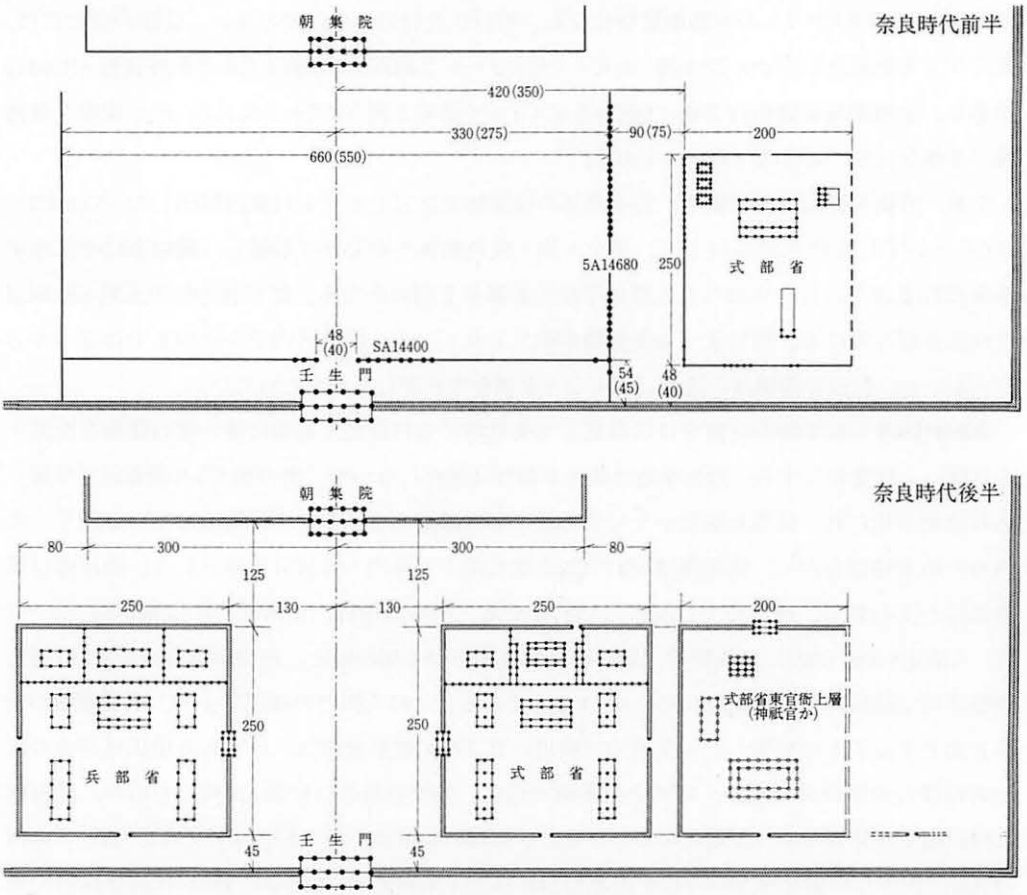
なお，官衙を出た北側で鍛冶・鋳造関係の廃棄物を捨てた土坑を11箇所検出した（SX15421～15431）。いずれも深さ30cmほどで，焼土・炭・灰色粘質土が交互に堆積し，鞴の羽口や鉱滓が多量に含まれていた。伴出した土器は平城土器編年Ⅱ期にあたる。建て替え後の正殿SB15414の柱抜き取り穴にも，同じような廃棄物が捨てられている。調査区内で炉そのものは見つかっていないが，付近で還都後の造営にともなう金属器生産が行なわれたらしい。

奈良時代後半　前半期の区画をほぼ踏襲して築地塀に造り替え，基壇に建つ礎石建物を配置する官衙へと様変わりする。西面築地は積土や添柱は遺存しないが，南の第222次調査区では掘り込み地業が見られ，築地基底幅が5尺であることを確認している。北面築地は下層と同じく水路のため未確認ながら，南雨落溝SD15432と北に開く八脚門SB15434を検出した。雨落溝は築地部分が玉石組で，門部分では凝灰岩切石による。門の基壇は，雨落溝心々で東西11.8m（40尺）・南北8.3m（28尺）の規模で，礎石据え付け掘形が3箇所残る。柱間は桁行が中央間14尺，両側8尺で総長30尺，梁間は16尺（8尺×2）である。この八脚門の確認により，上層官衙が北を正面とすることが判明した。築地内で検出した2棟の礎石建物は，いずれも壇正積基壇の凝灰岩地覆石が部分的に残り，周囲を雨落溝が巡る。基壇の積土は10数cm残るものの，礎石据え付け掘形が見当らず柱位置は明らかでない。基壇の規模は，北のSB15438が南北9.4mで東西11.6m，西寄りの南北棟SB15442が南北13.4m以上で東西9.6mである。第222次調査検出の正殿とみられる東西棟SB14740を合わせ，上層官衙の建物は3棟が明らかになった。正殿は北門

と心をそろえるが，今回確認した２棟はいずれも西側に寄っている。この２棟の東側には拳大の礫敷が広がっており，北門心に対して対称位置にあった基壇が削平されたとは考えにくい。上層官衙は東寄りに空間地をもつ非対称の建物配置をとるものであったらしい。

なお，奈良時代以前の遺構として，古墳時代の溝 SD15411がある。幅８ｍ・深さは２ｍほどの北西から南東方向に流れる流路で，若干の木製品と布留式土器が出土した。また大型の壺棺を埋納した土坑 SX15412がある。土師器甕・高坏をともない碧玉製管玉１個が出土した。

下層・上層の各官衙の性格について，現在の見方をまとめておこう。下層については，第222次調査で検出した井戸 SD14690から木簡が多量に出土し，多くは官人の勤務評定である考課木簡であった。「式部省五口」と書かれた墨書土器も伴出している。奈良時代後半の式部省の下層に官衙が存在しないことも考慮すれば，東官衙の下層遺構を奈良時代前半の式部省にあてることが妥当であろう。一方，その区画を踏襲した上層遺構は，平安宮の絵図に見られる式町（式部厨）すなわち式部省の附属機関と考えていたが，式部省そのものとは築地塀で隔てられ，北に門を開くこと，正殿の規模が式部省正殿より大きいことから，別の官衙に比定することが適



壬生門北側の官衙の変遷（図Ｄ　数字の単位は尺　（　）は大尺）

当かもしれない。上層遺構そのものからは性格を判断する遺物は出土していないが，第32次調査で南面大垣の北雨落溝から出土した木簡群・墨書土器の中に，式部省関連以外に神祇官に関わるものが含まれている。これらの遺物が，朝集院南方の官衙から捨てられたものとすれば，上層官衙を神祇官に比定することも一案である。平安宮での神祇官の位置がやはり宮の東南隅付近であることや，建物配置が左右非対称で類似することも参考となろう。

以上，第236次までの調査成果を踏まえて，壬生門を入った地域の変遷を示したのが図Dである。奈良時代前半には，壬生門を入ると朝集院南辺の区画が正面に見え，550大尺を隔てて東西に南北塀が配置され，その間は広大な空閑地となっている。そして南北塀SA14680の東に式部省があった。奈良時代後半になると，南北塀は撤去され東西に正方形の官衙がおかれる。式部省は新設された東の区画に移り，かつての式部省の跡地を占めたのは神祇官と想定する。奈良時代前半の式部省と後半の神祇官は，ほぼ同じ区画を踏襲しており，南北長は250尺である。ただし東西長は東面の区画を検出しておらず明らかでない。けれども，奈良時代前半の当初の正殿SB15413の桁行心が，西面の掘立柱塀から100尺の位置にあり，奈良時代後半になっても，北門である八脚門SB15434と正殿SB14740は，同じように西面築地から100尺の位置を心としており，南門である棟門SB14725もわずかにずれるがほぼ心をそろえている。この南北軸が奈良時代を通して意味を持ち続けていることを考慮すれば，これを中軸とする東西200尺の区画を想定することが妥当であるかもしれない。

第二次朝堂院東第五堂の調査（第238次）

第二次朝堂院の12堂のうち，昨年（1991）度までに東第一堂から四堂までの南北棟について調査を終了した。いずれも現存基壇に建つ礎石建物を確認するとともに，下層に掘立柱建物を確かめている。今回，第238次調査として東第五堂の調査を実施した。東西棟の朝堂としては最初の調査である。その結果，奈良時代前半の掘立柱建物である下層東第五堂SB15700と，これを建て替えた奈良時代後半の礎石建物である上層東第五堂SB15710を検出した。

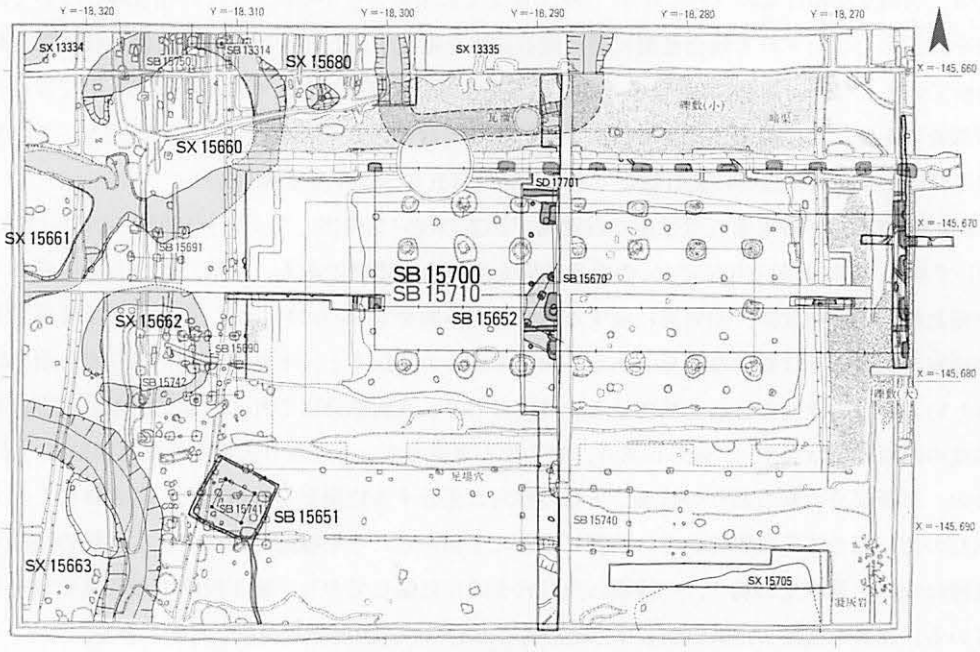
奈良時代前半　下層東第五堂は掘立柱建物で20基の柱穴を検出した。桁行12間（120尺＝10尺×12）で梁間4間（40尺＝10尺×4）の南北に廂をもつ両廂建物である。東第二堂から第四堂までの南北棟の下層朝堂が，朝庭部に面する西側にのみ廂をもつのに対して，東西棟の下層第五堂が両廂であることは新たな所見である。両廂である点を除くと，下層第二堂・第三堂と規模は等しい。身舎の北側の柱筋を第四堂の北妻に合わせ，北廂部分はこれより北に出る。東妻は第四堂の西廂からは20尺（5.9m）にあり，軒の出を考慮すると，かなり近接した位置関係にある。なお，東妻部分の断ち割りの結果，下層の柱穴に先行する柱掘形を検出した。身舎妻柱と北入側柱の間におさまる位置である。西側にさらに1個あることを確認したが，ともに柱の抜取り痕跡はない。第四堂の場合，一度掘った柱穴を南に拡張しており，施工段階での変更を想定している。掘形を拡張した第四堂とは方法が異なるものの，関連ある現象と考えておく。

奈良時代後半　上層東第五堂は本瓦葺きの礎石建物であり，版築による基壇の上に建つ。いず

れも礎石は抜き取られているが，据え付け掘形が28箇所残っていた。上層東第五堂は桁行９間（111尺＝身舎13尺×７＋廂10尺×２）で梁間４間（46尺＝身舎13尺×２＋廂10尺×２）の四面廂建物である。これは第二堂・第三堂と同一規模である。また，礎石掘形の四方に配された足場穴，さらに基壇南側で，基壇縁から６尺ほどの位置でならぶ軒先まわりの足場穴を検出した。基壇の規模は，凝灰岩切石による地覆石の抜き取り跡から，東西125尺（約37m）×南北60尺（約18m）に復原できる。階段は東西に各１箇所，北に３箇所を認めた。南辺側にも３箇所にあっただろう。建物から基壇縁までは７尺（2.1m），階段は基壇縁からさらに５尺（1.5m）外に出る。基壇の周囲には礫敷の舗装がなされている。

今回の調査によって，東西棟の朝堂にも下層建物の存在が確認でき，第六堂が未調査とはいえ，第二次朝堂院に当初から12堂がそなわっていたことがほぼ確定した意義は大きい。東第五堂の規模は上層・下層とも基本的に第二堂・第三堂と等しく，さらに同一とみられる第六堂を加えて，東西各六つの朝堂のうち，第一堂と第四堂をのぞく四つの朝堂が同一規模となる。

また，奈良時代以前の遺構についても，ある程度の様子を明らかにできた。古墳時代前期には集落が営まれ（竪穴住居 SB15651・15652），その後おそらく中期には古墳群が形成されている（方墳 SX15660～15662，円墳 SX15663）。奈良時代の整地土下には，住居址や古墳が広がりをもつことが予想される。さらに７世紀代に入っても，確実な遺構としては土坑１基（SK15680）にとどまるが，包含層中に多くの土器が認められ，古墳周濠の埋立土に白鳳時代とみられる瓦が見られるなど，この地域が継続的に生活の場として利用されてきたことがわかる。



第二次朝堂院東第五堂調査遺構図（１：500）

東 面 大 垣 の 調 査（第234-11次）

法華寺町内における奈良市の河川改修（ボックスカルバート埋設）にともなう発掘調査。昨年（1991）度に第223-16次調査として南側を調査したが，それに続く北延長部分にあたる。総延長100m におよび，平城宮東面大垣の推定位置付近にあたる。

トレンチの北端と中央部の２箇所で東面大垣を検出した。北端では大垣の東半部が残り，厚さ10～40cm ほどの築地積土および東雨落溝を確認した。基底部は掘り込み地業でなく，地山削り出しによる。この地点から北の水上池に向かって，築地は高まりとなって現在の地表面においても認められる。トレンチ中央部で検出した築地は，やはり基底部を地山削り出しにより，その上に15cm ほどの積土が残る。この築地基壇部分の幅が約３m，築地本体の幅は不明。東雨落溝は幅0.7m で深さ0.25m，西雨落溝は幅１m で深さ0.25m である。２箇所で検出した東面大垣の位置は，これまでの想定から約１m 西にずれる。

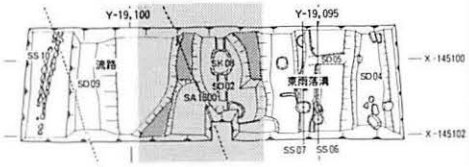
南端付近では掘立柱建物２棟を検出した。北側のものは北廂のつく東西棟とみられ，東妻の４基の柱穴を検出した。南廂の有無は調査区外のため不明。大垣のすぐ内側まで規模の大きい建物が建てられる時期があったことがわかる。その南の建物も同じく東西棟になろう。

一条通りより南のトレンチでは，２基の柱穴を検出し，昨年の223-16次調査部分と合わせて６基の柱穴がならび，南北の掘立柱塀を構成する可能性が高くなつた。柱間は2.4m 前後だが不揃いである。

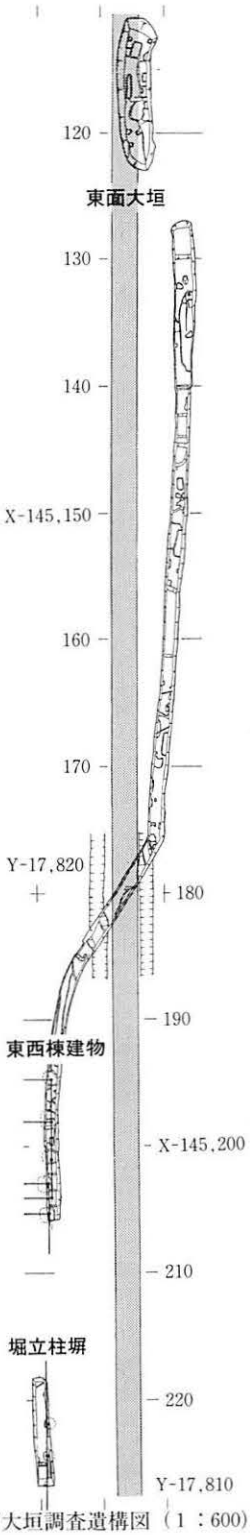
西 面 大 垣 の 調 査（第234-12次）

寺の庫裡改修にともなう調査。西面大垣の基底部と東雨落溝を確認した。築地部分の下層には斜行する流路があり，これを埋め立て整地した上に大垣が築かれる。斜行溝の最下層から奈良時代初期の須恵器鉄鉢が出土し，この部分の大垣築成は遷都直後には遡らないらしい。斜行溝のはずれる北壁付近の所見からは，地山を掘り込む地業は認められない。築地基底部の積土が厚さ５～20cm で幅3.2m ほど残る。築地本体の幅は不明。東雨落溝は，現状で幅0.3m で深さ0.1mである。

（岸本直文）



西面大垣調査遺構図（１：200）

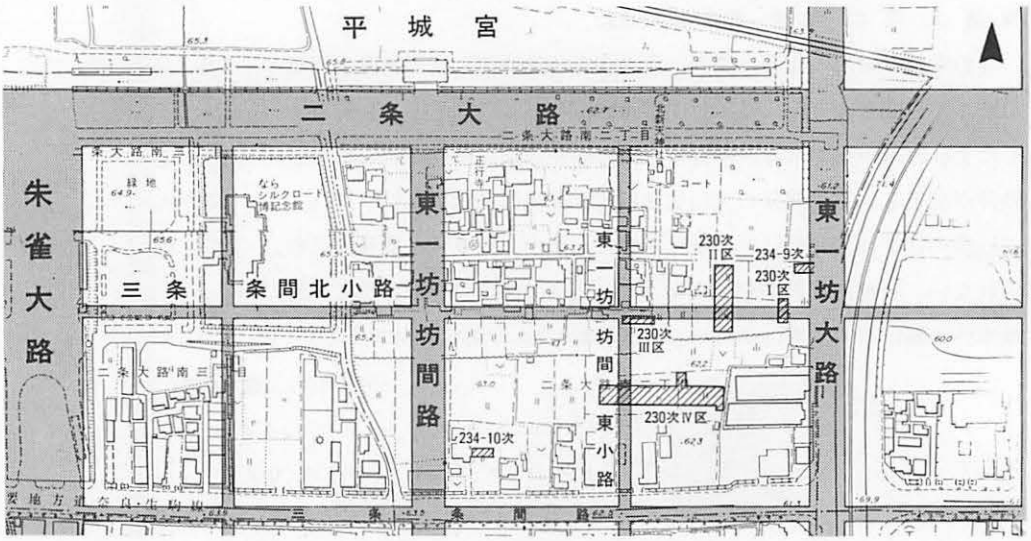


東面大垣調査遺構図（１：600）

2 平 城 京 跡 の 調 査

左京三条一坊十・十五・十六坪の調査（第230次，234-10次） ともに駐車場造成に伴う事前調査。発掘の結果，十五・十六坪の間には三条条間小路が存在せず，両坪が奈良時代を通じて一体の敷地として利用されたことが明らかになった。但し，両坪の間には東西中軸線上に礎石建の門SB8を開く築地塀SA1があり，南北二つの区画に分けて利用されていたと見られる。SA1は門の位置決定方法から考えて，平城京造営当初からのものと見なされる。SD3a・b，SD2a・b・cが南北の雨落溝となる。十五坪の中心部では，三棟の大型東西棟建物SB14・15・16の東西に南北棟建物SB13・17を配するという，京内の宅地だけでなく，宮内でも例を見ない配置が奈良時代を通じ続いている。これらはいずれも当初の掘立柱建物を後に礎石建物に建て替えている。瓦の分布から見て，SB14bが瓦葺き建物であった可能性が高い。また十六坪では2間×7間の身舎の四面に庇が付く極めて格の高い東西棟掘立柱建物SB7が建てられ，京内では最大規模の井戸SE6が設けられている。SB7は桁行・梁間方向ともに柱間寸法は身舎9尺，庇8尺で，桁行は総長79尺，梁間は34尺。瓦の分布から見て，瓦葺き建物であった可能性が高い。SE6は一辺が約1.8mの蒸籠組の井戸で（図参照），従来京内で最大であった長屋王邸の井戸SE4850の一辺1.35mよりはるかに大きい。横板は7段（1段の高さは24.5～26.0cm）が現存する。深さは約3mである。掘形および井戸枠内埋土出土の土器の年代から，奈良時代後半に掘られ，長岡遷都以後に廃絶したものと考えられる。その他，井戸枠埋土から奈良時代末期の軒丸瓦，井戸枠内から「内□〔匠カ〕寮」と記された木簡1点，斎串・曲物などの木製品が出土している。

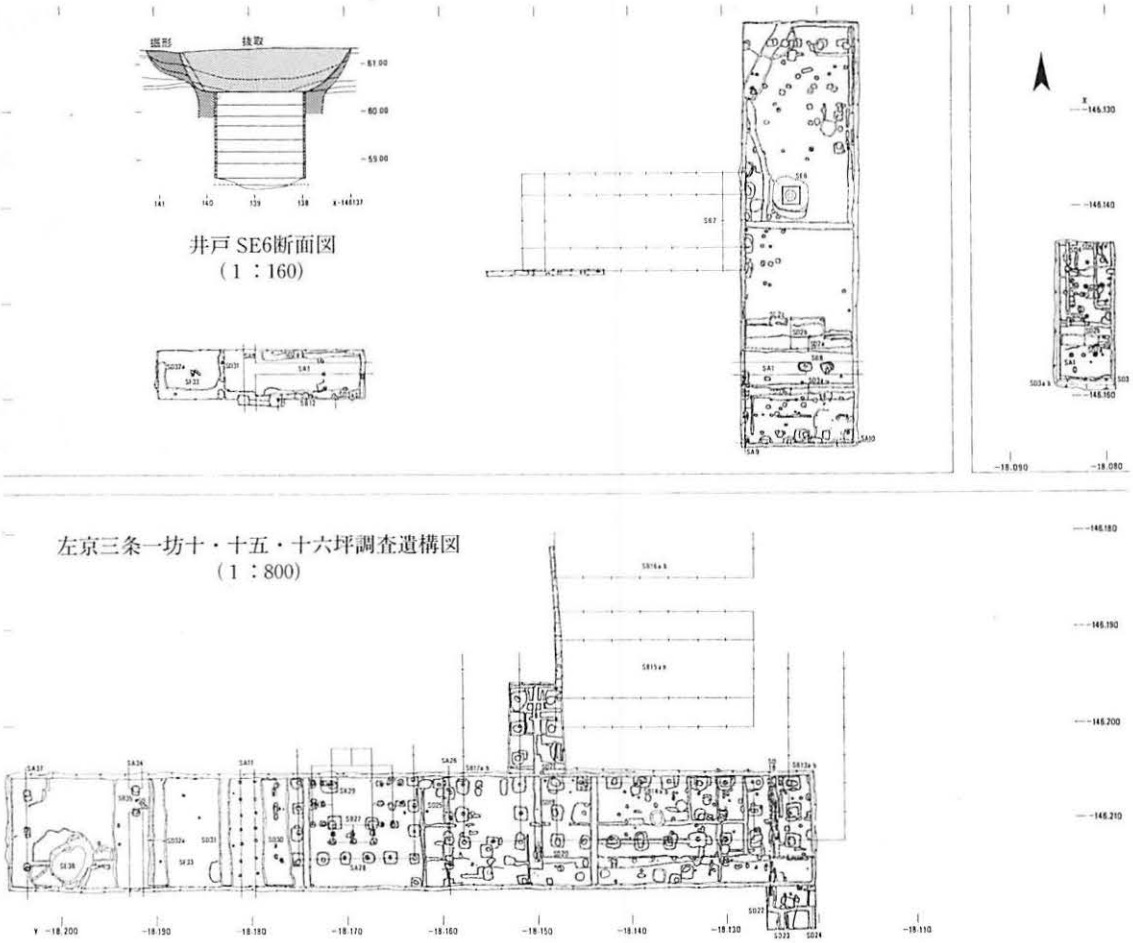
十五・十六坪は，平城宮の南に接する地であり，その建物配置だけでなく，宮内の塼積み基壇官衙と同一型式の軒瓦が全軒瓦の四分の一を占め，塼が多数出土し，官衙名の書かれた木簡が出土したことなど，遺物の点でも個人の邸宅とは考えにくく，宮外官衙の可能性が高い。



左京三条一坊十・十五・十六坪調査位置図（1：5,000）

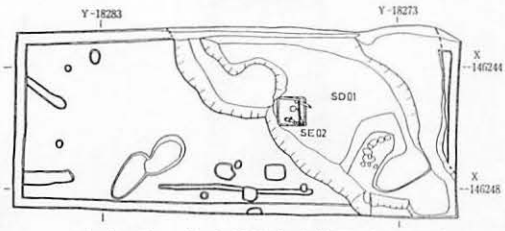
一方，十坪と十五坪の間では，東一坊坊間東小路SF33や十坪東辺を限る南北方向の築地塀SA34・柱間８尺の掘立柱の門SB35を検出しており，十坪は十五・十六坪とは別の区画であったことが明らかになった。十坪東辺で検出した井戸SE36は，一辺が約６ｍの隅丸方形の掘形をもち，枠木は全て抜き取られ，土坑状を呈する。井戸枠抜取穴からは平城Ⅱの土器や「・枝宅車二両／・□年六月廿一日□□〔赤染カ〕□」，「蓮子壱斗」などと記された木簡５点が出土した。

また十坪西南部の第234-10次調査（34頁図参照）では，奈良時代の蛇行する流路SD01（幅４～６ｍ，深さ２ｍ），これと重複する井戸SE02などを検出した。SE02は，井戸掘形は95cmの方形で，内側に８枚前後の薄い縦板を立て並べている。井戸底から須恵器横瓶・広口壺・籠状編物などとともに木簡７点が出土した。木簡はいずれも削屑で，「西嶋」，「西」などの記載が見える。SE02は遺物から細かい年代を限定できないが，SD01下層堆積のある時点で造られ，その上層と同時に廃絶している。SD01下層からは内面に放射暗文とラセン暗文をつける土師器杯Ａが出土しており，平城ⅡからⅢの古い段階まで流路として使用されたようである。上層からは土師器椀Ａが出土しており，平城Ⅲの中段階以降のある時点で埋められたものと考えられる。

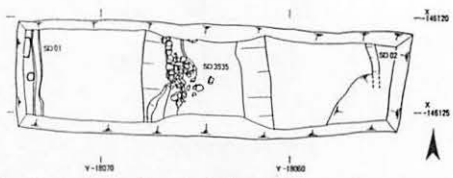


左京三条一坊十坪は平安京では神泉苑の位置にあたり，その位置で奈良時代の蛇行流路を検出し，池の存在を示唆する「西嶋」の木簡が出土したことは注目に値する。但し，第230次調査では，某宅の存在を推定させる木簡も出土しており，個人の邸宅の可能性も高く，今後左京三条一坊十坪の性格を検討していかねばならないであろう。

東一坊大路西側溝の調査（第234-9次） 駐車場造成に伴う事前調査。左京三条一坊十六坪東側の東一坊大路西側溝 SD3935を約 5 m 分検出した。SD3935は，幅は検出面で 6 m，底で 4 m，深さ1.6m の断面逆台形の溝で，西岸に40～50cm 大の河原石による護岸を持つ。埋土は上から暗灰褐色砂質土・暗灰色粘質土・暗褐色粘質土・暗灰色バラス土の計 4 層に分かれる。遺物には木簡 8 点，金製飾金具断片，和銅開珎 6 点，神功開宝 1 点，帯金具 4 点，海老鍵 1 点，鉄釘 2 点などがあり，また護岸石列の南端で籌木と思われる木製品がまとまって出土した。今回の調査で，東一坊大路西側溝に，部分的に護岸の施されていることが明らかになった。また最下層の暗灰色バラス土層からも奈良時代後半の土器が出土しており，東一坊大路西側溝は奈良時代を通じて溝としての機能を保っていたと考えられる。SD01は幅約40cm の素掘溝で，左京三条一坊十六坪の東を限る閉塞施設の東側溝の可能性がある。SD02は中世の瓦器や火鉢を含む溝。



左京三条一坊十坪調査遺構図（1：250）



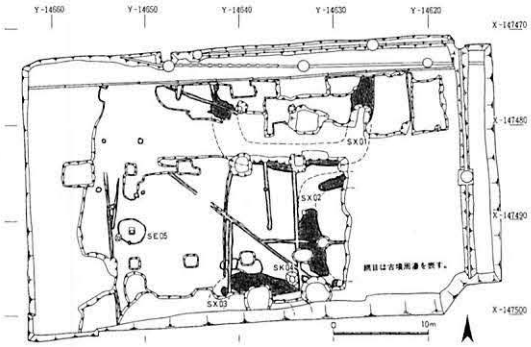
東一坊大路西側溝調査遺構図（1：400）

東紀寺遺跡（第240次） 奈良女子大学附属中・高等学校の体育館建設に伴う事前調査。当該地は平城京外にあり，紀寺跡推定地の東約100m に位置する。建設計画では，建設予定地に建っていた講堂を撤去し，より広い面積の体育館を建てることになっていた。調査区内は講堂建設の際の造成とそれ以前の耕作により大きく削平を受け，さらに講堂基礎や建築廃材を投棄した土坑などによる攪乱が著しい。また調査区北辺部では，汚・雨水管の埋設による攪乱が現地表下1.3m 前後に達している。調査区の土層は上から造成土，耕土層，橙黄褐色砂質土層で，以下礫層と粘土・シルト層の互層が続く。遺構は橙黄褐色砂質土層上面で検出し，橙黄褐色砂質土層以下での遺物の出土は確認できなかった。検出した遺構には，古墳 3 基（SX01～03），土坑 1 基（SK04），井戸 1 基（SE05）などがあるが，いずれも上半部はかなりの削平を受けている。

SX01～03は周濠底部が僅かに残るのみで，深さは20cm前後，幅は1.5～ 2 m である。いずれも周濠内に黒褐色の粘質土混じり砂質土ないし粘質土が堆積し，堆積土の色調・土質は共通する。SX01は内法で12m 前後の方墳になろう。堆積土中から埴輪小片，土師器高杯が出土したが，風化が著しく，時期は不詳である。SK04は直径1.2m，深さ30cm の円形を呈する土坑で，9 世紀前半の須恵器，土師器などが出土した。大和型の土馬胴部片も出土しているが，9 世紀まで

は下らない。SE05は，井戸枠は上半部が一辺約90cm，高さ１ｍ以上の方形縦板組横桟留め，下半部が一辺20～40cm，高さ約１ｍの六角形縦板組，底部に円形曲物（直径40～50cm，高さ20cm）を据えている。現状での深さは約2.2mである。井戸掘形は階段掘りで，検出面では直径３ｍの円形，検出面から50cm下で一辺1.5m程度の隅丸方形に狭まり，さらに1.7m下で直径１ｍ内外の円形土坑となる。井戸枠内の埋土には９世紀前半の須恵器，土師器等が含まれ，井戸はその頃に廃絶したと考えられる。また井戸掘形西辺部の埋土から大和型の土馬胴部片が出土したが，今回の出土状況からは井戸枠設置時の祭祀に伴うものとは断定できない。

今回の調査では，調査区内の削平が著しく，古代～中世・近世の遺物包含層は皆無であり，遺構も全体的に少なかった。上掲以外の遺物としては，縄文中期土器小片１点（攪乱土出土），軒平瓦１点（6732F），平瓦数点，銅銭（銭文不明）などがある。　（森　公章）



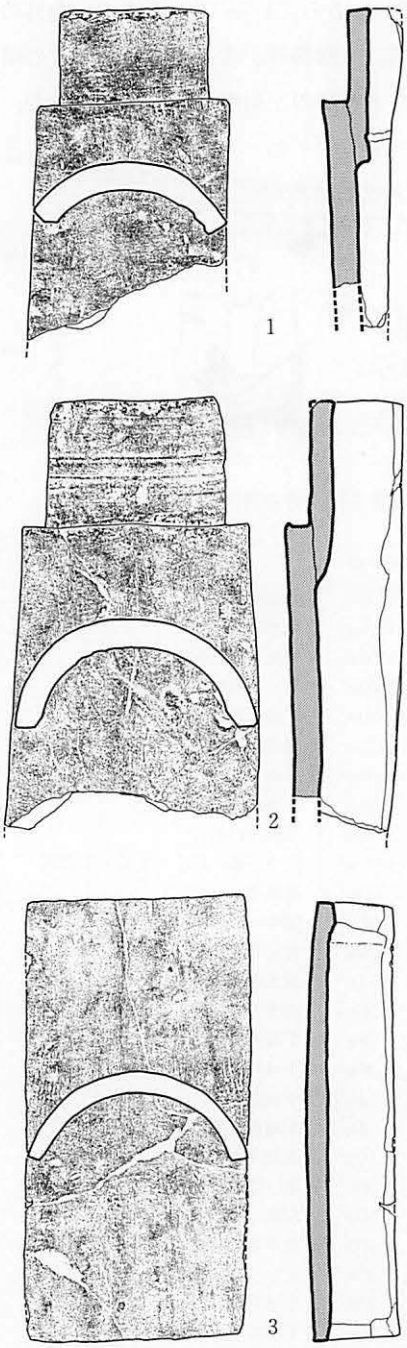
東紀寺遺跡調査遺構図（１：800）

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6AAH･I･X･Y	平城宮　第229次	92.4.2～92.7.9	2400m²	式部省
6AAH・6AAI	平城宮　第235次	92.9.1～92.9.24	1200m²	式部省
6AAH・6AAI	平城宮　第236次	92.10.3～92.12.26	3300m²	式部省東官衙
6AAV	平城宮　第238次	93.1.7～93.4.8	2400m²	第二次朝堂院東第五堂
6AAN	平城宮　第234-1次	92.4.6～92.4.8	20m²	平城宮内北方
6ALB・6ALC	平城宮　第234-11次	92.12.1～92.12.15	125m²	東面大垣
6ADB	平城宮　第234-12次	93.1.27～93.2.5	30m²	西面大垣
6ABN	平城宮　第234-13次	93.2.10～93.2.12	21m²	平城宮内北方
6ABN	平城宮　第234-14次	93.2.16～93.2.19	27m²	平城宮内北方
6AFJ	平城京　第230次	92.7.6～92.8.31	1700m²	左京三条一坊十・十五・十六坪
6BYS	平城京　第233次	92.7.1～92.9.4	700m²	薬師寺
6BZT	平城京　第237次	92.10.28～93.3.2	40m²	頭塔
6AER	平城京　第240次	93.2.10～93.3.30	1500m²	東紀寺遺跡
6BTL	平城京　第234-2次	92.4.2～92.4.22	13m²	東大寺境内
6BFO	平城京　第234-3次	92.4.15～92.4.22	58m²	法華寺旧境内
6ASB	平城京　第234-4次	92.4.20～92.4.21	6m²	平城宮北方
6ASB	平城京　第234-5次	92.6.22～92.6.25	36m²	平城宮北方
6ASA	平城京　第234-6次	92.6.25～92.6.29	12m²	平城宮北方
6ASA	平城京　第234-7次	92.7.1	6m²	平城宮北方
6BYS	平城京　第234-8次	92.7.6～92.7.10	50m²	薬師寺旧境内
6AFJ	平城京　第234-9次	92.10.5～92.10.19	100m²	東一坊大路西側溝
6AFJ	平城京　第234-10次	92.11.18～92.12.1	90m²	左京三条一坊十坪
6BFO	平城京　第234-15次	93.2.22～93.2.23	40m²	法華寺旧境内
6AFJ	平城京　第234-16次	93.2.25～93.3.1	30m²	左京三条一坊七坪
6ASA	平城京　第234-17次	93.3.4～93.3.8	32m²	平城宮北方
6ALE	平城京　第234-18次	93.3.15～93.3.19	20m²	平城宮東辺

1992年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

藤原宮跡・京跡出土の道具瓦

飛鳥藤原宮跡発掘調査部



瓦実測図（1：6）

1992年度に行った調査あるいは整理作業で見出した特殊な瓦について報告する。

藤原宮第27次調査（東面中門調査）出土丸瓦

1979年に行った藤原宮第27次調査では，宮東面大垣の内と外にある濠から大量の瓦が出土した。

1はそのなかの一点。現存長26.2cm，玉縁長7.3cmの一見普通の丸瓦である。しかし，通常の丸瓦（2）が模骨に巻いた粘土円筒を二分割して形成するのに対し，1は三分割して弧の浅い細い丸瓦とする。通常の丸瓦と一緒に使用できないことは確実だが，その用途は明らかではない。

1と2は，丸瓦部と玉縁部を各々別の粘土板で成形する技法が共通する。胎土，焼成等から判断して，これらは藤原宮瓦のGグループ（『飛鳥藤原学報Ⅱ』）に属す。さらに1には，玉縁部の布をしばった紐の圧痕がある。これもGグループの丸瓦に観察できる（大脇1992）。玉縁部の紐圧痕は，法隆寺西院伽藍や川原寺の丸瓦にも認められる技法である。

雷丘北方遺跡第3次調査（藤原京左京十一条三坊）出土丸瓦

3はほぼ完形の丸瓦。全長33.6cm，幅17.5cm。丸瓦の玉縁部が欠損したかに見えるが，玉縁段部の凹面をヘラケズリで調整するので，もともと玉縁部は作られていない。玉縁部のヘラケズリは，筒部先端と同じく端で深くなっている。これは，両方に玉縁部を差し込むための工夫であろうか。粘土板巻き付け作りで，凸面にはかすかに縦位縄叩き目が残る。

雷丘北方遺跡では主殿のほかに東西脇殿などがみつかっているが，いずれも掘立柱建物である。出土した瓦の総量からしてこれらの建物は瓦葺きではなく，せいぜい棟部分にだけ瓦を用いた屋根だったろう。この丸瓦もその一部を構成する道具瓦と考える。

藤原宮第70次調査（内裏南西隅の調査）出土有段平瓦

4は藤原宮第70次調査で南北溝SD 1680から出土した平瓦。現存長32.8cm，現存幅18.6cm。軒平瓦のように広端から19cmところに，高さ0.8～1.1cmの低い段を作るが，広端面に紋様はない。段部は幅7～8cmの範囲だけに粘土を貼り足して作る。凸面は縦位縄叩き目をヨコナデで消すが，段部のナデは弱く縄叩き目が残る。粘土板巻き付け作りである。

これと全く同様の平瓦が平城宮跡でも出土している（5）。この瓦は平城宮跡第20次調査（平城宮内裏北外郭）の斜行溝SD2110から出土した。全長38.6cm，広端幅25.7cm，狭端幅23.5cmある。段部は長さ16cm，高さ0.8～1.0cmあり，段部全面ではなく段近くにだけ粘土を貼り足す。縦位縄叩きの粘土板桶巻き作り。製作技法だけでなく，胎土や焼成も4とほとんど同じなので，平城遷都に際して藤原宮から持ち込まれた瓦であることが判明した。

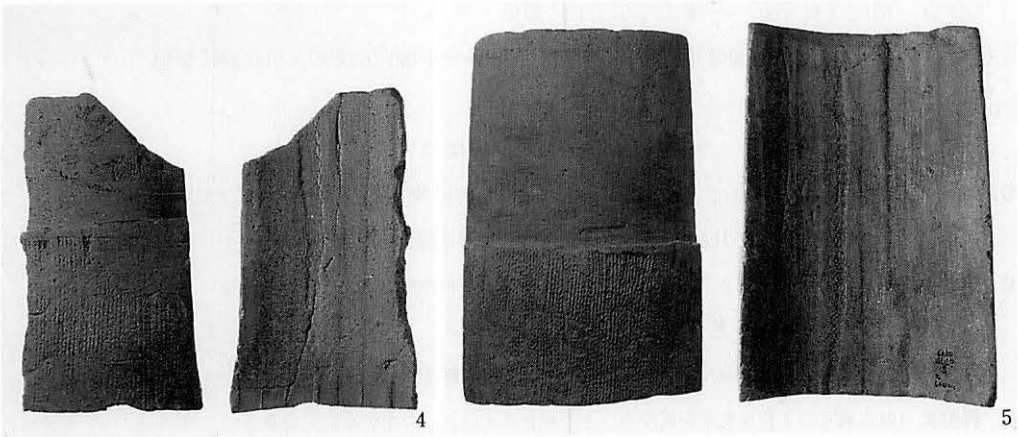
さて，4・5とほとんど同じ瓦が平安京南効の鳥羽離宮跡にある白河天皇成菩提院陵や，鴨東の尊勝寺跡からも出土している。いずれも11世紀から12世紀初め頃の播磨産の瓦と推定され，鳥羽離宮では側縁に一定間隔で段を作った丸瓦や軒丸瓦と共伴することから，平瓦凸面の段は瓦のずり落ちを防止する工夫と考えられている（鈴木1989）。

一方，藤原宮ではこの種の有段平瓦は今回紹介するものが初例であり，量的に軒平瓦とみあわない。この瓦が内裏外郭塀の西南隅から出土したことから，鳥羽離宮のような使用法ではなく，入り隅の谷に用いられた谷樋瓦（たにどいがわら）と考えられる。入り隅の谷はほかより勾配が緩くなる。凸面にもうけられた段部はそれに対処する工夫とみるのである。　（花谷　浩）

〈参考文献〉

大脇　潔　1992　「丸瓦の製作技術」（『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第49冊　奈良国立文化財研究所）

鈴木久夫　1989　「鳥羽離宮の瓦」（廣田長三郎編『古瓦図考』ミネルヴァ書房）



谷樋瓦（4：藤原宮跡出土，5：平城宮跡出土）

平城宮・京と同笵・異笵の軒瓦

平城宮跡発掘調査部

1992年から1993年にかけて平城宮・京式と同笵の軒瓦の調査を行った。いかに概要を記す。

A　同笵瓦

①近江膳所廃寺の南5～600mの地出土6235B――平城宮6235Bと同笵――保良宮の瓦だろう

②河内国分寺及び河内百済寺6663H――平城薬師寺6663Hと同笵――国分寺例が古い

③丹波国分寺6236D・6725A――唐招提寺金堂6236D・6725Aと同笵――笵・工人の移動

④伊予国分寺6304D――大安寺6304Dと同笵――近世・近代に瓦が運ばれたものか

⑤下野薬師寺6682E――興福寺6682E――播磨本町遺跡6682E――播磨溝口廃寺6682E

⑥下野薬師寺6307新種――興福寺6307新種――播磨溝口廃寺6307新種――⑤・⑥は組み合う

⑦壱岐嶋分寺6284A――平城宮6284Aと同笵――笵型の移動

⑧豊前椿市廃寺6284F――平城宮6284Fと同笵――笵型の移動

⑨伊勢御麻生薗廃寺6235B――平城宮6235Bと同笵――保良宮廃止後笵型が伊勢へ

⑩伊勢長者屋敷6719A――平城宮6719Aと同笵――笵型の移動

⑪河内新堂廃寺6667A――法華寺下層6667Aと同笵――縣犬養橘宿禰三千代の本貫地

⑫河内新堂廃寺6671A――興福寺6671Aと同笵

B　異笵瓦（拓本・写真の比較では同笵・異笵が判断できず，現物相互の比較で異笵と判明）

①信濃国分寺軒丸瓦――東大寺6235Aに酷似――工人の移動

②伊賀三田廃寺軒丸瓦――東大寺6235Aに酷似――工人の移動

③備前幡多廃寺軒丸瓦――平城宮に6225C酷似

C　異笵瓦（型式番号だけでなく種まで，その類似した瓦が明確に確定できる。原型に類似）

①信濃国分寺軒平瓦――平城京6734Aに類似

②伊賀三田廃寺軒平瓦――東大寺6732Eに類似

③美作国府・国分寺・国分尼寺軒丸瓦・軒平瓦――平城宮6225C・6663Cに類似

④駿河片山廃寺軒平瓦――平城宮6663Cに類似

⑤備後岡遺跡他軒丸瓦――瀬後谷瓦窯6316新種に類似

C又はD　①幡多廃寺軒丸瓦2種（6225CかA類似）②賞田廃寺軒丸瓦（6225AかC類似）

③上総国分寺軒平瓦（6691AかB類似）④本町遺跡軒平瓦（6721C他に類似）

D　異笵瓦（型式番号を設定できるだけの類似点を有するが，種の類似点まで確定できない）

①幡多廃寺・賞田廃寺・片山廃寺軒平瓦（6663類似）　②日の出山窯軒平瓦（6721類似）

③播磨本町遺跡軒丸瓦（6010類似）　④備後岡遺跡他軒平瓦（6710類似）

E　異笵瓦（型式番号の主要な要素が異なる。どの瓦をイメージしたかが推定できる。）

①片山廃寺・上総国分寺軒丸瓦（6225イメージ）　②日の出窯軒丸瓦（6282イメージ）（山崎信二）

平城宮東大溝 SD2700出土の黒陶片

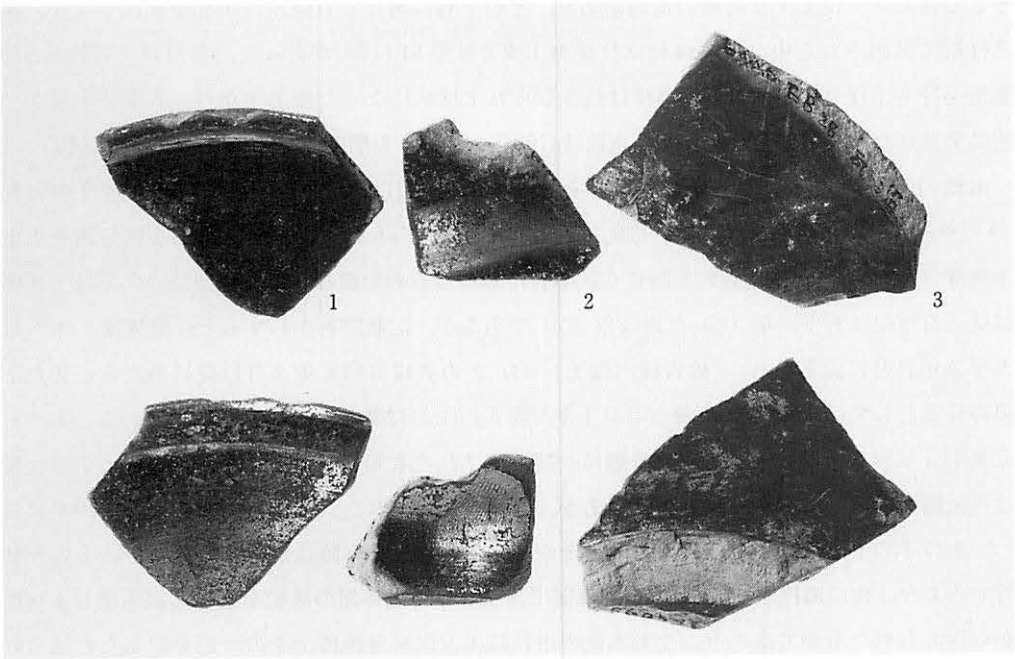
平城宮跡発掘調査部

1986年度の第172次調査で検出した基幹排水路 SD2700の奈良時代後半の堆積層から，炭素を内外面に吸着させ器表面を黒色処理した土器片（黒陶片）が出土している。いずれも水簸した緻密粘土を用いロクロで成形する。内外両面は丁寧に篦磨き調整され，光沢を放つ。硬質に焼き上がり，破面は淡灰黒色を呈す。

我国でも土器の内外両面を黒色処理する焼物は存在し，黒色土器B類と呼んでいるが，その初現は，9世紀前半代であり，風字硯や小壺などの器種が知られているにすぎない。黒色土器B類の盛行する時期は，10世紀後半～11世紀中頃であり，粘土紐巻き上げ成形で作られている。

出土した黒陶片は，時代的にも製作技法的にも我国の黒色土器B類とは明らかに異なり，渤海もしくは唐から搬入された可能性が高い。

1は須恵器杯蓋に似た破片で外面の縁部周辺には浅い沈線がめぐる。最大長3.7cm，厚さ約0.4cm。3は蓋もしくは盤とみられるもので，貼り付けによる輪状紐もしくは高台を付した痕跡をとどめる。接合を良くするためか，貼り付け面には同心円状に2～3条の沈線がめぐる。最大長4.9cm，厚さ0.6～0.9cm。2は外面に稜を有し，稜より上部が外反する破片で稜椀の可能性もある。最大長3.5cm，厚さ0.6cm。2は天平宝字年間頃のSD2700の護岸の瓦層，1・3はそれより上位の堆積層から統一新羅時代の陶質土器壺片とともに出土している。（巽　淳一郎）



SD2700出土黒陶片（上：表面，下：裏面）

平城宮跡・京跡出土の木簡

平城宮跡発掘調査部

1992年度の調査では，平城京左京三条一坊の３カ所から総計21点の木簡が出土した。検出した遺溝については，本書「平城宮跡・京跡の調査」の項参照。また91年度の第222次調査で出土した木簡については，昨年度の年報で一部報告したが，その後の整理の結果を踏まえて改めてその主なものを紹介する（『平城宮発掘調査出土木簡概報（26)』参照)。

平城京左京三条一坊十・十五・十六坪（第230次調査） 十五・十六坪は奈良時代を通じて一体として利用されていたことが判明した。木簡は十坪東辺で検出した，枠木が抜き取られて土坑状を呈す井戸 SE36から５点と，十六坪内で検出した京内最大級の蒸籠組の井戸 SE６の枠内から１点出土した。前者には，某宅へ車二両で何かを運んだことを示すとみられるもの（１）がある。また後者は「内匠寮」という官司名を記すが（３），内匠寮と遺溝との関連は不明である。

平城京東一坊大路西側溝（第234-9次調査） 左京三条一坊十六坪東側の東一坊大路西側溝 SD3935 を５ｍ分検出した。埋土は大きく４層に分かれ，木簡は第３層から１点，第４層から７点（うち削屑３点）の計８点が出土したが，判読できるのは第３層出土の１点のみ。

平城京左京三条一坊十坪（第234-10次調査） 十坪西南部において検出した井戸 SE02から7点の木簡（すべて削屑）が出土した。この井戸は蛇行する流路 SD01と重複している。

式部省東官衙（第222次調査） 木簡が出土したのは式部省東官衙地区である（『年報　1992』参照)。そこでは大きくは上下２時期の遺構があり，その下層にあたる官衙の西南部を検出したが，掘立柱塀で区画された中に南北棟掘立柱建物１棟と井戸 SE14690があった。井戸は一辺約５ｍの堀形を持ち，深さは約２ｍ。井戸枠は抜き取られ土坑状になった埋土中から，大量の木簡が一括投棄された状況で出土した。その点数は4794点，そのうち削屑が4705点と大半を占める。

木簡の内容は式部省の召文とみられるもの（８），考目録に関するもの（７），選文の付札（９）や考課令分番条の条文（21）（22），考課・成選関係のもの等であり，第32次補足調査出土木簡群（『平城宮木簡四』参照）と同じく式部省に関わるものである。その時期については，木簡に見える年紀は天平元年（25）と同３年（26）であるが，記載内容からすると「鎮撫使」(16) は天平３年11月に設置され，「故吉備内親王」(14) との表現は同元年２月以降にあたる。また下限の目安としては，「新田部親王」(13)「舎人親王」(15) は共に同７年に死去している。おそらく天平３年11月以降そう遠くない時期に一括投棄されたものであろう。したがって，下層官衙は当該時期の式部省関連官衙とみられるが，西側で検出された式部省官衙は奈良時代後半に属し，かつその下層には建物遺構がないことから，当遺構は奈良時代前半の式部省そのものと判断できよう。南に隣接する第155次調査地区で出土した神亀年間の年紀をもつ考課木簡も本官衙から捨てられたものであろう。なお木簡の中には大宝医疾令医博士条の一部を記したと見られるもの，唐の則天武后に関連する書名らしき『聖母神皇集』の名を記すものもある。（舘野和己）

第二三〇次調査出土木簡

(1) ・□枝宅車二両

・□年六月廿一日□□□［赤染ヵ］　井戸SE三六　(159)・33・7 081

(2) 蓮子壱斗　(221)・23・2 031

(3) 内□寮［匠ヵ］　井戸SE六　(61)・(17)・2 019

第二三四―九次調査出土木簡

(4) ・池万呂□　□女

・□　□　□　□　(86)・(10)・2 081

第二三四―一〇次調査出土木簡

(5) 西嶋　091

(6) 西　091

第二二二次調査出土木簡

(7) ・別□司『□』［記ヵ］

太政官
中務省
中宮職
□□□□
［左大舎ヵ］

・一番考□□［目録ヵ］

『日』（他にも削り残りの墨痕あり）
以前□　(141)・(70)・4 081
（横線は刻線）

(8) ・式部□［省ヵ］□　□　栗前宮麻呂□

・□三人急々参向［右ヵ］　□　□　□　□　225・(12)・3 081

(9) 掃部司選文二巻　75・17・4 032

(10) □□阿倍朝臣廣庭位分資□［位ヵ］　(286)・25・16 065

(11) 三考播磨国□□使従□［按察ヵ］［四ヵ］　091

(12) □美濃国不破郡人［四ヵ］□考日一千二百八十　091

(13) □□□□田部親王宮蔵司主典任□［新ヵ］　091

(14) □故二品吉備内親王宮　091

(15) 一品舎人親　091

(16) 撫使判□［官ヵ］　091

(17) 造□□□［難波宮ヵ］　091

(18) 中等　雅楽寮使部　091

(19) 上等木工寮工□　091

(20) 五中上　善六　091

(21) 小心謹卓執当幹　091

(22) □供承得□［済ヵ］　091

(23) 勅進一階□［叙ヵ］　091

(24) 廿七日遭親父喪解　091

(25) 天平元年八月五　091

(26) 年卌二［×卌］　天平三年五月　091

・□

(27) □考日一千五百九十［六ヵ］　091

石山寺密蔵院経蔵聖教目録

歴史研究室

石山寺所蔵の聖教は，薫聖教，校倉聖教，深密蔵聖教，知足庵聖教などに大別できる。薫聖教は平安時代中期の淳祐内供執筆の聖教群であり，校倉聖教は江戸時代明暦年間に尊賢僧正によって，当時石山寺に所蔵されていた聖教類のなかから，平安時代以前のものと推定された聖教を取り出して三十合の経箱に収められたものである。深密蔵聖教は，大正年間大屋徳城氏が寺内院坊に分蔵されていた聖教類を本坊に一括し，それを深密蔵聖教と命名したものである。以上の三聖教群については，目録がすでに作成されている（『石山寺の研究』）。知足庵聖教は上記の聖教群以外の聖教で，現在調査中のものである。ところで，深密蔵聖教は現在122箱の経箱に収められている。そして，近時製作の新調箱を除く111箱と，現在空箱である１箱の，併せて112箱の旧箱が現存する。旧箱は江戸時代末から明治時代初年にかけて製作されたものであるが，その多くに各院坊ごとに，その院坊のものであることを示す墨書銘が記されている。その墨書銘によって，深密蔵聖教と一括総称される経箱・聖教も，その多くにつき明治時代までは寺内のどの院坊で所蔵されていたかが推定できるのである。墨書銘を院坊により分類すると，密蔵院墨書銘箱45箱，法輪院墨書銘箱は２種有り，第１種は８箱，第２種は20箱，明王院墨書銘箱15箱などである。そしてそれら寺内の院坊のうち，密蔵院については「密蔵院経蔵聖教目録（深密蔵第120函13号）」という江戸時代末の聖教目録が現存しており，それと現蔵の状況を示す『石山寺の研究　深密蔵聖教篇』所収の目録と照合することにより，現蔵の聖教のどれが当時の密蔵院でどのように所蔵されていたかが判明する。さらに，墨書銘の存在しない経箱所収の聖教についても伝来の院坊を確認していく手がかりになろう。そこで，寺院における聖教の伝来に関する史料として，ここにその目録を抄出ではあるが紹介したい。

（綾村　宏）

一　翻梵語　三帖　闕本　文師
一　悉曇字母釈義　大師　古本

（中略）

東寺要記

一　東寺諸法要　文師
　灌頂　御影供　安居終供養
　後七日御修法等
一　東寺御影供行法次第　二帖　尊賢
一　同　次第東寺祭文観音院祭文　古本
一　同　入堂次第

（中略）

仁記

一　菩提院豪遍僧都灌頂記　良賢
一　北院御室五十箇条　仁寛盛
一　仁和寺諸院家記　仁寛詮
一　仁和寺年中行事　仁尊寿院僧都成実

法会

一　高野山大塔供養記　元応二年　国師僧正　良賢
一　延暦寺供養記　一巻
一　東大寺供養記　一巻
一　東寺塔供養記　一巻　応徳三年

（中略）

忍辱山流

一　諸尊法　八結　寄合書
一　忍辱山流目録　一帖　尊観
一　諸尊法口ム　三巻　尊賢　尊観
一　四度次第　四帖

這聖教目録者密蔵院于経蔵納処之聖教之書也
従融遍僧都申請而為厳長僧都意得之書写之者也尤
他山江出事不許之者也
于時　天保五甲午年二月中旬書写終

一 心密略鈔 七帖 同

勧修寺流甲

一 小折紙 九結
一 印可略作法
一 勧流伝受日記

勧修寺流乙

一 四度次第
一 師口 四巻 尊遍
一 同 類聚 二巻 尊遍
一 護摩次第口決聞書 一帖
一 伝受集 四巻 道澄 実淳

地蔵院流甲

一 初重八結 尊遍
一 二重八結 同
一 作法集 重鏤
一 同

（中略）

地蔵院流乙

一 遍口鈔 一帖 道教僧都 恭畏
一 実帰鈔 一帖 良雄
成賢僧都口説 深賢法印記
一 土巨鈔 一帖 有以
深賢法印口決 親快法印記
一 幸心鈔 四帖 良雄
憲深僧正口決 親快法印記

（中略）

中院流

一 四度次第 尊遍
一 同 口決 同
一 十八道口伝 宥快法印 精房
一 中院相伝 栄遍 尊遍

（中略）

安祥寺流

一 四度口訣 二帖 興雅僧正説 宥快法印記
一 具至灌頂儀式 延命院 古本
一 同 私記 同
一 黒箱印信其外印信 一箱 尊観

（中略）

醍醐流一

一 四度次第 恭空
一 四度鈔 五帖 頼瑜
一 金剛界広次第 一帖 延命院
一 同 略次第 勝憲僧正歟

（中略）

醍醐流二

一 四度次第 五帖 舜尊
一 薬師護摩次第 一帖 栄忍
一 諸尊法等 一裏 初重二重之内歟 盛可
一 諸尊法 一裏 初二之内歟

（中略）

秘鈔

一 秘鈔 三十五巻 尊遍

秘鈔問答

一 秘鈔問答 二十四帖 頼瑜闍梨 尊遍

別尊雑記甲

一 別尊雑記四帙 廿四巻 心覚闍梨 尊賢 済豪
衡遍 尊観

別尊雑記乙

一 別尊雑記四帙 卅三巻 同上 同

尊秘甲

一 尊秘八帙 六十九巻 菩提院流 尊賢

尊秘乙

一 尊秘十帙 八十一巻 同上 同
一 菩提院方伝授目録 一帖 尊遍

愛聖

一 愛染供次第 尊遍
一 同 同
一 同 護摩次第 同
一 如法愛染王次第 尊観

（中略）

御修法

一 後七日息災護摩次第 西院流 済豪
一 同 増益護摩次第 安保 尊済
一 同 次第 二帖 尊遍
一 後七日五大尊供次第

（中略）

法会甲

一 正五九月御祈供養法次第 石山 尊賢
一 御影供行法次第 同上 同
一 同 誦経作法 同上
一 大般若転読法則 同上

（中略）

法会乙

一 式部僧都抄 二帖 尊観
一 法則集 一帖 仁花厳院僧正弘舜
一 諸作法指南 古本
一 曼荼羅供次第 舞楽

（中略）

図絵

一 金胎三昧耶曼荼羅図 二巻 文師
一 胎蔵曼荼羅図 一巻 同
一 同 大曼荼羅図
建久五年於石山経蔵書写 闕本
一 胎蔵念誦儀軌印契図 四巻 文師

（中略）

悉曇

一 大悉曇抄 一巻 古本
一 普賢行願讃 松坂 同

一 金剛頂念誦儀軌　同
一 施諸餓鬼飲食及水法　同
一 供養儀軌　同

（中略）

儀軌乙

一 八大菩薩曼荼羅経
一 金剛頂瑜伽護摩儀軌
一 毘沙門天王経
一 未利支提婆花鬘経

（中略）

口訣一

一 成就院別行鈔　七帖　寛助僧正
一 図像抄十巻并外目録一巻　尊遍
一 信濃阿闍梨恵什　尊済

一 諸尊護摩抄　五巻　同上
一 新写　成蓮房護摩抄　二巻　尊遍　尊賢

口訣二

一 十八契印次第　大師　尊賢
一 同義釈生起　一帖　永万元年　古本
一 御遺告　大師　同
一 同　二条　同上　同

（中略）

口訣三

一 金胎略次第　一帖　神楽岡長慶公　尊観
一 不灌鈴等　法三宮　助闍梨
一 無障金剛略念誦次第　後僧正真然　古本
一 振鈴口訣　同上

（中略）

口訣四

一 左記右記　二帖・北御　尊済
一 拾要集　同上　同
一 真俗交談記　同上　尊賢
一 金剛界大儀軌秘決抄　三帖　南岳房済暹恵眼

（中略）

口訣五

一 金剛峯寺建立修行縁起　千心　淳遍
一 真言附法纂要抄　成尊僧都　古本
一 受法作法　大師　尊遍
一 孔雀経音義　三帖　助闍梨
上本歟　日本東山坐禅沙門　或説法三宮御作

（中略）

口訣六

一 法花開題　大師　古本
一 仏母曼荼羅集　智證大師　同
一 真言三身問答　天台　同
一 大日経心目　智證大師　同

（中略）

口訣七

一 香要抄　二帖　助阿闍梨自筆本写　性海
一 理趣経秘決　三帖　俊尊
勧修寺道宝僧正　根本六巻　慶長十八年

一 臨終用心等　都合九種　一帙

結縁

一 結縁灌頂金胎作法　二巻　東寺　尊遍
一 同夜次第金胎　二帖　恵眼
一 乞戒次第　永正年中石山行用本　尊賢
一 同次第　高雄山行用本　恵眼

（中略）

尊法

一 当年属星供次第　尊遍
一 本命星供　同
一 北斗次第并指尾法　香隆寺　古本
一 光明供次第　二帖　内一本一音坊

（中略）

作法

一 内護摩　助闍梨

一 同次第　二帖　尊遍
一 駄都　古本
一 双身毘沙門浴油　覚澄闍梨

（中略）

西院流一

一 八結　外二結　尊済
一 印可次第　尊遍
一 同　前行折紙
一 広西八口伝
一 広西伝受目録

西院流二

一 金玉八結　尊遍
一 異水六結　同

西院流三

一 四度次第　恵眼
一 同　尊遍
一 一二口訣　十七帖　尊済
一 伝法灌頂記　二巻　雪下

（中略）

伝法院流一

一 小巻七結　六十七巻　尊遍
一 伝流抄　十巻　同
一 伝流要尊法　一巻　同
一 同　尊法抄　三巻　同

伝法院流二

一 伝流灌頂式　三巻　尊遍
一 四度次第　同
一 神供次第　尊済
一 四度次第　忍辱山流書入アリ　尊遍

（中略）

常喜院流

一 心鈔七結　済遍
一 心密鈔十六結　尊賢

（表紙）「密蔵院経蔵聖教目録　全　世尊院蔵」

保寿院流　石山流　灌頂　儀軌
口訣　結縁　尊法　作法
西院流　伝法院流　常喜院流　勧修寺流
地蔵院流　中院流　安祥寺流　醍醐流
秘抄　秘抄問答　別尊雑記　尊秘
愛聖　御修法　法会　図絵
悉雲　東寺要記　仁記

保寿院流一

一　四度次第　四帖　尊遍権僧正
一　神供次第　一帖　同
一　四度次第　四帖　尊淳僧都
一　護摩次第　一帖　頼恵僧正本写　寛永中
一　同初行次第　一帖　有書入　古本
一　結願破壇作法　一紙
一　護摩支分神供幣等之形　一帙
一　伽藍入堂次第　一帙
一　四度加行折紙并表白　一帙
一　行中禁制用心之事　一紙
一　加行中用心之事　一紙　北御
一　金胎略次第　各一帖　尊遍
一　十八道次第　一帖　有書入　至徳元年　古本
一　護摩私鈔　右十八道次第之裏書之
一　十八道次第　真乗院学教次第也　尊賢権僧正
一　十八道私註　御流　尊遍
一　同念誦次第口訣　同
一　金剛界印　心阿闍梨説　北御記　宥応権僧正
一　息災護摩次第　大師　保延元年　古本
一　護摩私註　広沢
一　俊玄法師十八道記　隆尋法師
一　受法補忘抄　尊遍
一　四度次第印図　五巻
一　受法指南抄

保寿院流二

一　八結八帙　尊勝院僧正実瑜　号自抄　尊遍
一　沢見六巻　覚成僧正　同
一　沢抄十巻　同上　同
一　尊法目録　保　一帖　隆尋
一　保寿院伝受目録　仁一音坊顕證閣梨　孝然
一　同伝受記　仁　斉寅　尊遍　尊済　各一帖

保寿院流三

一　沢見新抄　六帙五十八巻　北御　尊遍
一　甲乙沢見抄　二帖　禅覚僧都　同
一　深秘抄　号一三五　北御　尊賢

保寿院流四

一　計注　五帖　禅覚僧都　尊観僧都
一　蒙散　四帖　御流　尊賢
一　同　一帖　保流　同
一　保寿院流　一帖　仁隆法印　同
一　事相料簡　自證房覚印閣梨　同
一　法流大底　高雄法身院禅海僧正　同
一　真言集　三帖　心覚閣梨　同
一　公私修法用意暦　一帖　自證房
北院文泉房律師朗澄閣梨
一　師宅等　一帖　建久五年於円楽寺　古本
以保寿院法務御房御本自書了云々
一　同　一帖　尊観
一　石山寺所伝血脉　尊賢

石山流一

一　諸尊口伝集　九帖　根本十巻一巻闕　尊賢
半切本也
一　同甲乙　二巻　古本
一　秘密抄　淳口内一巻闕　正安元年　永尊僧都
一　石文抄　二帖　尊賢
一　四度次第

石山流二

一　八巻抄　尊賢
一　十巻抄　同
一　十七巻抄　同
已上石山三部抄

石山流三

一　大灌頂次第　三帖　尊観
一　粟田口灌頂次第　複三帖　同
一　阿梨耶振多摩尼抄　一帖　尊賢
一　金剛界伝法灌頂作法　一巻　同
（中略）

石山流四

一　金剛隋心大法身呪　内供　古本
一　金剛界念誦次第　同上　尊賢
一　胎蔵界七集　三帖　同上　同
一　脇机作法　同上　同
（中略）

灌頂一

一　伝法灌頂三巻式　尊遍
一　同初後夜法則　同
一　同一帖　仁摩尼珠院忠俊
一　調支具次第　正応三年　定敞
（中略）

灌頂二

一　伝法灌頂教授口伝　隆賢
嘉暦元年於仁和寺花厳院
給僧正御房御自筆本書写了
一　閼伽水汲作法　古本
一　灌頂名義　小野流歟　不知作者　同
一　同道具指図
（中略）

儀軌甲

一　十八道儀軌　尊遍

石器剝離面検討計測システム

埋蔵文化財センター

剝離面計測のシステムを完成したので報告する。システム開発は平成2年度から始まった三年計画の文部省科学研究費補助金一般研究B研究課題「石器製作経過復原と製作追試実験研究」に伴う基礎作業である。

剝離面の検討が石器づくりの経過復原に欠かせない手続きであることは，改めて述べるまでもない。とくに立体的な剝離面構成－複合した打撃点，割れ面の広がりデータの取り込みは長年の懸案事項であったが，正確（精密）なデータを容易に扱えるようになった。

計測には三次元空間座標測定装置（ベクトロン VSC-07型　小坂研究所製）を導入し，測定した。本装置は測定環境が整備されていて，信頼できる測定が可能である。とりわけ測定時の電子案内機能が，基本軸とは別に自由設定できる利点がある。この機能によって，死角となっていた主軸に平行的な剝離面に対しても安定したデータを取り込める。三軸回転を行う基本面広がりデータとして有効であり，後の回転照合処理を最小限に抑えることができる。

ここに，単純な面構成をとる資料サンプルを取り上げて説明する。資料は握り拳大の円礫を素材に一方の端部を加工した「礫器」(67×51×90mm) で，剝離面数は4面ある（松沢1991)。

測定原点を原則として資料本体のほぼ中央に置いた。もし測定データを図に展開するとすれば，石器作図正面形をXZ平面（表裏）に，YZ面が左右側面形に，XY面が上下側面と横断面形に当てられる。同じデータのXYZ値の組み合わせと向きの設定で6面の作図が自在である。

4面間の面界稜，エッジの測定値，また全体の形状をとらえる平行したXY面すなわちZ軸を2mm間隔で切る断面座標値を準備した（A)。基本的にはこのデータで面検討が可能である。なお各断面のX･Y軸方向の最大小を求めたデータの集まりをつくれば，XZ面の平面輪郭図，YZ面の側面輪郭図を描ける。ただし単純な面構成ならともかく，複雑になればなるほど個々の剝離面の広がりデータが必要となる。剝離4面それぞれを独立して扱い，打点付近に電子案内原点を設け，剝離の流れ方向に主軸をとった測定面を設定し，得た面広がりデータ(B)を基本とする。それを三軸回転させた計算値から，コンター値を得て，同心円状に展開することを確認する(C)。三軸回転値が正しい割れ面を得る作業に対する素材の設置状況を示していることにな

ベクトロン＋パソコン

〔測定〕1)剝離面界線　2)断面　3)剝離面広がり　4)面交角・距離計算　5)不在部分復原

パソコン

〔修正〕1）データ整理（訂正，切り張り，重複削除）

〔加工〕1）マトリックスデータ作成　2）三軸回転　3）コンター計算

プロッター＋パソコン

〔作図〕1）測定データ作図　2）加工データ作図　3）コンター作図

る。また加工過程での剝片不在部分の復原座標 XY 値は同装置の機能(KEEP.LINK)を使い Z 値を測定して同じ精度の測定値として取り込める。

測定検討作業の流れは三者の間を行き来している。それぞれの作業に関わるプログラムの準備が必要であり，また作業効率を高めるためにもプログラムの整備が要求される。

以上のように，測定データおよびその処理値は次の 5 種類である。(　) 内の数値は本資料での測定および計算数値である。総数約 4 万点である。測定には忍耐を要する。

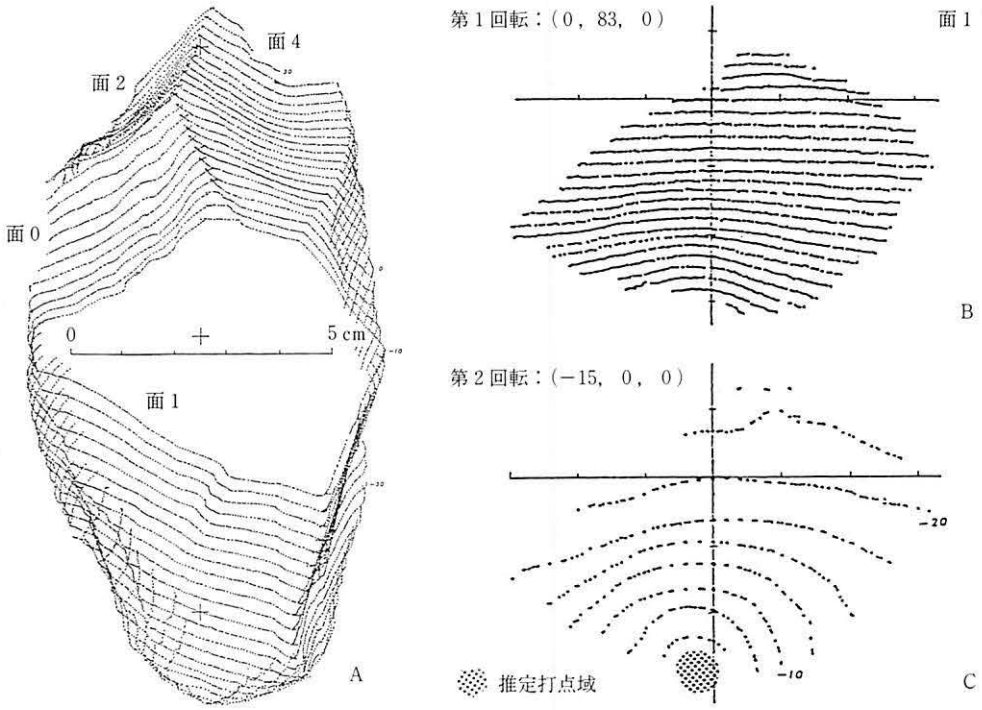
1）面輪郭座標値(3880点)　2）面広がり測定値(13950点)　3）断面形座標値(19110点)

4）面交角・打点間距離に関する座標値および計算値(90ヶ所，670点)

5）不在部分復原測定値(1500点)　(総計39110点)

付図はその成果を作図したものである。大量データを同時的に処理する要求は今のところない。使用機種は小型のパソコン範囲（NEC PC-9801LV21）であるが，十分にその役割を果たしてくれている。追試実験はただ似た石器ができればよいわけではない。こうした剝離面構成の検討の上にたった実験こそ，意義ある追試になるだろう。本測定は現物に直接接する接触方式であるが，今後の方向として非接触方式の測定に大きな魅力を感じている。

〈参考文献〉松沢亜生　1991「在外研修報告」(『年報1990』)　(松沢亜生)



A：XY 断面図　−10mm を境に，上半に表面側，下半に裏面側データを組み合わせて作図。
B：面 1 測定データ取り込み位置図　第 1 回転：本体を逆時計回りに83度（Y 軸）。
C：面 1 打点位置復原推定図　第 2 回転：手前に10度（X 軸）傾けて求めた割れ斜面等高線（− 6 ～−24mm）。

年 輪 年 代 学 (10)

埋 蔵 文 化 セ ン タ ー

適用可能な樹種の検討

年輪年代法が適用できる樹種か，そうでない樹種かの検討は，伐採年代の判明している試料が複数個，入手できた時点でおこなってきた。これまでに，針葉樹11種類，広葉樹２種類が適用可能であると確認された。その内訳は，針葉樹がヒノキ，サワラ，アスナロ，ヒノキアスナロ（通称ヒバ），ツガ，スギ，カラマツ，エゾマツ，トドマツ，コウヤマキである。広葉樹は，ミズナラとブナである。一方，この研究に適していない樹種は，針葉樹のモミと広葉樹のケヤキである。これらの年輪は，同年に形成されたものでも前年に形成されたものに比べて，異方向において広かったり，狭かったりする点にある。つまり，同一円盤標本内における年輪パターンの間の相関が悪いことを示している。

樹種別の暦年標準パターンの作成状況

年輪年代法の基本は，樹種別，地域別に長期の暦年標準パターンを作成することが望ましい。ヒノキの暦年標準パターンは，1989年度においてその先端が前206年に到達していた。その後，滋賀県下の遺跡出土木材の年輪データによって前206年からさらに前734年まで，古く遡ることができた。

スギの場合は，前420年まで延びていたものを滋賀県下の遺跡出土木材の年輪データによって，さらに前651年まで延ばすことができた。ヒノキ，スギともに，その先端部は縄文時代の晩期に到達した。

コウヤマキについては，すでに186～741年までのものが作成済みであったが，その後，大阪府下の遺跡出土木材によって，その先端を22年まで遡らせることができた。この他に弥生の木棺材の年輪データで作成した745年分の暦年未確定の標準パターンを作成しているが，この年輪パターンに暦年を確定するような出土試料は依然として見つかっていない。

東北地方におけるヒバの暦年標準パターンの作成

東北地方においては，スギとヒバが主要樹種である。これらの樹種の年輪パターンのあいだには，高い相関のあることが判明してる。スギの暦年標準パターンは，秋田，山形両県下の遺跡出土木材，古建築部材，埋没スギなどを試料として，1165年分（121年～1285年）が作成済みである。一方，青森県川内町にある高野川（２）遺跡からは，ヒバ材を使った井戸が出土した。この井戸は多数の板材で構築されていた。このなかから11点を選定し，年輪データを収集した。11点の年輪パターンを個別に照合し，369層からなる平均値パターンを作成した。パターンは，さきのスギの暦年標準パターンと照合したところ，937年～1305年のものと判明した。今後，この暦年標準パターンはスギと同様，東北地方の木質古文化財の年代測定に威力を発揮するであろう。

（光谷拓実）

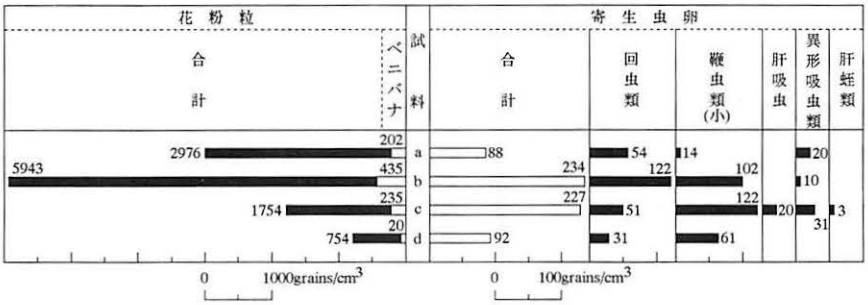
動物遺存体の調査（9）

埋蔵文化財センター

本年度に行った動物遺存体関係の研究成果を報告する。1）群馬県月夜野町教委より提供を受けた矢瀬遺跡（縄文晩期）の土壌の水洗選別。住居址・水場を中心とした地点から土壌を採取し，フローテーション技法を考案しながら分析中である。土中からは多くの焼骨・植物種子が採集され，今後の同定が待たれる。2）島根県出雲市教委による奈良時代から鎌倉時代にかけての上長浜貝塚の発掘・整理に参加し，研究中である。『出雲国風土記』・木簡など文献史料との対比から，古代より中世にかけての漁村の経済史・生活史の解明に大きな成果が期待できる。3）便所遺構の研究；今年度も各地で便所遺構の発掘が相次ぎ，2月23日には平城宮資料館で研究集会「便所をめぐる考古学」を開催した。当日は250名を越える満員の参加者で朝から夕刻まで討議が盛り上がり，社会的にも大きな注目を受けた。発表成果は現在編集中である。『年報1992』で紹介した，平城京東二坊坊間路西側溝 SD4699 の水洗便所発見のきっかけとなった堆積土の試料が，金原正明氏の手元に若干残っており，その寄生虫卵分析の結果を新たに得ることが出来たので収録する。本試料は金原氏が1989年に平城調査部より花粉分析の依頼を受けた際に，将来の新たな分析が可能になった時のために採取し保管していたものである。（松井　章）

平城京東二坊坊間路西側溝 SD4699 の下層（10cm おきに 4 層準 a～d）から，寄生虫卵が比較的多く検出された（下図参照）。分析結果は図示したが，寄生虫卵は回虫類（*Ascaris*）・鞭虫小型（*Trichuris* small type）を主に最大値で 1 cm^3あたり234を示す。他に肝吸虫（*Clonorchis sinensis*）・異形吸虫（*Metagonimus-Heterophyes*）・肝蛭類（*Fasciola-Pramthistomum*）の卵と消化残渣も検出された。東西大溝南 SD5100や朱雀大路東側溝 SD02・東一坊大路西側溝 SD36（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1993　奈良市教委）では，寄生虫卵はまれに検出されるものの，多い試料で 1 cm^3あたりに算定して50内外の値を示す。SD4699下層の値はやや大きく，糞便の成分がかなり多く含まれていると言える。他の溝との値の異なりは，糞便の汚染地または投棄地からの距離や溝による用途の区別などが考えられる。他にベニバナ花粉の出現傾向との関係も図に示したがほぼ相関を示す。ただし，寄生虫卵数と全花粉数も相関を示すため，水流による微細遺体の淘汰が反映されている可能性が高い。

（金原正明・金原正子）



飛鳥地域出土石材の保存科学的研究（2）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥および藤原宮跡近辺の遺跡から出土する石材の多くは，領家花崗岩類としての花崗岩および閃緑岩（竜門山系周辺産）と火山砕屑岩としての流紋岩質凝灰角礫岩および溶結凝灰岩などである（二上層群および室生層群産）。これらの諸岩石に関しては，岩石学的かつ保存科学的見地から調査を継続している。

一方，当地域では従来から少数ながら凝灰質砂岩も出土しているが，詳細については未調査の状態であった。最近この岩石が酒船石西遺跡から多量に出土しており，それらは出土後の劣化が著しく，早急な保存科学的研究の必要性が生じてきた。この凝灰質砂岩は，岩石学的特徴や貝化石など含むこと，また地理的条件などから藤原層群豊田墨層（前期中新世～中期中新世）産のものに推定できる。この砂岩は，淘汰されており固結の程度は大きくないことから，容易にかつ短時間で多量の石材として整形加工することが可能であったと考えられる。

出土した岩石の特徴として，短時間で多量の水分を吸収し（平均最大含水率は15～20％），乾燥時には多数のひび割れが発生する。また，吸水した岩石は，強度の低下が著しく表層部分から崩壊するなどの劣化現象を示す。

薄片による検境の結果，石英，長石類，雲母類と火山ガラスおよびパミスなどで構成し，わずかに炭質物などが含まれる。これらの鉱物粒子を充填する膠着物質は部分的に粘土鉱物化している。また，雲母の一部がイライトに変質していることもＸ線的に確認できた。

以上の観察結果から，吸水状態にあるこれらの岩石を急激に乾燥すると，粘土を急激に自然乾燥したのと同様な現象が生じることを示した。しかし，岩石全体が崩壊しないのは，基質部分の膠着物質がある程度の強度を保持していることと，適量な鉱物粒子が骨剤を形成しているからである。以上のことから，出土直後の岩石は，急激な乾燥を防止して徐々に乾燥を行うことによりひび割れの発生を最小限に防止できる。

保存処理で重要な点は，これらの岩石は内部まで風化しているため，岩石全体を均一に強化処理する必要がある。岩石内部に強度勾配を生じさせると新たなひび割れが発生する。また，過剰に水分を含む岩石に，WSS-OH[$Si(OCH_2CH_3)_4$]（ワッカー社）を含浸すると，岩石内部に充分処理液が含浸しないばかりか，加水分解が急激に起こり，岩石にひび割れを発生させる一因にもなり，アルコール脱水や徐々に自然乾燥するなどの事前処理が必要となる。

また，ひび割れが多く破片を取り外して接着できない岩石の場合は，強化含浸と同時に接着効果も重要となる。WSS-OH は強化できても，接着効果は期待できず，今回は，接着効果の大きな WSS-MES100[$CH_3Si(O)_{1.1}(OCH_3)_{0.8}$]について実験したところ，強化および接着には大きな効果があった。しかし，処理後は，光沢は生じないものの，やや暗い色調に変じることなどがあり，現在改良中で砂岩に対しては実用の域に達している。（肥塚隆保）

飛鳥～奈良時代のガラス遺物の材質

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

昨年度，飛鳥池遺跡で発見されたガラス工房関連遺物について調査したのを機会に，今年度は，飛鳥～奈良時代のガラス遺物の材質について調査した。調査資料は，藤原京，平城京および近辺の遺跡から出土した約100点の遺物で，これについて分析をおこなった。

その結果，当時代におけるガラス材質は，アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスに大別できる。アルカリ珪酸塩ガラスは，すべてナトリウムを融剤とするソーダガラス系で，カリを融剤とするカリガラス系は古墳時代中期以前の遺構からのみ検出する。ソーダガラスには，酸化アルミニウムを10％前後含有する高アルミナソーダ石灰ガラス［Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2］と酸化アルミニウムを数％しか含有しないソーダ石灰ガラス［Na_2O-CaO-SiO_2］の２種類が存在する。そしてこれらには数％の酸化鉛［PbO］を含有するものと，わずかしか含有しないものがある。

高アルミナソーダ石灰ガラスの出土例としては，牽牛子塚古墳出土の粟玉があり，このうち，黄緑色半透明および黄色半透明を呈するものは，PbO を数％含有し，茶色～赤茶不透明なものは１％以下である。水落遺跡出土の淡青色ガラス小玉，平城京内から出土した淡青色透明ガラス小玉などは，いずれも高アルミナアルカリ石灰ガラスで鉛含有量は少ない。酸化アルミニウム含有量が少ないアルカリ石灰ガラスの出土例は，高松塚古墳出土の青紺色半透明ガラス玉，薬師寺出土の淡青紺色不透明ガラス片，山崎遺跡（愛知県）出土の淡青緑色透明ガラス未製品などで，いずれも鉛含有量はわずかである。ガラス鋳型に残存するガラスを分析した例としては，飛鳥池遺跡と上之宮遺跡のものがあり，いずれも高アルミナアルカリ石灰ガラスである。

鉛珪酸塩ガラスは，PbO-SiO2 系の一種類のみであり，大半のものは PbO を60～70％含有する高鉛含有の鉛ガラスであるが，なかには PbO の含有量がこれらより少ない鉛ガラスも存在するようである。６世紀には朝鮮半島では，鉛ガラスの製造が開始されていた可能性があり，日本に製品もしくは一次製品を輸出していたことが考えられる。これを示す証拠として大阪府塚廻古墳（７世紀後半）出土の管玉は，朝鮮半島産の鉛鉱石が使用されていることが鉛同位体比測定で明かにされている（1991，山崎）。７世紀後半の鉛ガラス製遺物としては，阿武山古墳出土の緑色透明ガラス玉，安倍寺出土の緑色板～塊状ガラス（PbO は約50％），川原寺出土の塼（鉛釉，日本産鉛鉱石を使用）などである。７世紀末には，飛鳥池遺跡で大量の鉛ガラスが製造され，これらは，鉛同位体比測定の結果，日本産鉛鉱石を使用したことが明かとなった。ガラス坩堝は藤原京内，平城京内，滋賀県中畑 T1 遺跡（８世紀後半）から出土しており，すべて鉛ガラスを検出している。薬師寺から多量のガラス片や玉類が発見されている。このうちコバルトブルーのガラスを除く，黄色透明，赤色透明，緑色透明，褐色半透明のガラスはすべて鉛ガラス（PbO は60～70％前後）で国産品である。この他，平城宮，坂田寺からも鉛ガラスを検出しており，当時の官殿や寺院に多量のガラスが使用されたことを示すものである。（肥塚隆保）

日韓における考古遺物の材質・技法に関する分析の比較研究

埋蔵文化財センター

わが国出土の考古遺物の源流は，その大勢を韓国に求めることができる。それらは，大陸から舶載されたり，あるいは製作技術のみが伝播したものである。なかには，材料そのものが日本に伝えられ，日本で製作された遺物もあるといわれている。本研究では，こうした考古遺物の材質分析やその製作技術に関する研究成果を見直して，改めて両者間の考古遺物の比較検討を試みた。この種の分析に際しては，大半の遺物が，すでに劣化しているために正確な分析値が得られないという欠点があった。しかしながら，わが国と韓国の気候・風土はきわめてよく似ており，遺物の埋蔵環境も類似し，遺物の劣化状況には共通するところが多い。そのため，材質分析に際しても，この劣化の程度を正確に把握することによって，材質分析の精度を高めることができる。あるいは，分析結果を相対的に比較検討することも可能である。本研究は，考古学研究のみならず，遺物の科学的保存処理のための情報をも提供することを目的とした。

青銅器に関しては，銅成分に対する錫・鉛の含有量比に着目して測定し，さらに微量成分の銀・砒素・亜鉛・鉄などの含有量を検討したが，顕著な差異はみとめられなかった。なお，今回の数多くの資料収集のなかで，韓国における金製遺物の出土量がわが国の比ではないことをあらためて認識させられた。

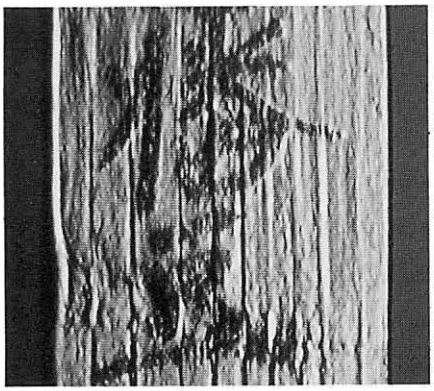
そのほか，大型の木製遺物，とりわけ，海底出土の船体保存や石像文化財の保存技術に関する問題が詳細かつ具体的に議論された。また，古代の顔料の分析などに関する研究を行った。なかでも，漆製品の分析研究では，両国における出土漆製品の断面の薄片を作成し，顕微鏡的な観察をもとに製作技術や使用材料に関する比較を試みた。漆に混ぜられた顔料，漆を塗り重ねたときの塗り回数，下地の挟雑物の材質などに関しては，両国間に共通する部分が非常に多いことがわかった。その技法的な類似性については，韓国と時代的なズレがみとめられ，大陸からのこの種の技術の伝播経路を研究する上で有益な資料を得ることができた。木胎に漆を薄く塗る技法があるが，それは中国では戦国時代にみられるものである。一方，日本では弥生時代にみられる。また，漆の下地に動物の骨を焼いて粉砕したものを混ぜている例が数多くみられる。中国では漢代の製品に，韓国では7世紀の製品に確認されている。日本では，奈良時代の製品に骨粉が確認されている。資料数に乏しく，定かではないが，一時代遅れてその同等製品が日本に出現しているように思える。

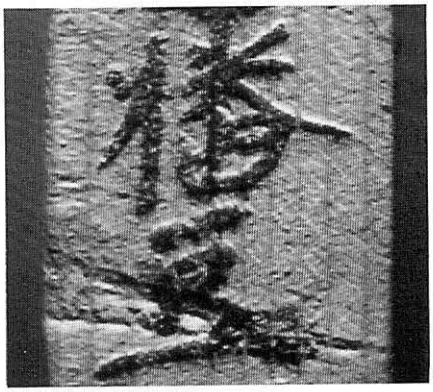
金属製遺物に関しては，分析調査の資料数を増やしたうえで，器種ごとに，そして時代別に比較していく必要が生じた。出土木材の分野では，両国でPEG含浸法が盛んに実施されており，今後の継続的な経年変化の比較観察が必要である。すでに，木材内部におけるPEGの凝固時の形態変化などの基礎的な調査にもとずく観察を確認しあっている。今後、各種材質に関する分析と保存について，より厳密な比較研究をおこないたいと考えている。

赤外線カメラを利用した木簡文字画像鮮明化システムの開発

現在日本全国で出土している木簡は，総数17万点に迫ろうとしているが，この中で実に約13万点以上が奈良国立文化財研究所の調査によって発掘された。しかも近年調査された長屋王邸跡と二条大路跡の２遺跡だけで，木簡出土数は10万点を越えている。これだけ大量の木簡を整理する中で，木簡表面の文字の判読作業の改善が重要課題であった。このためには木簡の文字をできるだけ鮮明に読みとり，読みとった情報をファイルしていくシステムの開発が必要であった。このたび導入した「木簡文字画像鮮明化システム」は，これまで赤外線カメラで見てもよくわからなかった文字画像をさらに鮮明化するためのシステムであり，少しでも多くの情報を迅速に木簡から引き出すことを目的としている。木簡の文字は墨で書かれているが，墨の主成分である炭素は赤外線を吸収しやすい性質を持つ。このため，肉眼では確認できない程度の墨の残りでも，赤外線領域の光を感知する撮像管を備えた赤外線カメラでとらえることができる。このたびのシステムでは，赤外線カメラに「スーパーアイ」と呼ばれる画像強調ビデオカメラを採用した。このカメラは画像の濃淡識別能力を従来より高めた撮像管とアナログ画像処理を組み合わせたものである。この装置では撮像管でとらえたアナログ信号を直接画像強調機能に取り込めるので，ディジタル化のための情報欠落もなく，細かい部分でのコントラスト強調が可能となる。さらに，このカメラはモニターの走査線方向に指向性を持つので，木簡判読の障害になる木目をこれに合わせると，モニター上で木目を消して観察することも可能となる。また，操作が簡単なのも大きな魅力である。スーパーアイから取り込んだアナログ信号は最適条件に加工したのち，画像静止ファイルとしてプリントアウトすることも，２インチのビデオフロッピーにも保存できる。将来的な拡張性を考えて，最終的に光磁気ディスクにファイルを蓄積できるようにもなっている。このシステムの導入により，作業のいっそうの能率化がはかられるようになった。

（沢田正昭・村上　隆）





判読しにくい木簡（左）が，木目が消えて（右）読みやすくなった。

平城宮第一次大極殿の建物復原

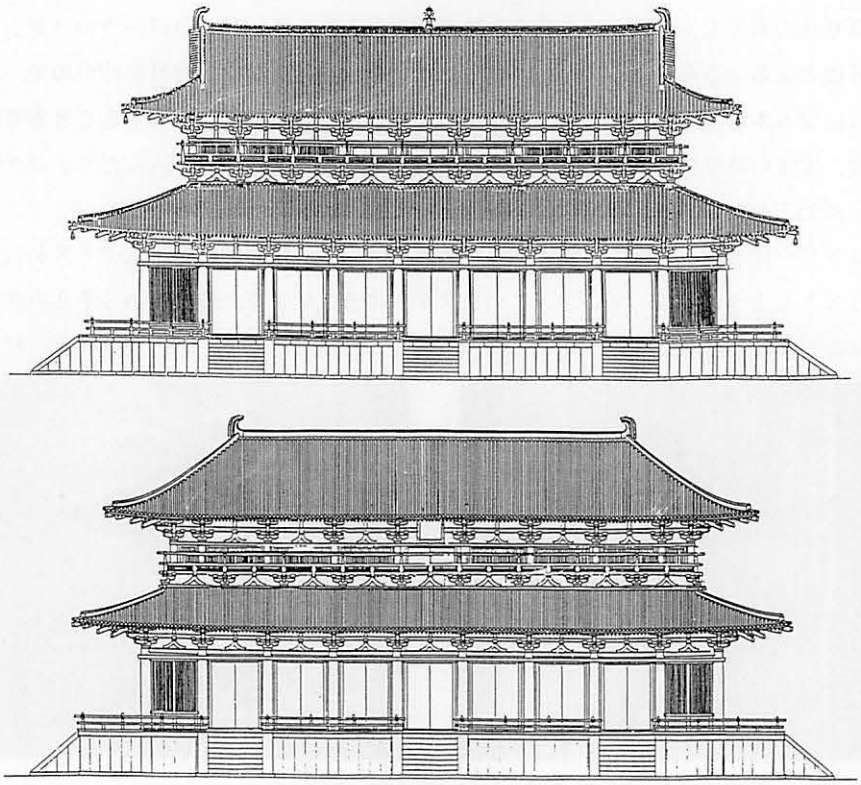
平城宮第一次大極殿地区復原整備のための基礎調査の事業プログラムのうち，第一次大極殿の建物復原について，本年度は設計のための基礎的な資料を収集するとともに，設計の基本的方針を決定して行くため，諸種の検討を行った。このために伊藤延男・岡田英男・濱島正士の諸氏を委員に迎えて復原設計部会を開催し，所内での検討を踏まえて議論を行った。復原設計部会は6回開催し，他に3回の小部会を開いた。その検討内容は以下の通りである。

部　会

第1回　5月25日　遺構特に大極殿平面の再検討，　第2回　6月22日　大極殿の機能の史料的検討，　第3回　7月27日　基壇構造および大内裏図考証の検討，　第4回　9月24日　基壇の矩計り及び平面・立面の検討，　第5回　11月12日　大極殿案の比較検討，『古事類苑』所収史料と中国・朝鮮の事例紹介，　第6回　1月6日　復原の具体的問題（意匠・構造）

小 部 会

第1回　10月15日　大極殿構造の検討，　第2回　12月18日　大極殿・廻廊・閤門・東西楼閣全体の検討，　第3回　2月4日　廻廊・閤門・東西楼閣の検討　（山岸常人）



大極殿復原の二案

平城宮第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査

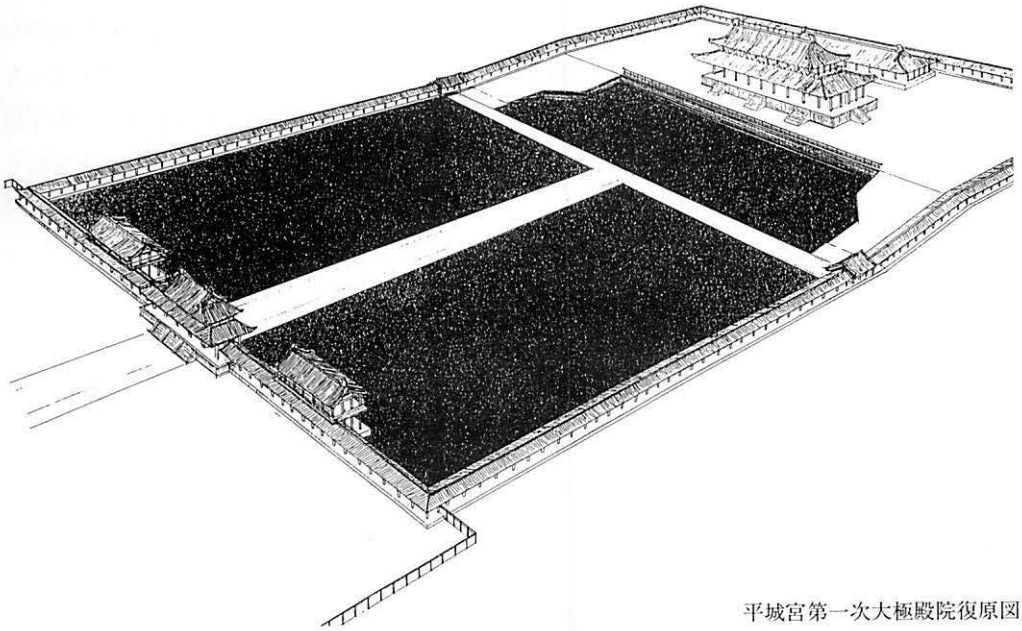
1978年に文化庁が策定した『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想』では，平城宮第一次大極殿院地区は，建物を復原することにより平城宮の規模，構成等を表示するとともに，遺跡博物館の中核施設とすることが決まっていた。その実施は，「基礎的準備段階」完了後の概ね10年間を目途とする「第１期整備計画」に位置づけられていた。つまり，1989年頃までには第一次大極殿院地区の復原を完了する予定であった。しかし，それは第一次大極殿院地区と同様に「第１期整備計画」に入っていた朱雀門，東院庭園の復原とともに，主として予算上の制約から実現に至らなかった。

1989（平成元）年は「第１期整備計画」が完了に近づき，本来ならば「第２期整備計画」を検討すべき時期であったが，上記のような現状であり，「第１期整備計画」の残された課題である第一次大極殿院地区の復原にむけて基礎調査を始めることとした。基礎調査は，まずはじめに計画地現況の把握，その問題点の分析をおこなった上で，復原建物の設計，および復原する建物の活用方法を検討することとした。1992年度はその４年目である。

本年度は，①コンピュータ・グラフィックス（C・G）で作成した建物復原図を現況写真と合成し，復原する建物の景観予測，②復原建物の設計をつめる作業，③平城宮の整備現況把握・分析のまとめ，④復原する建物の活用方法の検討，をおこなった。

また，本年度には文化庁の方でも『大極殿復原構想検討会議』を設置し，第一次大極殿の復原について検討し，その審議の結果を文化庁長官に報告した。

（高瀬要一）



平城宮第一次大極殿院復原図

平城宮第二次大極殿屋根の一部復原

建造物研究室

第二次大極殿院地区の発掘調査報告書（学報第51冊）が刊行されるにあたり，同地区から出土した瓦を使い屋根の一部を原寸で復原することとなった。軒瓦とともに，隅木の鼻を覆い木口を風雨から護るための瓦製の隅木蓋も発見されているところから，隅部分を製作するこにした。完成後の展示場所として平城宮跡資料館の一隅をあてたため，スペースの関係でさほどの大きさはとれず，一辺２ｍまでと限定し設計を進めた。

発掘遺構から知り得た建物の規模は，桁行129尺・梁間54尺を身舎各15尺・庇12尺とする９間４間に分かち，基壇の出は各面13尺とみられた。これらのことから同報告書では，屋根を二重の寄棟造、軒の出は上下とも15尺と復原している。一方遺物からは，瓦割りを約30cmのピッチとする本瓦葺であること，隅木蓋の内法幅から隅木先端幅は約１尺あったことなどが知られる。

これらの基本事項をもととして，飛檐垂木は４寸５分×４寸の断面で瓦割りと同じく１尺に割り付け，茅負は奈良時代通有の直接瓦繰りを施す形に定めた。また隅である以上当然軒先は，反り上りをもっていたであろうから，ここでは配付垂木４本分で約４寸の反りをとっている。参考のため木部の設計図をあげておく。

木部の製作はさほどの困難さはなっかたが，いざ瓦を葺き始めてみていくつかの問題に直面することとなった。その内の最大事は鬼瓦をどの位置に据えるかということである。鬼瓦そのものが高さ58cm，幅55cmと大きいこともあって軒丸瓦の１本目ということはあり得ず，一定の寸法奥にひかえることになるが，どこが一番それに適しているかがなかなかむつかしい。

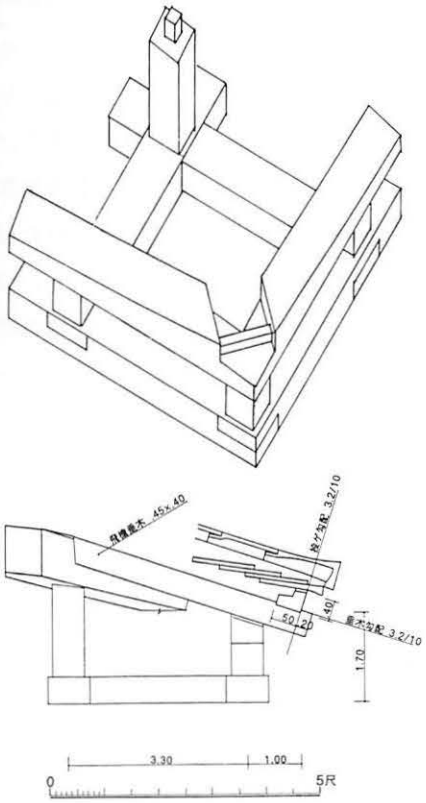
結局３本目の丸瓦の前ということに落ち着いたが，それでも隅行丸瓦と平行丸瓦の接点の水処理の問題が残る。ここでは隅行を優先させて，平行はそれに仕合わせるという方法をとって多少ともそのわざわいを緩和させるよう努めたが，なお一抹の不安はぬぐいきれない。熨斗積みの最下段の見付面を大きくとるいわゆる肌熨斗方法があり得るのかどうか，拾熨斗を３根もちいたがこれで良いのか，超大型軒丸瓦を鬼瓦上に使ってみたがどうであろうかなど，今後奈良時代の屋根葺技術とともにその葺上げの形態についても検討すべき点が多いことを，このささやかな復原を通じて，今さらながら知らされた思いがする。

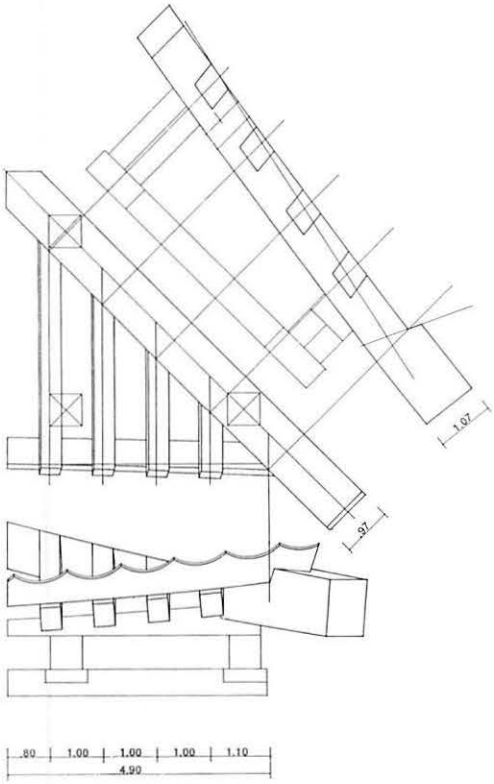
なお，隅木および垂木の木口にはそれぞれ金渡金を施した透紋の飾金具を藤原京大官大寺出土のものを参考にしてデザインし取り付けた。

使用した瓦の形式は次のものである。軒平瓦6663C，軒丸瓦6225A，鬼瓦上丸瓦6225L，鬼瓦ⅣA。

（細見啓三）

平城宮第二次大極殿復原屋根瓦葺立て中↗
平城宮第二次大極殿屋根軒まわり設計図→


45x40
3.2/10
50
20
40
3.2/10
1.70
3.30
1.00
0
5R


1.07
.97
.80
1.00
1.00
1.00
1.10
4.90

滋賀県近代和風建築総合調査

建造物研究室

調査の概要　滋賀県近代和風建築総合調査は文化庁の補助事業として平成４・５年の２カ年にわたり行うものである。近代和風建築に関する全国的な調査としては滋賀県と富山県が最初となる。調査はまず平成４年度に各市町村の調査員によって一次調査を行い，約1600件をリストアップし，簡単な調査票の記入と写真撮影を行った。一次調査の成果は「滋賀県近代和風建築総合調査所在リスト」として刊行した。この調査成果をもとに当研究所において重要とみなされる物件約150件を抽出し，二次調査を行っている。二次調査では調査票の記入・配置図作成・平面実測・写真撮影を行い，適宜断面実測・展開実測を行っている。平成４年度に２度の調査を行い，同５年度にさらに４度の調査および補足調査を予定している。

調査対象は，明治～昭和戦前に建てられた和風木造建築，すなわちこれまでに行った民家調査・近世社寺調査・近代洋風建築調査・近代化遺産調査など全国的な調査において対象とならなかったものすべてである。したがって対象となり得る物件は多岐にわたり，遺存数も多く，調査対象物件をどのように評価して絞り込むかが調査当初の大きな課題であった。この点は一次調査において顕著な問題点となり，地元の調査員の判断により一次調査段階ですでに調査物件の絞り込みが行われたため，市町村によって調査対象の偏りがみられた。

二次調査物件の抽出は主として以下の点から行った。近代以前ではみられない平面形式・構造・意匠をもつ建築，近代になって現れた用途もしくは現在失われつつある用途の建築，材質・仕事とも上質な建築，顕著な特徴を有する建築，歴史的価値がある建築，従来の調査ではあまり調査が行われなかった種類の建築である。なお，社寺については近世以来の伝統を引き継ぐ形式のものは調査対象から除外し，近代において研究者や修理技師によって設計された復古的な建築に限って調査した。その結果，調査対象の大半が住宅となり，他に料亭・旅館，公共建築，宗教建築等を調査した。今年度の二次調査は主として県下東南部の草津市，近江八幡市，野洲郡，蒲生郡，神崎郡近辺で行った。

五個荘町歴史民俗資料館外観

吉川治家平面図（１：400）

二次調査の成果　以下では今年度調査した物件を紹介する。住宅の基本的な形式は，間取りを通り土間をもつ四間取りもしくは六間取りとし，外観を入母屋または切妻の大きな屋根をかける単純な形式とする，近世民家の延長線上に位置づけられるものが大半である。一次調査の物件についても同様で，県下の住宅建築では近世から近代にかけてあまり大きな変化は見られない。ただし，座敷部分や二階座敷の充実は近代の特色として位置づけられよう。このように主屋は近世以来の簡素な形式としながら，経済力のある階層では離れ座敷に贅を尽くす例も見られる。五個荘町の五個荘歴史民俗資料館（旧藤井邸）では，主屋（明治初期）は近世以来の簡素で飾り気のない形式であるが，昭和９年に建築された客殿（離れ座敷）は本格的な書院風建築とし，風呂や便所では数寄屋風の意匠を凝らし，さらにはスイスの山荘風の洋館を備えている。また，五個荘町の吉田家でも主屋（明治20年）は伝統的な形式としながら，離れ座敷（明治34年），蔵座敷（明治34年）は格式高くしかも凝った建物としている。このようななかで中主町の吉川家は昭和12年に建築されたもので，従来の伝統的な平面形式とは異なり中廊下型の平面形式とし，建物の質・意匠とも高い点で評価できる。ただし，この建物は大阪の設計事務所によって設計されたもので，この地方では特異な先進例である。

料亭・旅館については今までに纏まった調査がなく，今回調査したものの位置づけは今後の課題であるが，近江八幡市の兵四楼は明治中期の三階建建築として貴重な例であり，草津市の開盛楼（明治初期）は，小規模な部屋割りが残り旧遊廓の風情を伝える建築として評価できる。

公共建築は凝洋風建築が多いなかで，近江八幡ユースホステルは和風の大規模公共建築である。この建物は勧業館として明治42年に近江八幡市内で建築されたもので，和風公共建築の典型例である。ただし，外観の残りは良いものの内部が大改造されているのが惜しまれる。

宗教建築としては天理教の建築が注目され，今年度の調査では八日市市の湖東大教会を調査した。天理教の建築は大規模で良質の建築が多く，伽藍の構成，神殿の形式，客殿のつくりなど個々の建物も興味深いが，大教会では大教会に関わる人達の住宅等によってひとつの町を形成しており，大教会内の敷地の構成についても注目される。

なお，平成５年度の調査終了後，同年度内に報告書を刊行する予定である。　（島田敏男）

兵四楼八幡堀側外観

近江八幡ユースホステル外観

楊鴻勛先生の来日と頭塔復原

平城宮跡発掘調査部・建造物研究室

本研究所に事務局を置く古都調査保存協力会（代表・青山茂教授）の招聘により，中国社会科学院考古研究所の楊鴻勛先生と中国文物研究所の張之平先生が来日された。楊鴻勛先生は，新石器時代から唐代にかけての発掘建築遺構復原研究の第一人者であり，一方の張之平先生はこれから始まる応県木塔（遼代）の修理担当をつとめる気鋭の女性建築史家である。

日本での滞在は，1993年２月17日から27日までの短い期間であったが（張先生は都合によりさらに３日来日が遅れた），精力的に各地の古建築・庭園・発掘現場を見学された。とくに奈良と京都では，興福寺・春日大社・新薬師寺・相国寺の解体修理現場を視察されるとともに，本研究所で開催された研究会において，鈴木嘉吉・岡田英男・濱島正士・田中淡らの日本側研究者（敬称略）と，古建築の修理・復原に関する意見を活発に交換された。

今回の来日活動のなかで，私達に深い感銘と印象を残したのは，楊鴻勛先生が試みられた頭塔復原のスケッチである。楊先生は，頭塔の発掘・整備現場を視察されたあと，鈴木所長の冗談混じりの依頼に応え，またたく間に３種類の復原案（方案之一～三）を考えられ，実際にそれを図面化されたのである。この３案は，いずれも５層の屋根をもつ外観に復原するもので，方案之三は日本人の復原案とそう変わらないが，他の２案は最上層に覆鉢形の土饅頭を用いる特異なものである。方案之一はそれを露出させたストゥーパ風の外観，方案之二は覆鉢の上に屋根を架けた多宝塔風の外観にデザインされている。いずれも日本人には思いつきにくいアイデアであり，おおいに参考に値すると考え，ここに紹介させて頂いた。

（浅川滋男）

方案之一
立面・断面

方案之二
復原パース

方案之三
立　面

方案之二
立　面

平城宮跡・藤原宮跡の整備

庶務部・建造物研究室・平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1 平城宮跡の整備

1992年度に実施した宮跡整備は，宮内省西北殿復原，朱雀門周辺整備，第一次大極殿院地区整備，佐紀池石積護岸整備，案内板設置，高圧電気整備改修，保存科学実験室改修及び樹木名板設置などを行った。

宮内省西北殿復原　昨年度に引き続く工事で，12月にすべてが完了し，ここに軸線をそろえて桁行９間の西南殿と12間の西北殿とがそろうことになった。梁間が２間であることや構造形式や外観等すべて両者共通しており，特に東面する扉口と土壁との関係を同じパターンで統一したこともあって，２棟の連帯感がより強調されるという効果が出た。図1.A　（細見啓三）

宮内省正殿の礎石復原　西北殿の東方に位置する桁行７間・梁行４間・柱間各15尺・南北棟の大形建物で，この区域内での正殿と考えられている。礎石が北から３列にわたり当初のまま遺存していることでもこれまで注目され，露出展示の形をとってきた。ところが南殿２棟が復原されたのをはじめとして，このたび西南殿・西北殿ともそろい，整備レベルの関係もあって，この際に建物の復原を念頭においた上での礎石復原を行うこととなった。一部であれ当初の礎石が残るところから，先ずこれを被覆し保護することを第一義に考え，礎石を養生の上，全面にわたり厚35cm の鉄筋コンクリートスラブを打ち，この上に厚30cm にカットした礎石を据えるという工法をとることにした。周囲の基壇は羽目石・葛石で構成される簡単なものであったろうが，今回は復原せず法面に形成した上，上面と同じように張芝仕上げにとどめた。

この建物の構造形式は，遺構・遺物などから，切妻造で瓦葺き，三ツ斗程度の組物をもち，軒は地円飛角の２軒であったと想定される。もちろん外壁には扉口や連子窓または土壁等で閉ざされていたはずである。今後の復原が期待される。図1.B　（細見啓三）

朱雀門周辺整備　昨年度に朱雀門基壇の復原を完了したことから，本年度は朱雀門に取付く築地大垣の復原表示と門前広場の整備を行った。

朱雀門基壇と既設復原築地との間は，築地の平面表示にとどめ，既設築地と同様に雨落葛石は凝灰岩延石，築地両側下には花崗岩延石を並べ，犬走り・築地内はそれぞれ色モルタル仕上げを施した。朱雀門基壇復原に先立つ第121次発掘調査によって，築地幅はこれまで考えられていた門両側のみ基底幅12尺と大きくなるというものではなく，すべて基準幅９尺であることがわかったので，この新知見による築地幅としている。なお，脇門の存在は第16次発掘調査でも確認された通り，門中心から約100尺隔たった位置に柱心々14.5尺のくぐり門があったとみてよい。今回は直径1.2尺の門柱を地上80cm 立上げその位置を示すとともに，唐居敷や蹴放しはそれぞれの下に入っていたであろう見切石を据え表現した。ただ，東方は全長にわたって施工できたが，西方は市道との関係から朱雀門側の柱１本を立てるにとどまった。図1.C　（細見啓三）

門前広場は，正面階段及び東脇門と復原二条大路内苑路とを結ぶ苑路を造成し，苑路は化粧砂利敷（門正面苑路幅17m，脇門苑路幅５m）舗装とし，その他は張芝とした。なお，新設苑路と二条大路内苑路の接合部には車止柵（ステンレス製，径14.3mm）を，その他道路境界線には擬木柵（コンクリート製焼杉仕上げ，高45cm）を設置した。（上垣内茂樹）

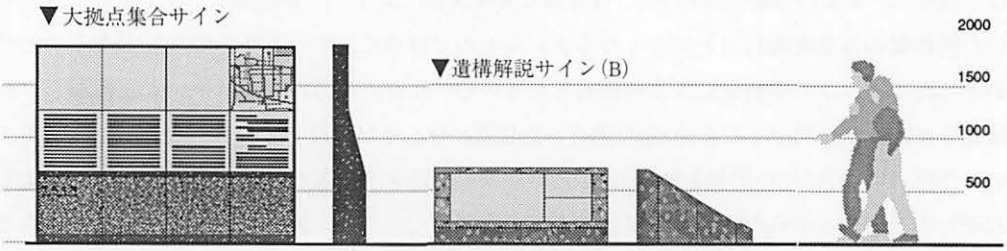
第一次大極殿院地区整備　第一次大極殿院地区暫定整備の一環として，本年度は北の大極殿が建つ台地と南の広場との間にある壇を視覚的に捉えられるよう壇造成を行った。ここには奈良時代前半期の高さ約2.2m の塼積擁壁と，その後位置を約18.3m 南に移してつくられた奈良時代後半期の玉石積擁壁からなる高さ約1.8m の壇がある。今回の造成では現存する後期の遺構を保護する関係上，玉石積擁壁の位置に壇を設けた。しかし，高低差については法面を芝生で保護するため約1.2m とし，かつその勾配も本来の玉石積擁壁より緩くし，約26度とした。なお，造成した段差の東西延長は約131.4m である。図１.D（高瀬要一）

佐紀池石積護岸整備　平城宮跡の北西部にある佐紀池の西岸は民地と接しており，波による堤の崩落が近年目立つようになってきたことから，同池の西岸部に花崗岩雑割石による護岸整備を行った。石積擁壁の場合，コンクリート基礎を設けるのが通例であるが，今回は，下部に残存する遺構に影響を与えないよう遺構上部に生松丸太の梯子胴木基礎を採用した。なお，石積擁壁の設置位置は，擁壁裏込の後線を敷地境界線に合わせるようにし，擁壁の所有と管理責任が明確となるようにした。施工した石積の総延長は約70m となった。図１.E（渡邊康史）

案内板設置　平城宮跡サイン計画に基づき，大拠点集合サイン１基，遺構解説サイン(B) ５基及び平城宮跡地図サイン（路面埋込型）７基を設置した。

大拠点集合サインは，平城宮の鳥瞰図，平城宮跡地図，平城宮跡の説明文，資料館の案内などを焼き付けた陶板を，鉄筋コンクリートの軀体に張り付け，花崗岩切石で外装を施したもの。総合案内板の役割を持つもので，遺構展示館東側の案内広場の北端に位置した。説明文は，和文・英文のほか，平城宮跡のサインとしてははじめて中国語・ハングルでの表記も採用した。

遺構解説サイン(B)は，イラストと説明文（和文・英文）を焼き付けた陶板をコンクリート軀体に張り付け，凝灰岩の切石で外装を施したもの。イラストは，それぞれの遺構の奈良時代の推定復原図を基調とし，人物を描き込むことによって臨場感を演出した。設置場所は，宮内省の復原建物，内裏の井戸，朱雀門，兵部省，北面大垣である。図１.F（小野健吉）



平城宮跡サイン計画に基づく案内板

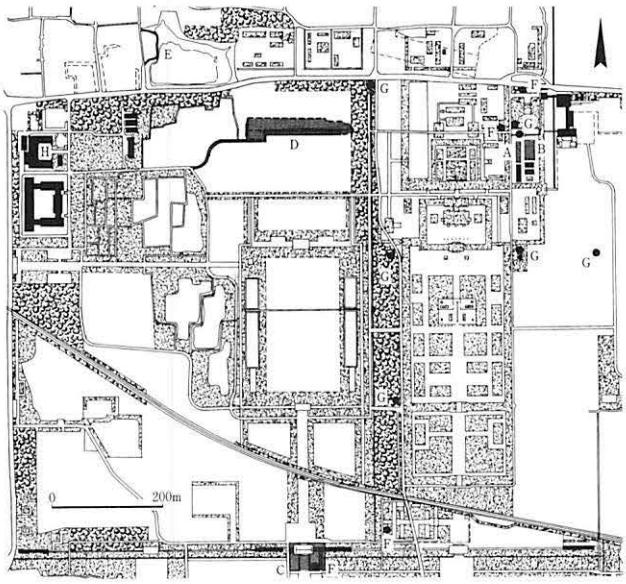
高圧電気設備改修　平城宮跡内の発掘調査用高圧電源として，宮跡内に地中埋設配線（6.6KV）を行っているが，近年配電設備の老朽が進み耐用年数も経過していることから，これを改修することとした。既存の設備は施工後20年を経過しており，発掘調査や環境整備の進捗に伴う経路変更の必要性も出てきていた。本年度は第一次大極殿院外の東北隅部受電設備（キュービクル）をはじめ，中央緑陰帯内変電設備等キュービクル（据置き型）を計６基及びそれらに至る配電線（高圧スチールコルゲートケーブル22sq-3c 土中直埋）の更新を行った。図１.G　（小園秀彦）

保存科学実験室改修　平成３年度にそれまで第３収蔵庫内に分散していた出土遺物の保存処理施設を集中させるよう大型遺物処理棟の建設を行った。その結果，移転跡の利用法として，発掘出土遺物の保存処理方法や実際の作業が見学できる施設に改修することとし，平城宮跡資料館地区の見学施設の充実を図った。改修は，見学者が保存処理作業の邪魔にならないよう見学用通路（廊下）を設け，その通路沿いの各処理室の壁にできるだけ窓を多く取り，内部での処理作業等が見学出来るようにした。図１.H　（坂上定敬）

平城宮現況樹木調査と樹木名板設置　当研究所では第一次大極殿院の復原整備に向けて，平成元年度から基礎調査をすすめてきており，昨年度（平成３年度）には宮内に現存する樹木の悉皆調査を行った。その結果，現在宮内には約3,800本の樹木が生育していることが把握できたが，今後将来にむけて樹木の生育を追跡調査する必要がわかった。そこで今年度は追跡調査すべき調査木を約100本選び，これらの樹木の台帳を作成するとともに，各樹木に登録ナンバー，標準和名，学名，植栽年度を入れたアルミ製プレートを取り付け，５年ないし10年後に予定している追跡調査に備えた。同時にこれらのプレートは平城宮見学者に樹木名を学習してもらうことも考え，追跡調査用とは別に見学者用プレートをこれも約100枚取り付けた。　（高瀬要一）

宮内省 西北殿 復　原 261.39m² 94,245千円	宮内省 正殿礎石 復　原 685.7m² 28,531千円	朱雀門 周　辺 整　備 2,952m² 19,528千円
第一次 大極殿 整　備 7,328m² 27,202千円	案内板 設　置 13　基 13,905千円	高圧電 気設備 改　修 6　基 36,968千円
佐紀池 護　岸 石　積 72.7m² 11,422.7千円	樹　木 名　札 取　付 201本 669.5千円	保　存 科学室 改　修 192m² 14,008千円

平城宮跡整備費内訳

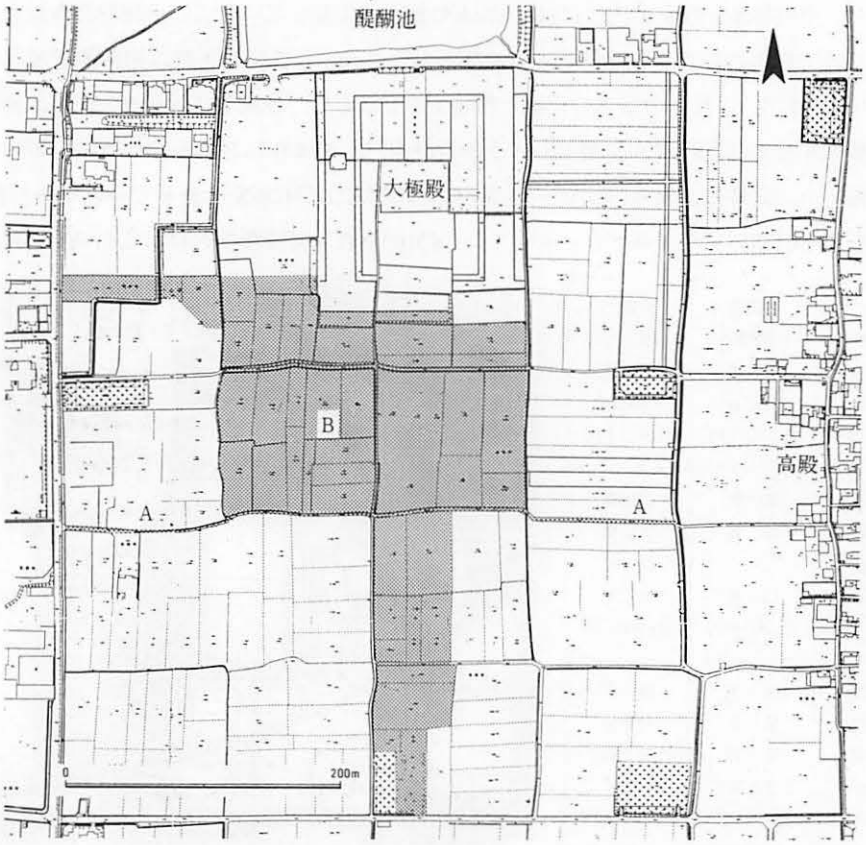


平城宮跡整備位置図（図１）

2 藤原宮跡の整備

宮跡東方の集落（高殿）から鴨公小学校に連絡する通学路整備の一環として朝堂院の中央を東西に走る畦畔沿いに園路整備を行った（図中A）。新設園路は幅2.5mで，粒調砕敷の表面仕上げとした。また，これと並行して大極殿院および朝堂院地区に盛土による広場を造成した（図中B）。広場は，大極殿院の東と西を南北に流れる2本の農業用水路に挟まれた東西約225mの区域のうち，大極殿院の南面回廊から先述の新設園路に至る南北約150mの範囲である。平均盛土厚は約50cmで，表面を化粧砂利敷，周囲の法面を張芝で処理した。また，造成後の土壌安定のために予め表土（耕作土）の掘削除去を行ったほか，盛土中に10m間隔で透水管を埋設するなど，特に排水に留意した設計を行った。周辺の未買収地（耕作地）との関連から従来の水系を温存する必要があり，営農時に給排水路として開削された小規模な素掘溝なども極力暗渠で残すこととした。この広場への導入路として，西方と南方の市道から延びる化粧砂利敷の園路を設置した。本年度の整備面積は47,093m^2，工事費は185,400千円であった。

なお，この造成地は1995年3月29日から橿原市主催のもとに開催される藤原京創都1300年記念事業（ロマントピア藤原京）の会場としても利用される予定である。（本中　真）



藤原宮跡整備位置図

南アジア寺院の調査

アジアにおける寺院の研究

研究課題としている日本中世寺院史研究を進展させるため，寺院建築の伽藍配置，なかでも堂塔と，僧衆の居住する僧坊の関係を中心として，建物配置や構造について，日本と外国の事例を比較検討する資料を得ることを目的に，インドおよびインドネシア所在の仏教寺院およびヒンドゥー教寺院・イスラム教寺院を実地に調査した。インドでは，東インドのビハール州，南インドのアーンドラ・プラデーシュ州，西インドのマハーラーシュトラ州の寺院遺跡の調査を行った。僧坊は，すべての遺跡遺構に遺存しているわけではないが，基本的には寺院においてはスタトゥー，大学においてはスティジのような中心となるものをとりまく形で三面に構築されている例が多く，それらはすべて個別の房室が接続した形態をとる。それは西インドの仏教石窟寺院においても同様であり，南都諸大寺の三面僧坊との関係を伺わせる。そして一連の僧坊はおおむねベット，テーブルなどその構造にも共通性がある。インドネシアにおいては，ジョグジャカルタ周辺，ゲドングソンゴを巡察した。例えば，ボロブドゥールのステゥーパは崇拝の対象であり，元来それを取り囲む僧坊も存在したかと思われるが，現状では確認できない。またプランバナン周辺のプラオサン寺は，南北２棟に分かれている寺院であるが，両寺の背後には連結している縁石の残存がみられ，僧坊のごとき居住施設かとも思えるが，中心寺院を囲む小寺院の可能性もあろう。僧坊と付属小寺院との識別も課題である。　（綾村　宏）

アンコール文化遺産の調査

本年度は，上智大学アジア文化研究所の主催する，アンコール遺跡学術国際調査団の一員として牛川・杉山が現地での調査活動に参加した。本研究には，アンコール遺跡群のバンテアイ＝クデイ遺跡の調査と，プノンペン芸術大学での学生指導という２つの目的がある。

８月の調査には杉山が参加し，プノンペン芸術大学において考古学の講義を行った。日程後半は，現地に移動し，バンテアイ＝クデイ遺跡で小規模な発掘調査を行った。その結果，現在見られる遺構以前に，ラテライトを中心に組み立てられた前身遺構の存在することが明らかとなった。この遺構はラテライトで化粧を施した基壇上に建立されたもので，ラテライトの敷石を伴う。遺物の出土は少なかった。発掘調査終了後，現地保存事務所に保管される陶磁器の調査を行うことができた。しかし，フランス極東学院などが発見した陶磁器類の多くが，内戦の混乱期に所在不明となっていた。残されていたのは，小形の褐釉系陶器類が多い。なかには，中国産の白磁や青白磁も含まれていた。

３月の調査には，牛川と杉山が参加し，それぞれプノンペン芸術大学において専門分野の講義を行った。こうした人材育成を進めることによって，アンコールを含む遺跡の多くが，今後カンボジア人自身の手によって調査・整備されることが期待されている。　（杉山　洋）

中国との交流

中国早期建築の研究

日本学術振興会の特定国派遣研究員（長期）として，1992年5月16日から8月29日まで，中国で表記の研究に従事した。おもな受け入れ機関は，中国社会科学院考古研究所である。研究の対象は，主として新石器時代から唐代にかけての建築と都城であり，北京のほか浙江・福建・陝西・四川・チベット・雲南・黒龍江・遼寧の各地で，数多くの遺跡・古建築・博物館を訪れることができた。とくに印象深かったのは，福建省武夷山市近郊の崇安城遺跡（漢代）である。崇安城は，『文物』その他の学術雑誌に発掘成果がいくどか報告されてきたが，遺物・遺構のあらゆる側面に中原系の要素と閩越土着の要素が見られるため，遺跡の担い手に関する議論が大きく分かれてきた。建築遺構に限定しても，宮殿建築の外観を中原系の台榭建築に見せながら，その内部には南方系の高床式建築技術を応用しており，このような建築を築造したのが，閩越人だったのか，南下した中原漢人だったのかは，いまだに断定しにくい状況にある。それにしても，どうやら私は，この遺跡を訪れたはじめての外国人研究者であったようで，特殊な建築遺構をつぶさに観察できたのは，まことに幸運だったというほかない。現地で12年間も発掘に携わり，今回も私を案内していただいた張其海氏（福建省博物館）に，この場を借りて，感謝の気持ちを記しておきたい。

このほか，滞在期間中には，小野健吉・溝口正人・杉本和樹3氏の協力を得て，雲南省ナシ族の母系社会と建築技術に関する調査もおこなった（住宅総合研究財団の助成による）。この成果については，『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論集』を参照されたい。（浅川滋男）

交河故城保存修復のための調査

この調査は，ユネスコによる中国新疆ウイグル自治区交河故城保存修復プロジェクトの第一段階として実施したものである。ユネスコからの要請により，1992年8月に町田章が概況調査のため現地を訪れたのに続き，同年10～11月に村上隆・小野健吉・小沢毅・文化庁記念物課の桂雄三氏らが，新疆ウイグル自治区文化庁・新疆考古研究所と共同で，現地の基礎調査を実施し，その成果報告を和文・英文でユネスコに提出した。

遺跡概要　交河故城は，シルクロード天山南路沿いのトルファン市の近郊にある都城遺跡。2本の河川が合流する地点に位置する柳葉状の台地（比高30m，長さ1.7km，幅0.3km）上にある。B.C.2世紀に車師前国が王城を置き，唐代には安西都護府が一時期置かれ，唐の西域経営の中心となった。その後も都市として存続したが，モンゴルの勢力により14世紀に滅亡した。現在残っている都市遺跡は，おもに唐代に建設された役所・住居・寺院・墓地などである。

調査成果　小沢は，遺跡内の建物の構築法が，地山削り出し，版築，生煉瓦の積み上げの3種類に大別され，それぞれの分布が建物の種類とともに明確な特徴を示す事を指摘した。また，小沢・小野は，本格調査に際し正確な測量に基づいた実測図の作成が不可欠である事を提言した。

村上は，壁体構成材の材質分析と現地での24時間の温湿度計測に基づき，凍結融解現象が壁体の劣化の一因となっている可能性を指摘し，今後合成樹脂などを用いた本格的な保存処理を実施するとすれば，現地でのテストを重ねる必要があることを指摘した。小野は，後世の要素を含まない純粋な遺跡景観の重要性を指摘し，その景観保護を提言した。また，遺構の人的毀損を防止するため，観光客の見学ルート設定の素案を提出した。 (小野健吉)

華北古建築調査

1992年8月9日より23日まで，中国華北の古建築の調査および修理方針の検討会に参加するために訪中した。調査団は鈴木所長，国立歴民博の濱島正士教授，京大人文研の田中淡助教授および藤田盟児の4名で，国家文物局，文物研究所，山西省文物局，河北省文物局，山西省古建築保存研究所などのお世話になり，特に羅哲文氏は終始同行して下さった。主な調査対象は，山西省では，大同市の上華厳寺・下華厳寺・雲崗石窟・善化寺，渾源県の懸空寺・永安寺，応県の仏宮寺釈迦塔（いわゆる応県木塔），代県の鼓楼，太源市の文廟・永祚寺，祁県の県城などである。とくに，応県木塔はひどい歪みが生じ，破損の危険性が高まっているので，文物研究所の管理のもとに修理が計画されており，その方針を検討する学術会議が，日本側のほかに，修理を担当する文物研究所の張子平氏，山西省古建築保存研究所の柴澤俊所長，木塔保管所長，応県県長らが参加してもたれた。調査の後半では，薊県の独楽寺，天津市の清東陵などを訪れ，独楽寺では文物研究所の余鳴謙・孔祥珍両氏や，天津市文化局の張新生局長らと同様の修理方針に関する会議をもった。純木造建築の解体修理経験の少ない中国では，日本側の木構造への理解と修理経験が少なからず役立つものと思われた。また国家文物局の張徳勤局長による歓迎会が開かれるなど，中国側の期待が大きいことが伺えた。 (藤田盟児)

日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究

1991年6月に奈良国立文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との間で調印した「友好共同議定書」による「日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究」の2年目にあたる。共同研究は文部省科学研究補助金（国際共同研究，代表鈴木嘉吉）によるもので，8月には鈴木嘉吉・町田章・上原真人が赴き，代表的な中国の都城遺跡を調査した。次に10月4日から2ヶ月間，西口寿生・寺崎保広を考古研究所に派遣し，洛陽城の白居易宅跡の発掘調査に参加するとともに，各地の都城遺跡・遺物の調査を行った。特に今回は漏剋関係の遺跡と遺物，および漢簡などを実見することができた。一方，10月28日から2ヶ月間，中国社会科学院考古研究所の朱岩石・包強の2名が来日し，平城宮跡・藤原宮跡の発掘に参加するとともに，日本考古学の現状について研究した。1993年3月には，考古研究所から徐光冀副所長はじめ，段鵬琦・馮承澤・杜玉生の諸氏が来日し，奈良国立文化財研究所において「日中都城研究の現状Ⅱ」と題する公開の研究会を開催し，討論と交流を深めた。中国側の発表は徐「東魏北斉鄴城朱明門跡の調査と研究」，段「漢魏洛陽城跡出土の北朝磁器と施釉土器」，杜「北魏洛陽外廓城の発見と研究」，馮「隋唐洛陽城の九洲池跡の発掘調査」であった。 (寺崎保広)

アフ・トンガリキ遺跡の調査

南太平洋の孤島ラパヌイ（イースター島）は，チリ共和国の首都サンチャゴより西方3790kmにある。その海岸のほとんどに約1000体の石像（モアイ）が，祭壇（アフ）から落下し倒された状態で残っている。アフ・トンガリキ遺跡は島の東南部（南緯27度７分，西経109度16分）に位置し，1960年のチリの大地震に伴う津波によって二度目の破壊にあい全壊した。それ以来，研究者はもちろん島民にとっても，この遺跡の発掘調査と再建は悲願となっていた。1992年に日本企業の援助があり，チリ大学を中心とするアフ・トンガリキ再建委員会（代表O・ピノチエト国立南極研究所長，後にマルタ国立古文書館・博物館長）による発掘調査と研究，遺構の整備計画が企画され，日本のモアイ修復委員会（鈴木嘉吉委員長）が，これを支援することとなり，当研究所員も参加した。両国のほかイタリア・アメリカ・ポーランドの研究者の参加もあった。

遺跡は約250m四方に及ぶ広大な範囲で，海岸側にアフが立ち，内陸側に家屋，炉，洞窟と岩盤に彫られた魚，マケマケ（創造神の顔）の岩絵がある。この遺跡は1955年，ノルウェーの研究者，T.ヘイエルダールが島を訪れた時，最初に錨を降ろした海岸であり，そこは別世界のようだったと言う。この頃すでに，トンガリキのアフ上には15体のモアイが，内陸部に向かって顔を下に倒れて数世紀が過ぎていた。津波によって一面が石とモアイの散乱場と化した。

今回の調査と整備は，アフと玉石敷広場を中心に行った。まず，予備調査として，現状の写真測量，地質調査，および，津波以前のデータ，写真の収集から着手した。1992年９月から始めた発掘調査では，まずアフの裏面基壇にそって６本のトレンチをいれ，乱石積基壇の基石と，それに接する墳墓を検出した。次にアフに直交する４本のトレンチを入れ，アフの構築，その前面の亀腹状の盛土（ランプ）及び，側面石（パエンガ）と敷石の技術的究明を行った。

遺跡は大きく２時期に分かれる。前期のアフは，後期のアフ（15世紀頃）と重複して，その痕跡を僅かにとどめているにすぎないが，正面（内陸部）を東にし，２基以上のアフが，南北に直線状にならんでいた。南のアフは横幅約30m，奥行5.7mである。正面には石敷が広がり，アフから7.2m離れた所に高さ0.9m，幅1.2m，厚さ0.15mの板石が並ぶ。アフと板石の間の空間がランプである。北のアフは，南のアフより約５mの間隔をあけ，横幅60m，奥行5.7mを測るが，ランプの板石の痕跡は残っていない。２基のアフは併存したのであるが，北のアフ前面に前期の小形モアイがあり，これに対応する白珊瑚製の目と黒曜石製の瞳が出土している。

後期の遺構は，前期の南北のアフが結合し，横幅98m，奥行６m，高さ５mの規模になっている。前期の小形モアイの石材がアフの石組に転用されたものもあった。ここでは前方の傾斜面がさらに４m拡がり，縁に高さ0.9m，幅1.2m，厚さ0.15m，の板石を立てている。つまり，全体で奥行が11mを越える大きなランプとなっている。この傾斜面には径約0.5mの玉石を敷き詰め，石敷広場から望むアフの壮大さを強調する効果があった。アフ上の15体のモアイは，全て顔を下にして倒されていた。倒されたモアイの下，ヤプカオ（帽子），ランプの中，さらに石敷

広場などを利用して，墳墓が作られていた。石室の一般的な規模は長さ２m，幅0.7m，高さ0.7m程であるが，なかには長４m の大きな竪穴式石室に９体の洗骨が埋葬されたものもある。モアイが立っていた時，アフ内にも墳墓があったのであろうが，津波によるアフ壊滅によってその痕跡はない。人骨の出土数は150体分を越えているが，その下限は19世紀まで降る。出土遺物は，モアイ，マケマケ，ウナギの頭部石造品，石器，骨品，貝製品がある。

発掘の成果と古い写真をもとにアフを再建した。また，周囲の遺構の復原を行った。その後モアイを建立した。ラパヌイは南極から強い風が吹き続ける。凝灰岩製のモアイは風化が激しく，それを防止するため，石材サンプルによるテストを繰り返し，樹脂による保存処理をおこなった。

発掘調査前の散乱するモアイ

（鈴木嘉吉・猪熊兼勝・伊東太作・沢田正昭・肥塚隆保・内田昭人・花谷浩・森本晋）

「古代の日本展」報告

国際交流の一環として，文化庁が米国スミソニアン研究機構およびアーサー・M・サックラー美術館と共同で，「古代の日本展」をサックラー美術館（ワシントン）で開催した。奈良国立文化財研究所もこれに協力し，資料の集荷と図録の解説執筆に携わり，展覧会場では出陳資料のチェック等を行った。展覧期間は1992年８月９日～11月１日。当研究所職員の派遣は，川越・舘野・毛利光の順で，それぞれ滞在は約１ヶ月間であった。休館日はなく，ほぼ毎日一度，陳列の温・湿度等をチェック。余暇は図書室や収蔵庫あるいはボストンやニューヨークにまで出かけて資料収集した。事前の連絡をしておけば，資料を手に取り実測することができた。

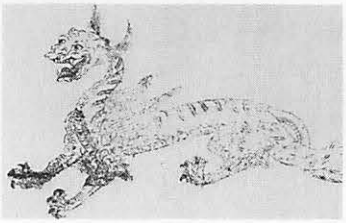
展示は大部分を垂直に並べ，日本側で好評であり，照明も専門家がおり効果があった。期間中，10月２・３日にはシンポジウム「古代日本の美術・技術と社会」が開催された。２日は佐原センター長が「仏教以前の日本の絵画表現」と題して講演し，３日は当研究所では工楽室長が「弥生時代の技術」，町田部長が「藤ノ木古墳・高松塚古墳と正倉院」を報告した。

入館者数は計91,243人，一日平均はほぼ1,000人。サックラー美術館のアン・米村氏によると，地下で通じる他の美術館からの入館者は含まれておらず，実際の人数はさらに多く大成功であったという。次に「平城宮展」という声も囁かれたが…。　（川越俊一・舘野和巳・毛利光俊彦）

飛鳥資料館の研究展示・特別展示

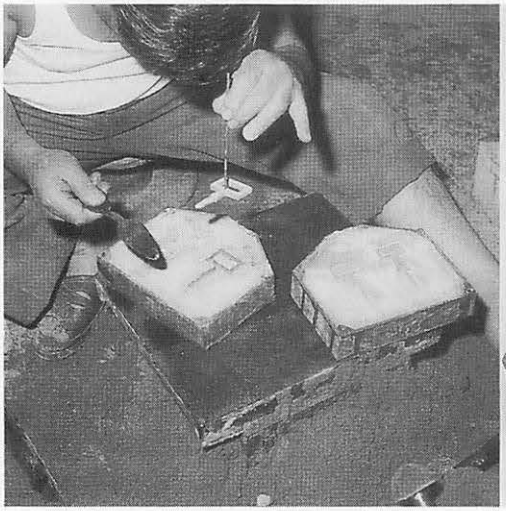
飛　鳥　資　料　館

研究展示「高松塚壁画の新研究」 1992年は明日香村にある高松塚古墳で，極彩色の壁画が発見されて20年にあたる。そこで，これまであまり顧みることのなかった視点で，この壁画がどのような技法によって描かれたかについて研究を進め，その成果を中心にして，写真パネルを使って展示した。この研究は東海大学情報技術センターと共同でおこない，発掘時に撮影された壁画のカラー写真の画像処理をして，画面上の傷痕を除去したうえで画像解析により各図像を比較検討した。すると，男女群像では，人物の下絵を描いた幾つかの型紙が用意されていて，それを壁面上で操作して群像表現の下描きを作製した可能性が指摘されるようになった。また，東・西壁の青龍と白虎に関しても部分ごとに図像が一致することにより，型紙による描画法がうかがえる。期間中の講演会で，星山晋也氏は，絵画にこのように型紙を使用する例は敦煌壁画や法隆寺金堂壁画，さらに尾形光琳の菖蒲図にも見られると紹介した。

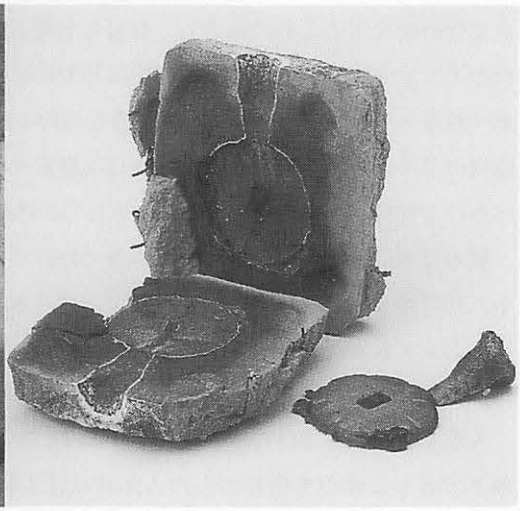


傷痕を除いた白虎図

特別展示「飛鳥の工房」 7世紀後半頃の鋳物，鍛冶，ガラス細工などの火を扱う工房で働いていた工人たちの作業を，出土品や現代工人の模作により，復原的に展示した。1991年の初夏に，飛鳥藤原宮跡発掘調査部が飛鳥寺東南の丘陵谷間で発掘した赤く焼けた炉跡や小規模な掘立柱建物跡，廃棄物層は，豊富な出土品から，そこで金工品やガラス製品を作っていたことを教えてくれた。出土土器の年代から藤原宮の時代に盛んに煙をあげて操業していたこともわかった。これらの工房に関する諸道具や未製品などを展示し，また合わせて現代工人による製作過程やその諸技法を実物の道具や模作品，多数の写真パネルで解説展示した。　（工楽善通）



砂型を作る



鋳型とその銅金具

公開講演会発表要旨

王様と鉞　ー中国新石器時代の武器を考えるー　近年，龍山・良渚文化の遺跡の発掘によって城壁・墳丘墓・金属器などが発見され，文明の起源に見直しを迫っている。ここで国家形成過程で生じた戦争時に使用された武器が問題となる。中国最古の武器は弓矢と鉞（マサカリ）であろう。今から6500年前に，肉厚の工具としての石斧から，刃幅が広く身の薄い有孔石鉞が分離し，武器としての道を歩む。5000年前には玉製の鉞が出現し，他の特殊な玉器と共伴する墓が散見される。これは玉鉞の儀器としての側面を示す。4500年前には孔が大きくなり，装飾が加えられ，非着柄型の鉞が誕生する。商代以後，武器の主要な座は矛・戈に譲るが，最古の権威の象徴である鉞は「王」の字も含め，各成語に今に至るまでその名を留めることになる。（佐川正敏）

遺構は語る　平城宮内裏地区の発掘調査は既に完了し，平成３年にその成果が『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』として刊行された。この報告書に基づき，奈良時代のⅠ～Ⅵ期に及ぶ内裏の構造の変遷を，主として各時期の空間構成のあり方と，その間の変化の様相に着目し検討した結果を述べた。すなわち，平城宮内裏ではⅤ期に北辺中央に皇后宮が成立し，Ⅵ期に至り北辺東隅に後宮が成立したという，文献史料では知り得なかった新たな史実を発見し，その背景に古代における女性の政治的・社会的な地位の低下と，天皇を中心とした貴族社会における父系制の導入の事実があると推定した。併せて発掘調査で検出した遺構から具体的な史実を掬い上げ，文献史料と比較検討を行うことによって古代史を再構成する新しい方法をも提示した。（橋本義則）

南中国の先史住居　ー発掘遺構にみる住まいの多様性ー　安志敏氏の著名な論文「干闌式建築的考古研究」（『考古』1963-2）以来，漢代以前の中国の住居は，北方が竪穴式で，南方が高床式という二元的イメージが定着してきた。しかし，その後30年間に，華南の各地で多種多様な住まいの遺構が発見され続けている。筆者は，先史華南の住居址をＯ型（穴居）・Ⅰ型（高床式）・Ⅱ型（柱立ち平地式）・Ⅲ型（柱壁併用の平地式）・Ⅳ型（壁立ち平地式）の５類型に分け，その地域分布を示すとともに，西南少数民族建築との比較などから，それぞれの「担い手」を推定した。また，気楽な雲南起源説が横行している高床式建築については，長江中下流域の湿地帯で，稲作に先行して発生した可能性があることも指摘しておいた。（浅川滋男）

丸瓦作りの一工夫　行基丸瓦の模骨の一種に，竹などの細棒を簾のように編み束ねた模骨がある。これを使った竹状模骨丸瓦はこれまで北部九州だけに分布すると言われていたが，近年，飛鳥寺や飛鳥池遺跡で多量に出土し，大和にもあることが判明した。大和の竹状模骨丸瓦を検討すると，叩き板の種類などは九州と相違する点もあるが，模骨の構造は共通する。出土遺跡の年代などからこれらの瓦は７世紀後半のもので，九州に先行する。対応する軒丸瓦は幅広い素紋縁をもつ複弁八弁紋あるいは重弁紋，軒平瓦は三重弧紋である。これは九州でセットをなす百済系単弁軒丸瓦と二重弧紋軒平瓦とは一致しない。軒瓦の紋様などからみて，大和の竹状模骨丸瓦は百済ではなく高句麗の影響を想定すべきではないかと考えた。（花谷浩）

調 査 研 究 彙 報

薬師寺典籍文書調査　東大史料編纂所との共同調査。第16・22・23・25・26函の整理分類・調書作成と，第21函の写真撮影を行った。うち第16函については調書作成を完了し，第21函について写真撮影を継続中である。各函に多量な近世文書が収められているのは従来指摘の通りである。現在，第１～21・24函が調書作成了で，第22・23・25・26函が継続中であり，また第１～19函の写真撮影を終えている。92年７月。　(綾村・佃・館野・森・渡邊)

醍醐寺文書調査　醍醐寺文書の写真撮影を継続中であるが，今年度は第15・16函について継続して実施し，マイクロフィルムによる撮影は完了した。92年８月。　(綾村・佃・渡邊)

大友家文書の調査　東博の文化庁分室で写真撮影を行った。93年３月。　(綾村・佃・森)

歴史研究室によるその他の調査　文化庁美術工芸課の依頼により石山寺蔵校倉聖教の調査・写真撮影に協力（92年８月)。石山寺・滋賀県教委の依頼により同深密蔵聖教調査に協力（92年８月・12月，93年２月)。静岡県教委の依頼により三嶋大社文書調査に参加（92年８月)。北浦直人氏の寄贈を受け北浦定政関係資料（木箱２箱）を受納。92年４月。

法隆寺所蔵佐波理製容器の調査　法隆寺所蔵の佐波理製容器計20点の実測を行い，X線透視によって製作技法を観察し，蛍光X線分析によって材質を調査した。その結果，奈良時代後半から平安時代に入ると鉛の比率がやや高くなること，鎌倉時代にはつくりが厚手になること，飛鳥時代の製品もあることなどが判明した。次年度は紀年銘資料を中心に考古学的調査と科学分析調査を継続する予定。　(平城調査部考古第１・２調査室，埋文センター遺物処理研究室)

飛鳥池遺跡出土金属製品の材質調査　当遺跡出土の金属製品は，鉄，銅，銀－銅合金で，銀－銅合金遺物に関しては前年報告し，銅製品について調査した。銅製品には魚々子や人形などがあるが，組成はほぼ近似する。Cuは97～99％で，不純物として，Fe＝0.2～0.02％，Pb＝0.2～0.02％，As＝0.09～0.02％，Ag＝0.5～0.1％，Sn＝0.3～0.02％が含有している。　(肥塚隆保)

年輪年代学の国際研究集会　1992年５月15日から５月16日にかけて，イタリアのレッチェでヨーロッパ諸国の年輪年代学研究者が一同に会し，最新の研究状況を報告した。日本からは光谷一人が参加し，ヒノキを用いた年輪気象学の研究成果について報告した。　(光谷拓実)

大通寺建造物調査　滋賀県長浜市にある大谷派別院の大通寺の境内にある近世の堂舎の保存方針を検討するため，境内のすべての建物の調査を行った。本堂以下３件は重要文化財，門２棟が市指定文化財であるが，この他庫裡・鐘楼などが近世の優品で，類例の少ない講の建物も良質である。『大通寺建造物調査報告書』（長浜市教委）として成果を刊行。　(山岸・松本・島田・藤田)

総光寺庭園の実測調査　本庭園は山形県飽海郡松山町にある県指定名勝で，正確な作庭年代は不明であるが，享保９（1724）年以後に藩主がしばしば花見に参詣し，この頃には庭園が完成していたとみられる。庭園は本堂の南に連続する書院の東庭で，東方の峯から連続する傾斜面を築山とし，そこから裾部の園地に滝が落とされている。実測面積は約1500m^2。　(本中・岸本・内田)

奈良国立文化財研究所要綱

Ⅰ　事業概要

1　研究普及事業

公開講演会

(1)　1992年5月16日　第70回公開講演会
「王様と鉞－中国新石器時代の武器を考える－」　佐川　正敏
「遺構は語る－平城宮内裏地区の遺構変遷をめぐって－」　橋本　義則

(2)　1992年11月7日　第71回公開講演会
「南中国の先史住居－発掘遺構にみる住まいの多様性」　浅川　滋男
「丸瓦作りの一工夫－畿内における竹状模骨丸瓦の様相－」　花谷　浩

現地説明会

(1)　1992年6月13日　平城宮跡第229次
(式部省跡)　小澤　毅

(2)　1992年6月27日　藤原宮跡第67次
(東方官衙地区)　川越　俊一

(3)　1992年8月11日　薬師寺北面回廊・講堂　松本　修自

(4)　1992年8月22日　平城宮跡第230次
(左京三条一坊十・十五・十六坪)　小野　健吉

(5)　1992年11月14日　石神遺跡第11次　山本　忠尚

(6)　1992年11月21日　平城宮跡第230次
(式部省)　中村　慎一

(7)　1993年2月13日　雷丘北方遺跡第3次　岩永　省三

(8)　1993年2月20日　平城宮跡第238次
(第二次朝堂院東第五堂)　岸本　直文

(9)　1993年3月27日　本薬師寺中門跡　本中　真

現地見学会

(1)　1992年11月24日　藤原宮跡第70次
(内裏西外郭地区)

平城宮跡資料館・遺構展示館（見学者数）

区　分	資料館	遺構展示館	計
1992年	64,009	69,795	133,804
累　計	1,236,400	1,571,230	2,807,630

資料館は1970年度，遺構展示館は1963年度以降の累計

2　1992年文部省科学研究費補助金による研究

新継	種　目	研究課題	研究代表者	交付額(千円)
新	特別推進研究(1)	古代生活環境復原のための新手法の確立	佐原　真	118,000
新	重点領域研究(1)	遺跡探査法の総合的開発研究	西村　康	5,500
新	重点領域研究(2)	集落・埋納遺跡の探査	西村　康	2,400
継	一般研究(A)	データ・ベースの開発による近世社寺建築研究の総括	松本　修自	2,000
継	〃	神殿造の総合的研究	牛川喜幸	2,400
継	一般研究(B)	石器製作過程復原と製作追試実験研究	松沢亜生	500
継	一般研究(C)	古代宮都における内裏の基礎的研究	橋本義則	400
新	〃	蔵書印からみた寺院書跡資料の伝来に関する研究	綾村　宏	400
新	〃	平城宮・京出土土師器の分類と産地同定	巽　淳一郎	800
新	〃	七・八世紀の粘土紐・粘土板桶巻作りの軒平瓦の製作工程復原による工人系譜関係の研究	山崎信二	700
新	〃	伝統的木造建築の構造安定性に関する研究	内田昭人	1,300
新	〃	古代園池の立地と形態	高瀬要一	1,200
新	〃	東西文明交流においてステップルートが果たした役割	山本忠尚	800

新	奨励研究(A)	室町時代の軒瓦の地域的比較研究（近畿・東国編）	佐川正敏	900
新	〃	日韓出土馬具の比較研究	花谷　浩	900
新	〃	弥生時代装身具の編年的研究	岩永省三	900
新	〃	前方後円墳墳丘規格の系統的研究	岸本直文	900
新	〃	先史華南の住居址とその地域性　生態学的適応と民族史的背景	浅川滋男	800
継	試験研究(B)	フラックスゲートを用いた新しい磁気探査装置－三軸グラジオメーターの開発	西村　康	4,400
新	〃	わが国古代の稲作農耕研究における生物考古学的手法の開発	工楽善通	7,500
継	国際学術研究	日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究	鈴木嘉吉	7,500
新	〃	日韓における考古遺物の材質・技法に関する分析の比較研究	沢田正昭	3,700
継	研究成果公開促進費	長屋王木簡データベース	町田　章	4,840
	計	23件		168,740

特別推進研究(1)	(新規)	1件
重点領域研究(1)	(新規)	1件
〃 (2)	(新規)	1件
一般研究(A)	(継続)	2件
〃 (B)	(継続)	1件
〃 (C)	(継続)	1件
〃 (C)	(新規)	6件
奨励研究(A)	(新規)	5件
試験研究(B)	(継続)	1件
〃 (B)	(新規)	1件
国際学術研究	(継続)	1件
〃	(新規)	1件
研究成果公開促進費	(継続)	1件
計		23件

3　飛鳥資料館の運営

展　示

第一展示室　常設展示

第二展示室

春期研究展示「高松塚壁画の新研究」

明日香村・(財)飛鳥保存財団共催

1992.4.9～5.31（53日間）

秋期特別展示「飛鳥の工房」

1992.10.9～12.8（61日間）

特別講演会

1992年4月25日

「高松塚壁画の線描－日本伝統絵画との考察－」　星山　晋也

1992年5月23日

「高松塚壁画の一背景－古代日本に宦官はいなかった－」　佐原　真

1992年10月17日

「古代の鋳造技術」　中野　政樹

1991年11月14日

「古代ガラスの材質」　肥塚　隆保

普　及

インフォメーションルームにおいて観覧者の質問に応じている。特別展示の刊行物として「高松塚壁画の新研究」及び「飛鳥の工房」を刊行した。

入館者数（1992.4.1～1993.3.31　開館日数318日）

区　分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一　般	39,670	15,312	121,654	9,298	130,952
高・大生	6,481	13,623			
小・中生	9,510	37,058			
計	55,661	65,993			

陳列品購入

山田寺出土青銅五尊像複製

青銅の飾座金・釘など鋳造に関する資料

木工ロクロによる製品の製作過程を示す一括資料

4　埋蔵文化財センターの研修・指導

研　修　埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

(1)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（遺跡探査過程）
1992年５月12日～５月22日（参加者８名）

(2)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（環境考古課程）
1992年５月28日～６月19日（参加者20名）

(3)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修
（一般研修）
1992年７月１日～８月７日（参加者32名）

(4)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（石器調査課程）
1992年８月25日～９月８日（参加者20名）

(5)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（遺跡測量課程）
1992年９月17日～10月８日（参加者20名）

(6)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（文化財写真課程）
1992年10月13日～10月30日（参加者21名）

(7)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（中近世遺跡調査課程）
1992年11月５日～11月13日（参加者32名）

(8)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（遺跡保存整備課程）
1992年11月19日～12月９日（参加者19名）

(9)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
（保存科学基礎課程）
1993年１月19日～１月29日（参加者16名）

(10)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
（木器調査課程）
1993年２月４日～２月９日（参加者30名）

(11)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
（有機質遺物応急処置課程）
1993年２月16日～２月19日（参加者16名）

(12)　平成４年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
（埋蔵文化財基礎課程）
1993年３月２日～３月８日（参加者38名）

研　修　員　一　覧　表

氏　名	所　　属	受入れ期間	受入れ部局	研究・研修内容
国　内				
天野秀昭	三重県埋蔵文化財センター 管理指導課　主事	1992.9.1～1992.11.30	飛鳥藤原宮跡発掘調査部	発掘調査研修
野口美幸	同上　技師	1992.11.9～1993.2.8	平城宮跡発掘調査部	同上
森下英治	香川県埋蔵文化財調査センター技師	1993.2.18	埋蔵文化財センター	保存科学研修
高橋　学	秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事	1993.3.1	同上	同上
国　外				
鄭桂玉	大韓民国　国立文化財研究所 遺跡調査研究室　学芸研究士	1992.5.10～1992.11.10	埋蔵文化財センター	考古学研修
申昌秀	大韓民国　慶州文化財研究所 文化財管理局　文化部	1992.5.18～1992.5.28	同上	保存科学研修
朴文済	同上	同上	同上	同上
鄭永東	同上	同上	同上	同上
李勝奎	同上　監査担当官	1992.8.16～1992.8.23	同上	同上
ソーレン・アンデルセン	デンマーク　オーフス大学　教授	1992.10.6～1992.10.31	同上	考古学研修
趙由典	大韓民国　国立文化財研究所 文化財管理局　遺跡調査研究室長	1992.10.19～1992.12.25	同上	保存科学研修
万倜	中華人民共和国　南京博物院 文物保護研究所	1992.10.26～1992.12.26	平城宮跡発掘調査部	考古学研修

朱　岩　石	中華人民共和国　中国社会科学院考古研究所　第三研究室	1992.10.28～1992.12.26	同上	同上
包　強	同上	同上	同上	同上
文　煥　哲	大韓民国　国立文化財研究所保存科学物理金属室　保存処理担当	1992.11.1～1992.12.30	埋蔵文化財センター	保存科学研修
焦　南　峰	中華人民共和国　陝西省考古研究所助理研究員	1992.11.1～1993.2.27	同上	考古学研修
ウォンチュック・キンレイ	ブータン内務省　技官	1992.11.18～1992.12.7	平城跡発掘調査部	同上
ナデージナ・アルテテシトヴァ	ロシア科学アカデミー極東支部歴史学・考古学・民族学研究所　研究員	1992.12.4～1992.12.14	埋蔵文化財センター	考古学研究・研修
ニーナ・レェシェンコ	同上	同上	同上	同上
ユーリー・ニキーチン	同上	同上	同上	同上
金　鍾　吾	大韓民国　国立慶州博物館学芸研究室	1992.12.14～1992.12.27	同上	保存科学研修
朴　成　澤	大韓民国　東亜大学校	同上	同上	同上
カムパイ・カンタヴォン	ラオス　情報文化省　博物館考古局考古課　課長補佐	1993.1.18～1993.3.17	同上	仏教遺跡研修
ウォンマニ・ムンティソン	ラオス　情報文化省　博物館考古局考古課　専門員	同上	同上	同上
趙　現　鍾	大韓民国　国立光州博物館学芸研究室　学芸研究士	1993.2.3～1993.3.30	同上	考古学研修
姜　大　一	大韓民国　国立文化財研究所　文化財管理局　保存科学研究室専門職員	1993.2.12～1993.2.21	同上	保存科学研修
金　秉　柱	大韓民国　啓明大学校博物館保存科学係長	1993.2.15～1993.2.21	同上	同上
李　肖	中華人民共和国　新疆文物考古研究所　文博館員	1993.2.20～1993.5.19	平城宮跡発掘調査部	考古学研修
楊　鴻　勛	中華人民共和国　中国社会科学院考古研究所　教授	1993.2.20～1993.2.27	同上	同上
張　之　平	中華人民共和国　中国文物研究所古建築保護部　副主任	同上	同上	同上
金　東　賢	大韓民国　国立文化財研究所文化財管理局　保存科学研究室長	1993.2.22～1993.2.28	埋蔵文化財センター	保存科学研修
チョンブヌト・ブラサツェット	タイ王国　シルパコール大学考古学科　講師	1993.3.1～1993.5.31	同上	同上
鄧　聰	イギリス・ホンコン　香港中文大学中国文化研究所　副研究員	1993.3.3～1993.3.13	同上	仏教遺跡研修
安　秉　燦	大韓民国　国立中央博物館保存科学室　学芸研究士	1993.3.4～1993.3.27	同上	同上
徐　光　冀	中華人民共和国　中国社会科学院考古研究所　副所長	1993.3.14～1993.3.28	平城宮跡発掘調査部	考古学研修
段　鵬　琦	中華人民共和国　中国社会科学院考古研究所　第三研究室　副主任	同上	同上	同上
馮　承　澤	中華人民共和国　中国社会科学院考古研究所 第三研究室 副研究館員	同上	同上	同上
杜　玉　生	同上	同上	同上	同上
張　世　賢	中華民国　国立故宮博物院　保存科学室長	1993.3.22～1993.3.25	埋蔵文化財センター	仏教遺跡研修
ピーター・ロウリー・コニー	イギリス　ダーハム大学　考古学科講師	1993.3.22～1993.4.5	同上	考古学研修

発掘調査・保存・整備・探査指導

（北海道）手宮洞窟，常呂遺跡，（青森県）六カ所村家ノ前遺跡，津軽氏城跡他，（岩手県）盛岡城跡，志波城跡，平泉遺跡群，大渡Ⅱ遺跡，（秋田県）秋田城，払田柵跡，（福島県）慧日寺跡，根岸遺跡，（栃木県）法界寺跡，下野国分寺跡，（群馬県）高瀬観音山遺跡，（千葉県）市原条里制遺跡，（東京都）品川台場跡，野津田公園遺跡，（神奈川県）旧太田家住宅焼損復旧，（新潟県）八幡林遺跡，（石川県）須曽蝦夷穴古墳，能登国分寺跡，横江荘遺跡，雨の宮古墳群，（長野県）高梨氏館跡，恒川遺跡，妻籠宿本陣跡，（岐阜県）杉崎廃寺跡，塩屋金清神社遺跡，（静岡県）久野城跡，賤機山古墳，横須賀城跡，大知波峠廃寺跡，勝間田城跡，巴川遺跡出土丸木舟，登呂遺跡，片山廃寺跡，御殿・二之宮遺跡，（愛知県）青塚古墳，三河国府跡，東畑廃寺跡，牟呂町市道遺跡，（三重県）城之越遺跡，赤木城・田平子峠刑場跡，縄生廃寺跡，夏見廃寺跡，（滋賀県）安土城跡，木村古墳群，粟津湖底遺跡，兵主神社庭園，紫香楽宮跡，木爪原遺跡，（京都府）長岡京跡，恭仁宮跡，大覚寺御所跡大沢池，私市丸山古墳，加茂御祖神社境内，遠所遺跡，（大阪府）狭山池，住友銅吹所跡，難波宮跡，大庭寺窯跡，紫金山古墳，池上曽根遺跡，心合寺山古墳，新池埴輪製作所跡，嶋上郡衙跡附寺跡，（兵庫県）赤穂城跡，小犬丸遺跡，播磨国分尼寺跡，玉津田中遺跡，篠山城跡，佃遺跡，山中遺跡，黒井城跡，淡河行原遺跡，溝之国遺跡，西条廃寺，銚子ヶ谷湿原，二ツ屋遺跡，（鳥取県）梶山古墳，南谷大山遺跡，上淀廃寺跡，羽衣石城跡，鳥取城跡，（島根県）天寺廃寺跡，岩見銀山遺跡下川原吹屋跡，後谷Ⅴ遺跡，上長浜貝塚，鳥ヶ崎遺跡，斐伊川放水路，（岡山県）備中松山城跡，美作国府跡，岡山城跡，山陽自動車道関係遺跡，（広島県）三ツ城古墳，冠遺跡群，草戸千軒町遺跡，別所古墳群，万徳院跡，（山口県）萩城跡，大内氏遺跡，長登銅山跡，（香川県）讃岐国分寺跡，有岡古墳群，（愛媛県）来住廃寺跡，古照遺跡，（徳島県）矢野遺跡，（福岡県）上の原古窯跡，太宰府史跡，鴻臚館跡，板付遺跡，雀居遺跡，（佐賀県）名護屋城跡・陣跡，基肄城跡，大黒町遺跡，馬群竹原遺跡群，（大分県）虚空蔵寺瓦窯跡，向野遺跡，ガランドヤ古墳群，大分元町石仏，瀬戸遺跡他，安国寺集落遺跡，（宮崎県）国衙・郡衙・古寺跡，蓮ヶ池横穴群，下村窯跡（熊本県），つつじヶ丘横穴群，大村横穴群，（沖縄県）浦添城跡，糸数城跡，友利遺跡，フルスト原遺跡，識名園

埋蔵文化財ニュース刊行

第75号　全国文化財データベースについて

第76号　1988年度刊行埋蔵文化財発掘調査報告書に関する情報調査

5　その他

委員会等

第19回飛鳥資料館運営協議会

1992年5月19日　於飛鳥資料館

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1992年6月5・6日　於平城宮跡資料館講堂

外国出張

沢田正昭　イースター島モアイ（石像）の保存科学的調査のため，チリへ出張

1992年4月7日～1992年4月20日

猪熊兼勝　イースター島モアイの調査研究のため，チリへ出張

1992年4月13日～1992年4月25日

千田剛道　渤海国関係遺跡調査のため，中華人民共和国へ出張

1992年4月27日～1992年5月7日

牛川喜幸　ドイツ連邦共和国との学術交流のため，ドイツへ出張

1992年5月8日～1992年5月17日

光谷拓実　年輪年代学の分科会出席のため，イタリアへ出張

1992年5月13日～1992年5月18日

小野健吉　雲南省ナシ族の居住様式と建築技術に関する調査と研究のため，中華人民共和国へ出張

1992年5月16日～1992年6月8日

浅川滋男　中国早期建築の民族考古学的研究のため，中国人民共和国へ出張

1992年5月16日～1992年8月30日

猪熊兼勝　百済古墳墓室構造の研究調査のため，大韓民国へ出張

1992年5月27日～1992年5月31日

町田　章　トルファン郊外交河故城保存計画に係わる現地調査のため，中華人民共和国へ出張

1992年7月1日～1992年7月8日

沢田正昭　考古遺物の保存科学的共同研究のため，大韓民国へ出張

1992年7月27日～1992年7月31日

岩永省三　ヨーロッパと日本の青銅器文化の比較研究のため，ドイツへ出張

1992年8月1日～1992年10月31日

猪熊兼勝　ポリネシア石造物の研究のため，アメリカへ出張

1992年8月2日～1992年8月9日
工楽善通　アムール川流域における初期鉄器文化（ボリツェ文化）の遺跡発掘調査のため，ロシアへ出張
1992年8月7日～1992年8月24日
杉山　洋　第8次上智大学アンコール遺跡研究国際調査団への参加のため，カンボジアへ出張
1992年8月8日～1992年8月28日
鈴木嘉吉，上原真人　日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究のため，中華人民共和国へ出張
1992年8月9日～1992年8月23日
町田　章　日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究のため，中華人民共和国へ出張
1992年8月9日～1992年8月24日
藤田盟児　伝統的文化財保存技術の調査研究のため，中華人民共和国へ出張
1992年8月9日～1992年8月23日
小池伸彦　伝統的文化財保存技術の調査研究のため，中華人民共和国へ出張
1992年8月9日～1992年8月24日
上野邦一　「アジア・西太平洋都市保存ネットワーク第1回シンポジウム」参加のためマレーシアへ出張
1992年8月14～1992年8月21日
西村　康　科学技術を利用した文化財研究法の開発のため，アメリカへ出張
1992年8月17日～1992年8月31日
猪熊兼勝　イースター島モアイの資料調査のため，チリ・アメリカへ出張
1992年8月24日～1992年8月31日
川越俊一　「古代の日本展」開催による出品文化財の保護・陳列等の現地指導のため，アメリカへ出張
1992年8月25日～1992年9月25日
猪熊兼勝，伊東太作，内田昭人　イースター島遺跡調査のため，チリへ出張
1992年9月8日～1992年9月19日
沢田正昭，肥塚隆保　パジリク王墓発掘に伴う出土品の保存科学に関する共同研究のため，ロシアへ出張
1992年9月22日～1992年9月30日
館野和己　「古代の日本展」開催による出品文化財の保護，陳列等の現地指導のため，アメリカへ出張
1992年9月22日～1992年10月31日
猪熊兼勝　百済研究国際学術大会参加のため，大韓民国へ出張
1992年9月28日～1992年10月2日
佐原　眞　国際シンポジウム「古代日本の芸術と技術」参加及びセーラムピーボディ博物館にて視察及び調査研究のため，アメリカへ出張
1992年9月30日～1992年10月10日
町田　章，工楽善通　国際シンポジウム「古代日本の芸術と技術」参加のため，アメリカへ出張
1992年9月30日～1992年10月5日
寺崎保広，西口壽生　日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究のため，中華人民共和国へ出張
1992年10月4日～1992年12月5日
毛利光俊彦　「古代の日本展」開催による出品文化財の保護，陳列等の現地指導及び出品文化財日本国返却に随伴のため，アメリカへ出張
1992年10月15日～1992年11月15日
小野健吉，小澤　毅，村上　隆　交河故城の調査研究のため，中華人民共和国へ出張
1992年10月22日～1992年11月4日
猪熊兼勝，安田龍太郎，臼杵　勲　パジリク文化古墳群に関する共同研究のため，ロシアへ出張
1992年10月24日～1992年11月2日
綾村　宏　アジアにおける寺院の研究のため，インド・インドネシアへ出張
1992年11月1日～1992年12月26日
沢田正昭　日韓における考古遺物の材質・技法に関する分析の比較研究のため，大韓民国へ出張
1992年11月5日～1992年11月12日
沢田正昭　イースター島モアイ石像保存調査のため，チリへ出張
1992年12月1日～1992年12月12日
鈴木嘉吉　伝統的文化財保存技術の調査研究のため，中華人民共和国へ出張
1993年1月8日～1993年1月17日
猪熊兼勝　イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査のため，チリへ出張
1993年1月9日～1993年1月24日
花谷　浩　イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査のため，チリへ出張
1993年1月9日～1993年2月25日
肥塚隆保，村上隆　日韓における考古遺物の材質・技法に関する分析の比較研究のため，大韓民国へ出張
1993年2月4日～1993年2月10日
佐川正敏　日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究のため，中華人民共和国へ出張
1993年2月15日～1993年2月27日
伊東太作，井上直夫　伝統的文化財保存技術の調査研究のため，中華人民共和国へ出張
1993年2月15日～1993年2月27日
猪熊兼勝　イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査のため，チリへ出張
1993年2月20日～1993年3月4日
森本　晋　イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査のため，チリへ出張
1993年2月23日～1993年3月30日

牛川喜幸，杉山　洋　アンコール遺跡研究・国際調査団に参加のため，カンボジアへ出張
1993年2月27日～1993年3月8日
高瀬要一　仏教遺跡の調査・保存整備に関する基礎的調査研究のため，ラオスへ出張
1993年3月5日～1993年3月21日
中村慎一　仏教遺跡の調査・保存整備に関する基礎的調査研究のため，ラオスへ出張
1993年3月5日～1993年3月19日
細見啓三，内田昭人　平城宮跡復原用木材の受給状況調査のため，台湾へ出張
1993年3月12日～1993年3月17日
伊東太作　イースター島遺跡の写真測量調査のため，チリへ出張
1993年3月17日～1993年3月30日
猪熊兼勝　イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査・指導及び助言のため，チリへ出張
1993年3月17日～1993年3月24日
山本忠尚　インド仏教遺跡の保存整備に関する調査のため，インドへ出張
1993年3月23日～1993年3月24日
寺崎保広　故宮博物院所蔵中国歴代文物及び中央語言研究所における漢簡調査の視察のため，台湾へ出張
1993年3月24日～1993年3月31日
猪熊兼勝　百済古墳築造方法の研究のため，大韓民国へ出張
1993年3月27日～1993年3月31日

協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており，1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが，1992年度の状況は下記のとおりである。

区　分	面　積	金　額
1992　年　度	5,357.07	279,998.364
国有地合計	339,399.95	24,689,158.912

Ⅱ　図書及び資料

図書　136,193冊　(1993.3.31)

区　分	種　別	購　入	寄　贈	計
1992年度	和漢書	1,515	5,524	7,039
	洋　書	47	125	172
累　計	和漢書	51,460	77,363	128,823
	洋　書	5,697	1,673	7,370

写真　493,464（1992年度末）

Ⅲ　研究成果刊行物

1　1992年度刊行物

名　称		
学　報	第51冊	平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅣ
	第52冊	西隆寺発掘調査報告書
史　料	第36冊	木器集成図録－近畿原始編－
	第37冊	梵鐘実測図集成（上）
図　録	第26冊	飛鳥の工房
報告書等	近世社寺建築の研究第三号	
	1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報	
	飛鳥・藤原宮発掘調査概報22	
	平城宮発掘調査出土木簡概報25	
	平城宮発掘調査出土木簡概報26	
	藤原京跡の便所（トイレ）遺構	

2　前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名　称	
1954	第1冊	仏師運慶の研究
	第2冊	修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊	文化史論叢
1956	第4冊	奈良時代僧房の研究
1957	第5冊	飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊	中世庭園文化史
	第7冊	興福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊	文化史論叢Ⅱ
	第9冊	川原寺発掘調査報告
1960	第10冊	平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊	院の御所と御堂―院家建築の研究―
1962	第12冊	巧匠安阿弥陀佛快慶
	第13冊	寝殿造系庭園の立地的考察
	第14冊	唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究
	第15冊	平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査
1963	第16冊	平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査
1965	第17冊	平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査
	第18冊	小堀遠州の作事
1967	第19冊	藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊	名物裂の成立

1971	第21冊	研究論集Ⅰ
1973	第22冊	研究論集Ⅱ
1974	第23冊	平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査
	第24冊	高山―町並調査報告―
1975	第25冊	平城宮左京三条二坊
	第26冊	平城宮発掘調査報告Ⅶ
	第27冊	飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ
	第28冊	研究論集Ⅲ
	第29冊	木曽奈良井―町並調査報告―
1976	第30冊	五条―町並調査の記録―
1977	第31冊	飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ
	第32冊	研究論集Ⅳ
	第33冊	イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告
	第34冊	平城宮発掘調査報告Ⅸ
1978	第35冊	研究論集Ⅴ
	第36冊	平城宮整備調査報告Ⅰ
1979	第37冊	飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ
	第38冊	研究論集Ⅵ
1980	第39冊	平城宮発掘調査報告Ⅹ
1981	第40冊	平城宮発掘調査報告 XI
1984	第41冊	研究論集Ⅶ
	第42冊	平城宮発掘調査報告 XII
	第43冊	日本における近世民家（農家）の系統的発展
1985	第44冊	平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告
1986	第45冊	薬師寺発掘調査報告
1988	第46冊	平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書
1988	第47冊	研究論集Ⅷ
1990	第48冊	年輪に歴史を読む―日本における古年輪学の成立―
	第49冊	研究論集Ⅸ
	第50冊	平城宮跡発掘調査報告書 XIII

奈良国立文化財研究所史料

年度	名　　称
1954	第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）
1955	第２冊　西大寺叡尊伝記集成
1963	第３冊　仁和寺史料　寺誌編１
1964	第４冊　俊乗坊重源史料集成
1966	第５冊　平城宮木簡１　図版
1967	第６冊　仁和寺史料　寺誌編２
1969	第５冊　平城宮木簡１　解説（別冊）
1970	第７冊　唐招提寺史料１
1974	第８冊　平城宮木簡２　図版・解説
	第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ
1975	第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ
1976	第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ
1977	第12冊　藤原宮木簡１　図版・解説
	第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ
1978	第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ
	第15冊　東大寺文書目録第１巻
1979	第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ
	第17冊　平城宮木簡３　図版・解説
	第18冊　藤原宮木簡２　図版・解説
	第19冊　東大寺文書目録第２巻
1980	第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ
	第21冊　東大寺文書目録第３巻
1981	第22冊　七大寺巡礼私記
	第23冊　東大寺文書目録第４巻
1982	第24冊　東大寺文書目録第５巻
	第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ
1983	第26冊　東大寺文書目録第６巻
1984	第27冊　木器集成図録―近畿古代編―
1985	第28冊　平城宮木簡４　図版・解説
	第29冊　興福寺典籍文書目録第１巻
1988	第30冊　山内清男考古資料１　真福寺貝塚資料他
	第31冊　平城宮出土墨書土器集成　Ⅱ
1989	第32冊　山内清男考古資料２
1991	第33冊　山内清男考古資料３
	第34冊　山内清男考古資料４
	第35冊　山内清男考古資料５

奈良県国立文化財研究所基準資料

年度	名　　称
1973	第１冊　瓦編１　解説
1974	第２冊　瓦編２　解説
1975	第３冊　瓦編３
1976	第４冊　瓦編４
	第５冊　瓦編５
1978	第６冊　瓦編６
1979	第７冊　瓦編７
1980	第８冊　瓦編８
1983	第９冊　瓦編９

飛鳥資料館図録

年度	名　　称
1976	第１冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏
	第２冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇
1977	第３冊　日本古代の墓誌
1978	第４冊　日本古代の墓誌　銘文篇
	第５冊　古代の誕生仏

1979	第6冊	飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—
1980	第7冊	日本古代の鴟尾
1981	第8冊	山田寺展
1982	第9冊	高松塚拾年
1983	第10冊	渡来人の寺—桧隈寺と坂田寺—
	第11冊	飛鳥の水時計
	第12冊	小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—
1984	第13冊	藤原宮—半世紀にわたる調査と研究—
1985	第14冊	日本と韓国の塑像
	第15冊	飛鳥寺
1986	第16冊	飛鳥の石造物
1987	第17冊	萬葉乃衣食住
	第18冊	壬申の乱
1988	第19冊	古墳を科学する
	第20冊	聖徳太子の世界
1989	第21冊	仏舎利埋納
	第22冊	法隆寺金堂壁画飛天
1990	第23冊	日本書記を掘る
1991	第24冊	飛鳥時代の埋蔵文化財に関する—考察
	第25冊	飛鳥の源流

Ⅳ 定 員

区 分	指定職	行政職(一)	行政職(二)	研究職	計
1992年度	1	22	2	61	86
1993年度	1	22	2	61	86

Ⅴ 予 算（1992年度）

人 件 費	682,557千円
運 営 費	944,634
事 業 管 理	7,609
一 般 研 究	59,008
特 別 研 究	123,643
発 掘 調 査	528,706
宮跡整備管理	71,248
飛鳥資料館運営	52,396
埋蔵文化財センター運営	50,024
本庁舎維持管理等経費	27,638
飛鳥藤原宮跡発掘調査部運営	24,362
施 設 費	419,041
施設整備費	50,310
平城宮跡等整備費	357,410
各所修繕費	11,321
計	2,046,232

Ⅵ 施 設

土 地

奈良国立文化財研究所所管	47,890
本庁舎	8,860㎡
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	20,515㎡
飛鳥資料館	17,092㎡
郡山宿舎(二)	80㎡
飛鳥資料館宿舎	1,343㎡
文化庁所管（関係分）	1,421,668㎡
平城宮跡地区	1,083,281㎡
藤原宮跡地区	339,399㎡
飛鳥稲淵宮殿跡地区	5,041㎡

建 物　28,521㎡

1．庁 舎　28,053㎡

区 分	本庁舎	平城	藤原	飛鳥資料館	藤原宮跡	計
	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡
事務室	568	122	197	90		977
研究・整理室	1,419	1,642	1,205	77		4,069
資料・図書室	1,021		383	36		1,440
会議室	338		129	42		509
講堂		384	210	89		683
展示室		845	254	648		1,747
写真室	79	256	149	64		548
遺構展示室		1,408				1,408
車庫	84	968	352	94		1,498
倉庫・収蔵庫	123	4,728	2,041	480		7,372
研修棟	1,416					1,416
その他	1,673	2,026	1,506	1,061	36	6,302
計	6,721	12,379	6,426	2,681	36	28,243

2．宿舎等	486㎡
重要文化財旧米谷家住宅	213㎡
郡山宿舎(二)	48㎡
飛鳥資料館宿舎	225㎡

主要工事

(1) 平城宮跡地等整備費	千円
平城宮跡宮内省復原工事	122,808
平城宮跡朱雀門周辺整備工事	19,126
平城宮跡第1次大極殿地区整備工事	27,197
平城宮跡佐紀池護岸工事	11,428
平城宮跡案内板設置工事	13,647
平城宮跡内高圧電機設備改修	36,968
藤原宮跡環境整備工事	185,400
(2) 官庁営繕費	
奈良国立文化財研究所防水改修工事	50,264

(3) その他（各所修繕・庁費）

平城宮跡第3収蔵庫1階保存科学実験室改修空調設備その他工事	3,965
埋蔵文化財センター研修棟1階機械室ボイラー取替工事	1,545
飛鳥資料館宿舎外構整備等工事	2,369

Ⅶ 人事異動（1992.4.1～1993.3.31）

4月1日 奈良国立文化財研研究所長（再任）
鈴木 嘉吉
庶務部庶務課長に昇任 馬場祐次朗
飛鳥資料館庶務室長に昇任 家村 庸男
庶務部庶務課長補佐に昇任 宮谷 浩
庶務部会計課長補佐に昇任 渡邊 康史
庶務部会計課経理係長に昇任
年梅 徹
埋蔵文化財センター教務室教務係長に昇任 川嶌 保夫
埋蔵文化財センター長に昇任
佐原 眞
埋蔵文化財センター研究指導部長に昇任 猪熊 兼勝
埋蔵文化財センター研究指導部集落遺跡研究室長に昇任 山中 敏史
飛鳥資料館学芸室長に配置換
工楽 善通
飛鳥藤原宮跡発掘調査部に配置換
島田 敏男
埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官に配置換 立木 修
文部技官（庶務部会計課）に採用
上垣内茂樹
文部技官（平城宮跡発掘調査部）に採用 内田 和伸
研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用 村田 和弘
文化庁文化財保護部文化財鑑査官に転任 田中 琢
京都工芸繊維大学庶務課長に転任
中川 良和
奈良工業高等専門学校会計課長に転任
柿本 治
京都大学庶務部庶務課長補佐に転任
石塚 幸男
京都大学医学部附属病院医事課長補佐に転任 津田富士夫
大阪大学附属図書館情報管理課会計掛長に転任 新湯 淳史
京都大学薬学部会計掛に転任
新井 伸一

4月16日 事務補佐員（飛鳥資料館）に採用
森井恵三子

5月7日 事務補佐員（庶務部会計課）に採用
上村 敬子

5月11日 辞職 小坂由紀子

6月1日 事務補佐員（飛鳥資料館）に採用
米川まち子

7月1日 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
浅川 滋男
平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
小野 健吉
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任 花谷 浩
埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官に昇任 村上 隆

8月1日 辞職 佐伯 博光

8月13日 辞職 溝上 裕子

1月1日 技能補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用 木寅 貢志

3月31日 文化庁長官官房総務課専門員に転任（日本芸術文化振興会第二国立劇場（仮称）準備室専門員就任予定）
松岡 進
天理大学文学部に転任 山本 忠尚
奈良市教育委員会社会教育部に転任
安田龍太郎
辞職 平山 重利

Ⅷ　組織規定

文部省組織令＜抜粋＞

昭和59年6月28日　政令第227号

第2章　文化庁

第3節　施設等機関

（施設等機関）

第108条　文化庁長官の所轄の下に，文化庁に国立国語研究所を置く。

2　前項に定めるもののほか，文化庁に次の施設等機関を置く。

（中略）

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2　国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

3　国立文化財研究所及びその支所の名称，位置及び内部組織は，文部省令で定める。

文部省設置施行規則＜抜粋＞

昭和28年1月13日　文部省令第2号

第5章　文化庁の施設等機関

第4節　国立文化財研究所

第1款　名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9　国立文化財研究所の名称及び位置は，次の表に掲げるとおりとする。

名　　称	位　　置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第2款　奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条　奈良国立文化財研究所に，所長を置く。

2　所長は，所務を掌理する。

（内部組織）

第124条　奈良国立文化財研究所に，庶務部，建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2　前項に定めるもののほか，奈良国立文化財研究所に，飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条　庶務部に，次の二課を置く。

一　庶務課

二　会計課

2　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

一　職員の人事に関する事務を処理すること。

二　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四　この研究所の所掌事務に関し，連絡調整すること。

五　この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

3　会計課においては，次の事務をつかさどる。

一　予算に関する事務を処理すること。

二　経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四　庁舎及び設備の維持，管理に関する事務を処理すること。

五　庁内の取締りに関すること。

第126条　削除

（建造物研究室等の事務）

第127条　建造物研究室においては，建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

2　歴史研究室においては，考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

（平城宮跡発掘調査部の六室及び事務）

第128条　平城宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，考古第三調査室，遺構調査室，計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，平城宮跡に関し，次項から第6項までに定める事務を処理するほか，その発掘を行う。

3　考古第一調査室，考古第二調査室及び考古第三調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5　計測修景調査室においては，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務）

第129条　飛鳥藤原宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，遺構調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関し，次項から第5項までに定める事務を処理するほか，その発掘を行う。

3　考古第一調査室及び考古第二調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査

研究，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥資料館）

第130条　飛鳥資料館においては，飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し，国民の理解を深めるため，この地域に関する考古資料，歴史資料その他の資料を収集し，保管して公衆の観覧に供し，あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

（飛鳥資料館の館長）

第131条　飛鳥資料館に，館長を置く。

2　館長は，館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

第132条　飛鳥資料館に，庶務室及び学芸室を置く。

2　庶務室においては，飛鳥資料館の庶務，会計等に関する事務を処理する。

3　学芸室においては，次の事務をつかさどる。

一　飛鳥地域に関する考古資料，歴史資料，建造物，絵画，彫刻，典籍，古文書その他の資料の収集，保管，展示，模写，模造，写真の作成，調査研究及び解説を行うこと。

二　飛鳥地域に関する図書，写真その他の資料の収集，整理，保管，展示，閲覧及び調査研究を行うこと。

三　飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

（埋蔵文化財センター）

第133条　埋蔵文化財センターにおいては，次の事務をつかさどる。

一　埋蔵文化財に関し，調査研究及びその結果の公表を行うこと。

二　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して，専門的，技術的な研修を行うこと。

三　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，専門的，技術的な指導及び助言を行うこと。

四　埋蔵文化財に関する情報資料の作成，収集，整理，保管及び調査研究を行い，並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，その利用に供すること。

（埋蔵文化財センターの長）

第134条　埋蔵文化財センターに長を置く。

2　前項の長は，埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

第135条　埋蔵文化財センターに，教務室，研究指導部及び情報資料室を置く。

（教務室の事務）

第136条　教務室においては，研修の実施に関する事務を処理するほか，埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

（研究指導部の六室及び事務）

第137条　研究指導部に，考古計画研究室，集落遺跡研究室，発掘技術研究室，遺物処理研究室，測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2　考古計画研究室においては，第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

3　集落遺跡研究室においては，集落遺跡に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務（発掘技術研究室，遺物処理研究室，測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

4　発掘技術研究室においては，遺跡の発掘技術に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5　遺物処理研究室においては，遺物の処理に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

6　測量研究室においては，埋蔵文化財の測量に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

7　保存工学研究室においては，遺跡の保存整備に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

（情報資料室の事務）

第138条　情報資料室においては，第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

（客員研究員）

第139条　奈良国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2　客員研究員は，所長の命を受け，奈良国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3　客員研究員は，非常勤とする。

改正　昭和43年6月15日　文部省令第20号
昭和45年4月17日　文部省令第11号
昭和48年4月12日　文部省令第6号
昭和49年4月11日　文部省令第10号
昭和50年4月2日　文部省令第13号
昭和51年5月10日　文部省令第16号
昭和52年4月18日　文部省令第10号
昭和53年4月5日　文部省令第19号
昭和53年9月9日　文部省令第33号
昭和55年4月5日　文部省令第14号
昭和55年6月25日　文部省令第23号
昭和58年10月1日　文部省令第25号
昭和59年6月30日　文部省令第37号
昭和63年4月8日　文部省令第12号

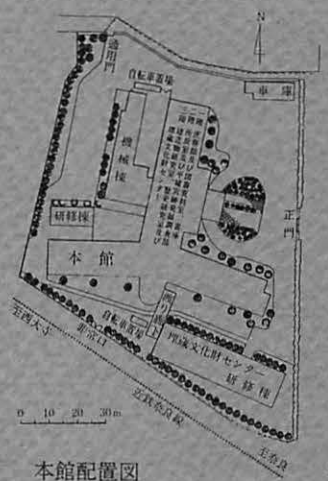
職　員　(1993年7月1日現在)

所属	氏名	官職	担当
	鈴木　嘉吉	文部技官　所長	
庶務部 庶務課	小菅　康男	文部事務官　部長	
	馬場祐次朗	文部事務官　課長	
	宮谷　浩	文部事務官　課長補佐	
	西田　健三	文部事務官　専門職員	平城事務
	美濃越　進	文部事務官　庶務係長	
	桑原　隆佳	文部事務官	庶務人事
	岡田　博旡	文部事務官　警務長	警務
	港　悦子	事務補佐員	庶務
	大西　和子	事務補佐員	庶務
	福本　良子	事務補佐員	庶務
	新宮　恵子	事務補佐員	庶務
	巽　月子	事務補佐員	庶務
	本中　宣代	事務補佐員	図書資料
	中川かよ子	事務補佐員	図書資料
	中垣　睦美	事務補佐員	図書資料
	石川千恵子	研究補佐員	公開
	奥村　功	技能補佐員	保守
庶務部 会計課	萩原　寿郁	文部事務官　課長	
	福田　八郎	文部事務官　課長補佐	
	渡邊　康史	文部技官　課長補佐	
	坂上　定敬	文部技官　専門職員	施設
	櫻井　雅樹	文部事務官　専門職員	藤原事務
	年梅　徹	文部事務官　経理係長	
	林　正一郎	文部事務官　経理主任	
	宍戸　雅子	事務補佐員	経理
	森本はぎ子	事務補佐員	経理
	小林　玉美	事務補佐員	経理
	幸田恵里子	事務補佐員	経理
	小林　雅文	文部事務官　用度係長	
	松本　正典	文部事務官	用度
	飯田　信男	文部技官	自動車運転
	林　和子	事務補佐員	用度
	上村　敬子	事務補佐員	用度
	坂上　定敬	文部技官　施設係長（兼任）	
	小園　秀彦	文部技官	施設
	上垣内茂樹	文部技官	施設
	永井　和代	事務補佐員	施設
	米田　淳子	事務補佐員	施設
建造物研究室	細見　啓三	文部技官　室長	建築
	山岸　常人	文部技官　（併任）	建築
	小野　健吉	文部技官　（併任）	遺跡庭園
	島田　敏男	文部技官　（併任）	建築
	藤田　盟児	文部技官　（併任）	建築
歴史研究室	綾村　宏	文部技官　室長	歴史
	西口　壽生	文部技官　（併任）	考古
	橋本　義則	文部技官　（併任）	歴史
	小澤　毅	文部技官　（併任）	考古
	渡邊　晃宏	文部技官　（併任）	歴史
	森本　晋	文部技官　（併任）	考古

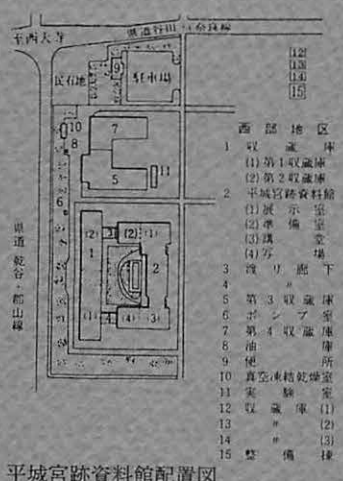
所属	氏名	官職	担当
平城宮跡発掘調査部	町田　章	文部技官　部長	
考古第一調査室	小林　謙一	文部技官　室長	考古
	中村　慎一	文部技官	考古
	臼杵　勲	文部技官	考古
	小池　伸彦	文部技官　（併任）	考古
考古第二調査室	毛利光俊彦	文部技官　室長	考古
	玉田　芳英	文部技官	考古
	巽　淳一郎	文部技官　（併任）	考古
	杉山　洋	文部技官　（併任）	考古
考古第三調査室	山崎　信二	文部技官　室長	考古
	岸本　直文	文部技官	考古
	次山　淳	文部技官	考古
	小澤　毅	文部技官　（併任）	考古
遺構調査室	町田　章	文部技官　室長（事務取扱）	考古
	藤田　盟児	文部技官	建築
	山岸　常人	文部技官　（併任）	建築
	浅川　滋男	文部技官　（併任）	建築
計測修景調査室	高瀬　要一	文部技官　室長	遺跡庭園
	内田　和伸	文部技官	遺跡庭園
	小野　健吉	文部技官　（併任）	遺跡庭園
史料調査室	館野　和己	文部技官　室長	歴史
	渡邊　晃宏	文部技官	歴史
	寺崎　保広	文部技官　（併任）	歴史
	森　公章	文部技官　（併任）	歴史
	巽　淳一郎	文部技官　主任研究官	考古
	山岸　常人	文部技官　主任研究官	建築
	寺崎　保広	文部技官　主任研究官	歴史
	杉山　洋	文部技官　主任研究官	考古
	小野　健吉	文部技官　主任研究官	遺跡庭園
	浅川　滋男	文部技官　主任研究官	建築
	小池　伸彦	文部技官　主任研究官	考古
	小澤　毅	文部技官　主任研究官	考古
	森　公章	文部技官　主任研究官	歴史
	西田　健三	文部事務官　事務総括（兼任）	事務
	岡田　博旡	文部事務官　（兼任）	警備
	佃　幹雄	文部技官　専門員	写真
	井上　直夫	文部技官　専門職員	写真
	牛嶋　茂	文部技官　専門職員	写真

所属		氏名	官職	担当
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	考古第一調査室	牛川　喜幸	文部技官部長	
		黒崎　直	文部技官室長	考古
		深澤　芳樹	文部技官（併任）	考古
		花谷　浩	文部技官（併任）	考古
		井上　直夫	文部技官（併任）	写真
	考古第二調査室	大脇　潔	文部技官室長	考古
		西口　壽生	文部技官（併任）	考古
		肥塚　隆保	文部技官（併任）	考古
		岩永　省三	文部技官（併任）	考古
	遺構調査室	金子　裕之	文部技官室長	考古
		島田　敏男	文部技官	建築
		松本　修自	文部技官（併任）	建築
		本中　真	文部技官（併任）	遺跡庭園
	史料調査室	川越　俊一	文部技官室長	考古
		橋本　義則	文部技官（併任）	歴史
		佐川　正敏	文部技官（併任）	考古
		肥塚　隆保	文部技官主任研究官	保存科学
		西口　壽生	文部技官主任研究官	考古
		松本　修自	文部技官主任研究官	建築
		本中　真	文部技官主任研究官	遺跡庭園
		深澤　芳樹	文部技官主任研究官	考古
		橋本　義則	文部技官主任研究官	歴史
		佐川　正敏	文部技官主任研究官	考古
		岩永　省三	文部技官主任研究官	考古
		花谷　浩	文部技官主任研究官	考古
		櫻井　雅樹	文部事務官　事務総括（兼任）	事務
		吉岡佐和子	事務補佐員	事務
		松本　誠	技能補佐員	
		木寅　貢志	技能補佐員	保守
		宮川　伴子	研究補佐員	資料整理
		伊藤　武	研究補佐員	考古
		村田　和弘	研究補佐員	考古
		荒木　浩司	研究補佐員	考古
		伊藤敬太郎	研究補佐員	考古
飛鳥資料館		鈴木　嘉吉	文部技官館長（事務取扱）	
	庶務室	家村　庸男	文部事務官室長	
		中西　建夫	文部事務官庶務主任	
		乾　春雄	技能補佐員	保守
		藤本　清	警務補佐員	警備
		福井　敏子	業務補佐員	庁務
		森井恵三子	業務補佐員	庁務
		米川まち子	業務補佐員	庁務
	学芸室	工楽　善通	文部技官室長	考古
		岩本　圭輔	文部技官主任研究官	考古
		千田　剛道	文部技官主任研究官	考古
		大谷　照子	事務補佐員	事務

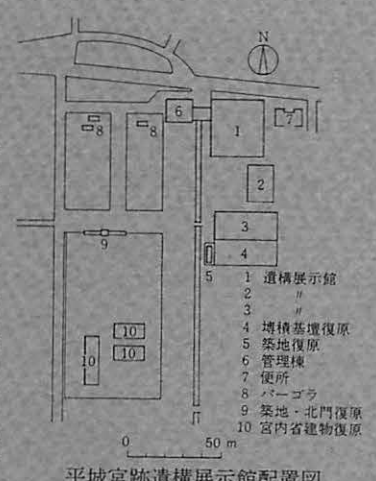
所属		氏名	官職	担当
埋蔵文化財センター		河原　純之	文部技官センター長	
	教務室	臼井　国明	文部事務官室長	
		川嶌　保夫	文部事務官教務係長	事務
		岩永　恵子	事務補佐員	事務
		牛嶋　茂	文部技官（併任）	写真
	研究指導部	猪熊　兼勝	文部技官部長	
	考古計画研究室	松沢　亜生	文部技官室長	考古
		立木　修	文部技官（併任）	考古
	集落遺跡研究室	山中　敏史	文部技官室長	考古
		上原　真人	文部技官（併任）	考古
	発掘技術研究室	西村　康	文部技官室長	考古
		松井　章	文部技官（併任）	考古
	遺物処理研究室	沢田　正昭	文部技官室長	保存科学
		村上　隆	文部技官（併任）	保存科学
	測量研究室	木全　敬蔵	文部技官室長	測量
		光谷　拓実	文部技官（併任）	遺跡庭園
		松井　章	文部技官（併任）	考古
	保存工学研究室	猪熊　兼勝	文部技官室長（事務取扱）	考古
		内田　昭人	文部技官（併任）	建築
		光谷　拓実	文部技官主任研究官	遺跡庭園
		上原　真人	文部技官主任研究官	考古
		内田　昭人	文部技官主任研究官	建築
		立木　修	文部技官主任研究官	考古
		松井　章	文部技官主任研究官	考古
		村上　隆	文部技官主任研究官	保存科学
		森本　晋	文部技官主任研究官	考古
	情報資料室	伊東　太作	文部技官室長	測量
		森本　晋	文部技官（併任）	考古



本館配置図

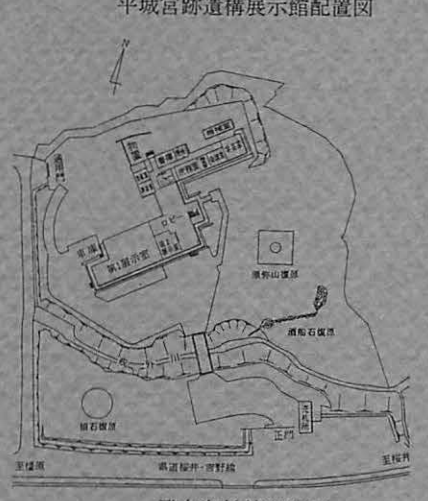


平城宮跡資料館配置図

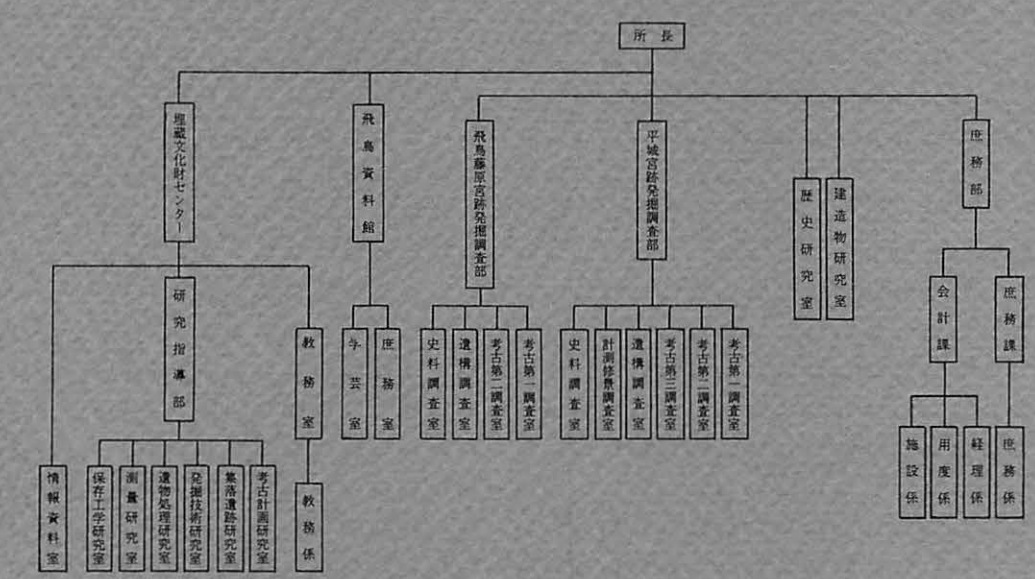


平城宮跡遺構展示館配置図

飛鳥藤原宮跡発掘調査部配置図



飛鳥資料館配置図



ANNUAL BULLETIN
OF
THE NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
1993

Table of Contents

Excavations Page

Temple sites in the Asuka area ····· 1
Temple sites in the Nara Capital ····· 4
Palace sites in the Asuka area ····· 9
Fujiwara Palace and Capital sites ····· 14
Nara Palace and Capital sites ····· 23

Laboratory researches

Roof tiles of the Fujiwara Palace and Capital ····· 36
Eaves tiles produced by same molds as and different molds from those of the Nara Palace tiles ····· 38
Imported black stonewares from ditch SD2700 in the Nara Palace site ····· 39
Wooden tablets from the Nara Palace and Capital sites ····· 40
List of the Buddhist sutras at the Ishiyama-dera temple ····· 42
Three dimensional measurement system for bulbar surface ····· 46
Preliminary study of dendrochronology (3) ····· 48
Investigations into faunal remains at archaeological sites (8) ····· 49
Conservation science for stones from Asuka area (2) ····· 50
Chemical composition of glass artifacts dated to the Asuka through Nara Periods (ca. late 6th to 8th centuries) ····· 51
Comparative studies on materials and production techniques of Korean and Japanese artifacts ····· 52
Image analysing system for deciphering wooden tablet inscriptions using IR ····· 53

Reconstruction and restoration studies

First imperial audience hall of the Nara Palace ····· 54
First imperial audience hall compound of the Nara Palace ····· 55
Roof of the second imperial audience hall of the Nara Palace ····· 56
Reconstruction of Zutô, a square earthen pagoda with stone Buddhist images, proposed by Dr. Yang Hongxun ····· 60
Restoration of the Nara and Fujiwara Palace sites ····· 61

Investigation into architectural history

Modern Japanese style architecture before the Second World War in Shiga pref. ····· 58

International research activities

Temple sites in Indonesia and Cambodia ····· 65
Architectural studies and excavations of city sites in China ····· 66
Ahu Tongariki Site in Easter Island, Chile ····· 68
The special exhibition "Ancient Japan" at the Authur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution ····· 69

Institution news

Special exhibitions at the Asuka Historical Museum ····· 70
Public lectures held by the Institute in 1993 ····· 71
Miscellaneous researchs and surveys ····· 72
Activities of the Institute ····· 73
Organization of the Institute ····· 83

Published by

Nara National Cultural Properties Research Institute

Nara, 1993